

アムールトラ／ビーストのきせき

今日坂

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

けものフレンズ2の二次創作小説です。

アムールトラを主人公とし、彼女の生い立ちやなぜビーストと呼ばれるようになったのか、

イエイヌとヒト（ご主人）とのやり取り、

かばんちゃんとサーバルは、なぜ離れることになったのか、

フウチョウコンビの目的はなんなのか、

キュルルはなぜ生み出されたのか、

どうしてヒトはいなくなったのかなど、

あくまで個人の想像ですが、最後はみんなが笑顔になるお話です。

アニメや漫画では語られなかった部分を自分なりに考えて書きました。オリジナルキュルルの隣にいたのがアムールトラだったらコンセプトに、アニメ版、漫画版のストーリーをアレンジしています。

また、ネクソン版やわーるどの設定も、拾ったり改変したりしています。

pixivとカクヨムにも載せています。

アニメや漫画で語られた部分の描写は控えめにしてあるので、物語のあらすじを知らないと分からない箇所があります。

アムールトラとビーストが出てくるので、けもエビというタグをつけています。

けものフレンズAmur/Beast

↓けもフレA/B

↓  
ひもエビ

目次

第1話	○放浪	1
第2話	○ジャパリパーク	6
第3話	○あの子との出会い	13
第4話	○迷子のロック	18
第5話	○襲撃事件	29
第6話	○ビースト計画(プロジェクト)	34
第7話	○目覚め	42
第8話	○かばんちゃんとサーバルキャット	46
第9話	●ビーストの旅立ち	52
第10話	●揺れる思い	58
第11話	●理解者	71
第12話	●ごめんなさい	75
第13話	●2人の軌跡	81
第14話	●あの日約束	84
第15話	●ジャパリホテル	89
第16話	●真実	96
第17話	●はじめてのありがとう	103
第18話	●永遠に(ずっと)一緒	107
第19話	●けもハーモニー	112
第20話	●ただいま	120
第21話	●それぞれの時間(とき)へ	125
第22話	☒おちやかい	133
第23話	☒おたんじょうび	136
番外編1	贈り物	140

番外編 2 灰色の街 ㄥ もうすぐヒトはいなくなる ㄥ | 143  
番外編 3 やあ、久しぶり。 ㄥ 懐かしい場所とお友達 ㄥ

149

番外編 4 なんて言ってるの? ㄥ 君の影 ㄥ | 157

番外編 5 : 思い出した! ㄥ 君との約束 ㄥ | 164

番外編最終話 君の傍で | 169

## 第1話 ○放浪

どこかの国の森の中。あちらでは鬱蒼と草木が生い茂り、こちらでは綺麗な小川がサラサラと流れている。暖かな日差しに照らされた木々の葉が、爽やかな風にサワサワと揺れている。この豊かな森には、多くの動物達が暮らしていた。

すると突然、茂みからガサガサという音と共に、小さなネズミとそれを追いかけるトラの子供が飛び出してきた。そしてトラの子は、前足を目一杯伸ばしてネズミに振り下ろした。押さえ付けたかに思えたが、ネズミは必死に体をよじらせて前足から抜け出すと、あっという間に消え失せてしまった。

トラの子が呆然としてみると、後ろから母親と、兄と姉が現れた。彼女らはアムールトラ、この森で家族仲良く暮らしていた。

その子は「逃げられちゃった」と目で訴えながら、トテトテと3匹の方へと歩いていった。この子は三兄妹の末っ子で、とても甘えん坊でいつも誰かにくっついていていた。まだまだ狩りは練習中で、兄妹の中で一番下手だった。

ある日、母親のそばで兄妹と遊んでいると、森の入り口から聞いたことがない大きな音がした。

ギューイイイン!!!

メキメキメキ…、ズシイイン!

そして今度は、大きな木の倒れる音が聞こえてきた。異変を感じた母親は、兄妹を連れてさらに森の奥へと入っていった。

その日、大きな音はいつまでも続いていた。

翌日、兄妹が目覚めると母親がいなくなっていた。いつものようにご飯を探しに出かけたのだろうと思っていたが、いつまで経っても帰ってこなかった。

さらに翌日、一番上の兄が母親を探しに出かけた。ところが兄も、それつきり帰ってこなかった。

アムールトラはお腹を空かせながら、姉と一緒に母と兄が帰ってくるのを待ち続けた。すると、どこからかパチパチという音が聞こえて

きて、煙の臭いがし始めた。

2人が不安そうに辺りを見回していると、突如向こう側の木々が激しく燃え上がった。そして空が赤くなり、熱い風が吹いてきた。

それから森の動物たちの悲鳴や、逃げ惑う足音が至る所から聞こえてきた。2人は恐ろしくなって、そこから一目散に逃げ出した。

アムールトラは死に物狂いで走り続けたが、気がつくと一緒にいたはずの姉の姿が見えなくなっていった。急に一人ぼっちになってしまったアムールトラは、心細くて仕方なかった。

「お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、みんなどこなの!?!?」

キョロキョロしながら必死に走り回っていると、鼻先にポツンと雨粒が落ちてきた。

しばらくすると、激しい雨が降ってきた。燃え盛っていた炎は消え、真つ黒になった木からぶすぶすという音と煙が上がり、焦げくさい臭いがあたりに広がった。

焼けたのは草木だけではなかった。逃げ遅れ、炎と煙にまかれて力尽き、原型を留めないほどに焼けただれた動物達の死骸が、あちらこちらに散らばっていた。

土砂降りの雨が降りしきる中、アムールトラは家族を探しながら森の中を駆けずり回った。

それから毎日探し歩いたが、見つける事はできなかった。

ある日、空腹と疲労でふらふらしながら歩いていると、小高い丘の上に出た。そこから見下ろすと、草木がなくなり裸になった森が目の前に広がっていた。

そこには鉄の二オイがする光る物が沢山あった。

形も大きさもいろいろで、向こうでは四角い体をしたでかいのが、丸い足で動き回っていた。

そのあまりの光景に、アムールトラは困惑しながら立ち尽くしていた。

パアンツ!

不意に背後から大きな音がしたかと思うと、体に激痛が走った。

とつさに痛いところを見てみると、腹から赤い血が溢れ出ていた。そして力が抜けてゆき、アムールトラはそのまま意識を失ってしまった。

すると茂みの中から、銃を持った4人の男達が現れた。

彼らは違法な開発業者と手を組んだ密猟者で、作業員を危険から守るという名目で、森の動物達を捕まえては金に変えていた。

特にトラの骨や内臓、爪や牙などは薬や装飾品として珍重され、高い値がついた。

彼らはニヤニヤしながらアムールトラに近付いてきた。その中の一人がこう言った。

「これで4頭目、ついてるな。」

そして上機嫌で懐に手を伸ばしたが、仲間止められた。

「おっとタバコはやめとけ。また火事になったらどうすんだ。」

「ちえ、分かってらあ。」

とどめを刺すために、そいつはアムールトラの脳天に銃口を突きつけた。

ところが引き金を引こうと指先に力を込めた瞬間、仲間が声を上げた。

「やばい！警備のヤツらが来たぞ！ずらかれっ！」

密猟者達は、アムールトラを置いて素早く車で逃げて行った。

そこへ、ここら一带をパトロールしている警備員達がやって来た。

彼らはアムールトラにまだ息があるのを確認すると、急いで治療センターへと連れて行った。

献身的な治療により、アムールトラは一命を取り留めた。しばらくすると傷も塞がり、すっかり元気になった。

しかしここには、大型の肉食獣を飼育し続ける設備がなかった。かといって、違法な開発や密猟が横行しているこの森に返すことはできない。

職員が近隣の野生動物の保護施設や動物園などに片っ端から電話をしたが、どこも怪我をした動物でいっぱいだった。



引き取り先が見つからず困り果てていると、とある小さなサーカス団から連絡が来た。

彼らは動物を扱ったショーをしながら各地を回っていたが、ショーの主役だったトラが老衰で死んでしまい、代わりを探していたのだ。こうしてアムールトラはそのサーカス団に引き取られ、ショーをしながらあちこちを旅することとなった。始めは警戒していたが、甘えん坊で人懐っこい性格だったため、しだいに打ち解けてゆき、少しずつ芸も覚えていった。

体もすくすくと成長し、翌年には見違えるほど立派な姿となった。アムールトラは飲み込みが早く、演技も素晴らしかった。華やかな音楽に合わせてしなやかに動くその姿に観客は魅了され、惜しみない拍手を送った。

このサーカス団は数名の人間と動物達で構成されていた。その中に、アムールトラの調教を担当するみなしごの少年がいた。

家族がいない者同士通じ合うものがあつたようで、苦楽を共にするうちに2人はすっかり仲良くなり、いつも一緒に過ごすようになっていた。いつしかアムールトラは、声を聞くだけで彼の考えが感じ取れるようになっていた。

ある日、一行は次の公演先を探して小型の船に乗った。

アムールトラは他の動物達と共に貨物室に乗せられた。檻の中でおとなしくしていたが、しばらくすると急に表が騒がしくなった。

船は突然の大嵐に見舞われた。凄まじい豪雨と共に暴風と大波が押し寄せ、船は航路を外れて流されていった。

団員達は船に備え付けられていた電話で必死に助けを求めたが、悪天候で救助隊はそこに向かう事ができなかつた。

波はますます大きくなり、船が激しく揺れはじめた。

貨物室の中は動物達の悲鳴でいっぱいだった。

激しい音と共に天地が逆転し、アムールトラは檻ごと壁に叩きつけられた。すると檻がひしゃげると同時に、大量の海水が流れ込んできた。

アムールトラがパニックになっている所へ、あの少年が水をかき分けながらやってきた。そしてなんとか檻の鍵を開けると、必死に叫んだ。

少年「早く出るんだ！船が沈む！君だけでも生き延びてくれ！」  
彼の思いが伝わってきて、こんな状況でも少しだけ落ち着く事ができた。

大波が襲いかかってくる、とうとう船はひっくり返り、波に飲まれてバラバラになった。

仲間たちは、泣き叫びながら荒れ狂う海に消えていった。

アムールトラも檻ごと海に投げ出された。かろうじてそこから抜け出したものの、どんなにもがいても浮かび上がる事ができなかった。しだいに意識が遠のいてゆき、体が暗い海の底へと沈んでいった。

するとアムールトラの周りに、キラキラしたものがどんどん集まってきた。そして体が光り輝き、徐々に変化していった。

船が沈んだそばには、巨大な島の影が浮かんでいた。

潮の流れが変わり、アムールトラは海岸へと流されていった。

## 第2話 ○ジャパリパーク

注)アプリ版とは違い、女王セルリアン事件が開園直前に起こっています。

? 「こんなところで寝てると風邪ひくよ。」

誰かの声がして、アムールトラは目を覚ました。

すると目の前に見た事のない動物がいた。その子は二本足で立っていて、袖のない白いシャツ、蝶ネクタイのついた襟巻きとスカート、それと長い手袋とソックスは黒い斑点模様のある金色で、黒いリボンが結ばれた白い靴を履いていて、お尻からは縞模様の尻尾が生えている。

穏やかな光に照らされた金色のショートヘアが風で揺れていて、前髪にはM字型の模様があり、頭の上にはひときわ目を引く大きな耳が動いていた。

? 「びしょ濡れだね。あんな雨の日に泳いでたの? 危ないよ。」

あたりを見渡すと、そこは見知らぬ海岸だった。

どうやら気絶している間に流れ着いたらしい。周囲には船の残骸らしき木片が散らばっていた。

「ハハハ……」

突然口から聞いた事がない音がした。彼女はギョツとして起き上がると、咄嗟に両手で口を覆った。

『今の音は何? もしかして私が喋ったのか?』

それになんだか体がおかしい。恐る恐る手を見てみると、白くて華奢な10本の指があった。

慌てて体中を見回すと、あちこちが伸びたり縮んだりしていて、ヒトのような姿になっていた。

毛皮が生え変わり、上半身は白いシャツの上に赤とオレンジのチエック柄のジャケット、下半身はオレンジ色のハーフパンツに長いブーツとガーターベルト、首には真っ赤な蝶ネクタイと、まるでサーカス団員かマジシャンのような格好だった。頭を触ってみると、く

せつ毛でボリュームのあるショートヘアになっていて、その上にはジャケットと同じ柄の小さなシルクハットがちよこんと乗っかっている。

すると目の前にいる金色の子が、不思議そうな顔をしながらまた話しかけてきた。

サーバル「ひよつとして、生まれたばかりの子かな？ここはジャパリパークのサバンナ。私はサーバルキャットのサーバルだよ！あなたは何のフレンズなの？」

「フレンズ…？何って、え…？」

彼女が戸惑っているともう一人、今度はオレンジ色をした誰かがやって来た。その子も二本足で歩いていて、金色の子と似たような格好で、つり目に尻尾に外ハネのロングヘア、前髪には2つの黒い模様があつて、やっぱり大きな耳をしていた。

カラカル「どうしたのサーバル…ん？誰なのこの子？」

サーバル「カラカル、ここで倒れてただけど、きつと新しいフレンズだよ。でもなかなかお話ししてくれないんだ。」

カラカル「見た感じ、あたしたちと似てるわね。もしかしてネコ科の子？あんた名前とか、どこから来たとか、何か覚えてる事ない？」

彼女は何も思いつけなかった。黙ったまま俯いていると、サーバルが彼女に手を差し伸べた。

サーバル「分かんなくても大丈夫。セントラルパークのヒトに聞けば、きつと教えてくれるから。私達が案内するよ！」

カラカル「そうね、一緒に行きましょう。」

彼女は困惑しながらもサーバルの手を取って立ち上がると、2人に連れられて歩き出した。

海岸からしばらく歩くと、あたりの様子が変わった。こちらの地面は短い草で覆われていて、ところどころオレンジ色の砂地が見えていて、ぽつぽつと低い木が生えている。

サクサクと草を踏みしめて歩きながら、2人はここの事を教えてくれた。

ここはジャパリパークという、広大な島に作られた超巨大総合動物園なのだそうだ。

世界中から集められた動物達が、火山から噴出したサンドスターという不思議な物質の力でアニマルガール、通称フレンズへと変わり、ヒトと一緒に暮らしているのだという。

サーバル「パークにはいろんなエリアがあつて、フレンズは自分の好きな所で暮らしてるの。ここは私たちが住んでる、サバンナって所だよ。」

カラカル「今向かつてるのはセントラルパークっていう、島の中心にあたる所よ。いろんな建物があつて、沢山のヒトがいるの。毎日お客さんもいっぱい来るから、正直職員さん達の顔、覚えきれていないのよね。」

今でこそ大人気の施設だが、開園直前に大事件が起こったそうさ。カラカル「事件の始まりは、研究所の副所長だったカコ博士っていうヒトが、女王セルリアンに食べられたからって言われてる。そいつは仲間と一緒に、この世界を全部食べちゃおうとしたの。」

その後の女王セルリアンの発言は、カラカルには理解しづらかったようで、説明もたどたどしくなっていた。

カラカル「そうしてあらゆるものをずーっとときおく…ほぞん？さいげんだっけ？この辺はよく分かんないのよね。ま、とにかくたくさんセルリアンが出てきて大変だったの。」

なんでもセルリアンというのは、姿も大きさも様々で、フレンズを食べて動物に戻してしまう怖い存在らしい。

それからサーバルが続けた。

サーバル「でもパークのみんなでやつつけたんだ。あと、セーバルっていう緑色をした、私にそっくりな子にも助けてもらったの。事件が終わってからも一緒に遊んでたんだけど、いつの間にかいなくなっちゃったんだ。また会いたくないー。」

こうして全てのフレンズを巻き込んだ大事件は幕を閉じ、公にされないままパークは開園した。今のところ大きな問題は起こっていないが、たまに小さなセルリアンが現れるので、危険な場所だと考える

ヒトもいるのだという。

話が一段落した頃、小高い丘が見えてきた。するとカラカルが、彼女の方を振り向いてこう言った。

カラカル「あの上に水飲み場があるの。ちよつと休んでいきましょ。」

丘を登ると大きな泉が現れた。透き通った水がキラキラと輝いていて、周囲には今まで歩いてきた所よりもたくさんの草木が生えていた。

3人は泉に直接口をつけて喉を潤した。乾いた体に冷たい水が染み渡り、彼女は生まれ変わったような気分になった。

ぐうぐう。するとお腹から大きな音がした。そういえば目が覚めてからここまで、何も口にしていない。

するとサーバルとカラカルが、毛皮からなにやら丸いものを取り出した。そしてそれを半分に割ると、ニコニコしながらそれぞれ彼女に差し出した。

カラカル「はい、これを食べて。」

サーバル「ジャパリまんっていうの、美味しいよ！」

しかし彼女は、おどおどしながら2人に尋ねた。

「こんなたくさん…いいの？」

カラカル「いいのよ。あたしたちはこれだけあれば十分だし、足りなくなったらヒトからもらう事もできるから。」

「ありがとう！」

そう言っただけで彼女は、2人からジャパリまんを受け取った。そして3人は、木陰でごはんを食べることにした。

彼女はジャパリまんを口いっぱい頬張った。それは美味しいだけでなく、食べたものがそのまま体になってゆくような不思議な感覚がした。

2人は彼女の両隣に座って、その様子を嬉しそうに見つめていた。そしてジャパリまんを食べながら、パークの食事についても教えてく

れた。

ここでは普通の食事もあるが、ジャパリまんは理想的なサンドスタ―補給食品で、全てのフレンズが美味しく食べられるうえ、保存も効いて携帯にも便利な大人気の食料なのだそうだ。

こうして3人は水飲み場で一休みしたあと、再びセントラルパークに向かって歩き出した。

数時間後、3人はセントラルパークにたどり着いた。

そこは色とりどりの建物が並んでいて、どこも大勢のヒトやフレンズで溢れていて、歓声や音楽があたりいつぱいに響き渡っていた。それらを見たり聞いていると、彼女はなんだかワクワクした。

キョロキョロしながら歩いていたが、気がつくと2人から少し離れてしまっていた。

途端に頭の中に一人ぼっちという言葉が浮かび、とても怖くなった。彼女は慌てて追いつくと、はぐれないように2人の手をしっかりと握った。

すると2人は、彼女の方を振り向いて笑顔を浮かべた。

サーバル「大丈夫だよ、一人になんてしないから。」

カラカル「心配しないで。あたしたち耳が良いから、あんたの音は全部聞こえてるの。」

それを聞いて、彼女は心の底からホツとした。

3人は職員の事務所にやって来た。そこでは数人のヒトが忙しうに歩き回っていた。その中に、机に向かっていている眼鏡をかけた女のヒトがいた。そのヒトはサーバル達に気がつく顔と顔を上げた。

ミライ「あら、サーバルさんにカラカルさん、こんにちは。どうしたんですか?」

サーバル「こんにちは。ミライさん、この子が何のフレンズかわかる?」

ミライさんと呼ばれたそのヒトは、緑色の長い髪を後ろで束ねていて、探検家のような服装で、両端にそれぞれ赤と青の一枚の羽がつい

た帽子を被っていた。

カラカル「海岸で倒れてるのをサーバルが見つけたんだけど、何も分からないみたいなの。」

それを聞いたミライさんは、彼女の方を見てにっこりと笑いながら挨拶をした。

ミライ「はじめまして。パークガイドのミライです。少しあなたの体を見せてもらって良いですか？」

緊張していた彼女は、固い表情のまま無言でうなずいた。ミライさんもうなずくと、眼鏡のフレームに手を当てた。するとレンズの色が緑色に変わって、細かい文字が現れた。

ミライ「それでは、顔をよく見せてください。…ありがとうございます。今度は手、それからゆっくり体を回して…。」

身長、耳と歯の形、毛の色と模様、手足の太さ、尻尾。ミライさんは一通り彼女の体を見終えると、顎に手を当てながらこう言った。

ミライ「ふむ、大柄なトラのフレンズさんですね。この模様の間隔と厚い毛皮はベンガル…いえ、おそらくアムールトラ。」

すると眼鏡から声がした。

眼鏡「解析終了。アムールトラだよ。」

ミライ「思った通りでしたね。あなたはアムールトラのフレンズさんです。」

サーバル「よかったね、アムールトラ。」

カラカル「改めてよろしくね、アムールトラ。」

みんなから明るく挨拶され、アムールトラも笑顔になった。

アムールトラ「ありがとうサーバル、カラカル、ミライさん。」

それを聞いて、ミライさんは目を丸くした。

ミライ「もうみんなの名前を覚えてるなんて、賢いフレンズさんですね。」

では、ここで暮らすにあたっての注意点はおいおい説明するとして、まずはパークでの生活に慣れてください。それからあなたが面白そうと思った事をどんどんやっていきながら、得意な事を見つけてくださいね。」



アムールトラは元気よく答えた。  
アムールトラ「分かった！ありがとう！」

こうしてアムールトラは、晴れてパークの一員となった。  
彼女はとても明るくて快活だった。すぐにみんなと仲良くなり、ここの生活にもなじんでいった。

彼女は誰かに注目されるのが好きで、体を動かすのが得意だった。  
お友達に誘われて一緒にダンスや体操をやってみると、華麗な動きでみんなを驚かせた。

それに加えて手先が器用だった。ある日セントラルパークのイベント会場で、マジックショーが開催された。軽快な音楽に合わせ、きらびやかな衣装に身を包んだヒト達が繰り出す予想のつかない展開の数々に、アムールトラはすっかり心を奪われた。

そして自分でもやってみたいと職員に訴えた。後日簡単なマジックセットを貰うと、夢中になって練習した。

そうして覚えたマジックをみんなの前で披露してみると、フレンズだけでなくお客さんからも大好評で、すぐさま彼女は人気者となった。

腕前が上がってゆくにつれ、自分で新しいものを考えたり、大掛かりなものでもこなせるようになっていった。やがて彼女は、いつか自分も大きな舞台に立ちたいと夢見るようになった。

### 第3話 ○あの子との出会い

ある日の夕方、アムールトラがセントラルパークを歩いていると、路地裏から泣き声が聞こえて来た。それを頼りにそちらへ行つてみると、道の端つこで小さな男の子が泣いていた。

その子は青い羽のついた帽子を被り、青い上着と肩掛け鞆、それと一冊のスケッチブックを持っていた。

彼女はその子に声をかけた。

アムールトラ「キミ、どうしたの？」

すると彼は顔をあげた。そしてアムールトラを見て一瞬泣き止んだが、すぐにまた目に涙が溢れてきた。

一人ぼつちが嫌いな彼女には、この子の不安な気持ちがよく分かった。

アムールトラは彼のそばでしゃがむと、ゆっくり右手を差し出して、彼の目の前で指を弾いた。するとそこから小さな白い花が現れた。

びつくりした顔をしながら花を見つめている彼にそれを手渡すと、彼女は微笑みを浮かべながら優しく語りかけた。

アムールトラ「キミは凄いいよ。自分が困ってるって、ちゃんと周りに伝えていたんだ。だから私は、キミを見つけられたんだ。」

するとようやくその子が泣き止んだので、彼女は自己紹介をした。

アムールトラ「私はアムールトラ。キミの名前は？」

その子が名乗ったところでアナウンスが流れてきた。

アナウンス「迷子のお知らせをいたします。羽のついた帽子に青い服と肩掛け鞆、そしてスケッチブックを持った男の子を探しています。お心当たりのある方は、至急職員事務所までお越しください。繰り返します…。」

アムールトラ「キミを呼んでるよ。おいで、一緒に行こう。」

そう言つてアムールトラが手を差し伸べると、その子はギュツと彼女の手を掴んだ。そして一緒に職員事務所へと歩き出した。

事務所では彼の母親が待っていて、アムールトラに何度も頭を下げ

た。あの子もお礼を言った後、持っていたスケッチブックに彼女の絵を描いてプレゼントした。

そこには笑顔のアムールトラと、「アムールお姉ちゃんありがとう」の文字が描かれていた。

アムールトラは絵を描いてもらったのは初めてで、とても感動した。彼にお礼を言い、絵を丁寧に畳んで毛皮の中にしまおうと、また会う約束した。

数日後、あの子は一人でパークにやってきた。そしてアムールトラを見つけると、彼女にしがみついて泣きだした。

アムールトラ「ど、どうしたんだい？」

慌てて訳を聞いてみると、あの子は嗚咽を漏らしながら話し出した。なんでも彼の両親は不在がちで、今日も一人でお留守番をしていたが、寂しさに耐えられなくなってここに来たのだという。

それを聞いた時、一瞬彼女の脳裏に森を一人でさまよう自分の姿が浮かんだ。押し寄せる孤独と不安と恐怖…、このイメージがなんなのかは分からなかったが、その姿が泣いているあの子と重なった。

これをきっかけに、アムールトラはできるだけあの子のそばにいてあげるようになった。彼が来たら必ず会いに行くのはもちろん、両親がいない日は、パークに招待して一緒に過ごした。

ここでの彼はアムールトラの隣でいつも笑っていた。それを見ると、なんだか胸の中が幸せな気持ちで一杯になるのだった。

ある日、2人でセントラルパークの遊園地で遊んだ後、あの子がワクワクした顔をしながらアムールトラの前に立った。

あの子「アムールお姉ちゃんに見せたいものがあるんだ。」

そう言うと彼は、開いた両手を彼女に見せた。そして何も持っていない事を確認させると、ポケットからハンカチを取り出して両手に被せた。

あの子「よく見てね、せーの…」

アムールトラ「おっとその前に、足元を見てごらん。」

突然アムールトラが、真面目な顔をしながら彼を手で制した。彼女はなんとか冷静さを取り繕っていたが、内心は笑いを堪えるので必死だった。

そこには小さな白い花が落ちていた。どうやらハンカチを取り出す際、うっかりマジックのタネを落としてしまったらしい。彼は足元を見て固まった後、慌ててそれを拾い上げた。その様子があまりにも愛らしくて、アムールトラはうっかりクスツと笑ってしまった。

あの子「もう、笑うなんてひどいよ！」

アムールトラ「ごめんごめん。私もよくやらかすんだ。これに懲りずにまた見せてくれたら嬉しいな。」

あの子はふくれっ面をしながらニコニコしているアムールトラを睨んでいたが、急に何かを思いついた顔になった。

あの子「じゃあ、目をつぶって。」

アムールトラ「いいけど、なんで？」

あの子「いいからつぶって！」

アムールトラは言われた通り目を閉じて、両手で顔を覆った。それでも彼がスケッチブックにペンを走らせる音はしつかり聞こえていた。

アムールトラ「もういいかい？」

あの子「まだだよ！絶対見ちゃダメだからね！」

アムールトラ「分かったよ。」

しばらくすると音が止み、あの子の声がした。

あの子「もういいよ。」

目を開けると、あの子が得意げな顔をしながらスケッチブックを差し出していた。そこにはセントラルパークで笑顔のみんなに囲まれて笑っている彼女の絵が描かれていた。

アムールトラ「わあ、相変わらず上手だね。」

アムールトラはスケッチブックを受け取ると感心した様子で眺めていたが、一部の絵がどんどん薄れていった。そしてみるみるうちにみんなの姿が消えてゆき、ホテルと観覧車、それとアムールトラだけが残された。

びつくりしてあの子の方を見ると、彼はしてやったりという顔をしながら、ジリジリと後ずさっていた。その手には、「すぐ消える！ドツキリマジックインキ」と書かれたペンが握られていた。

あの子「驚いた？消えるペンなんだよ。」

『消える』という言葉に、アムールトラは妙な引つ掛かりを感じた。消える、いなくなる、周りのみんなが、いつかは…。

アムールトラ「なんだこれ！私が一人ぼっちが嫌いなもの知ってるだろ!？」

あの子「僕を笑った罰だよ。」

そう言うのと彼はスタコラサツサと逃げ出した。アムールトラはスケッチブックを振り回しながら彼を追いかけた。

ヒトの子供と身体能力に優れたフレンズとでは勝負にならない。あの子はたちまち追いつかれ、背中に飛びかかれ、仰向けに組み伏せられてしまった。

見上げた先のアムールトラは、怒っているような泣いているような、酷く何かに怯えている様子だった。ちよつとした悪ふぎけのつもりだったのだが、彼女の表情からただならぬ雰囲気を感じ取り、彼は思わずこう叫んだ。

あの子「食べないで！」

アムールトラ「食べないよ！他に何か言うことがあるだろう!？」

あの子「あ…、いたずらして、ごめんなさい。」

それを聞いたアムールトラはニッコリと笑った。それから彼を座らせると、心配そうな顔をした。

アムールトラ「もういいよ。それより怪我してない?」

あの子「平気だよ。お姉ちゃんが痛い事するはずないもの。」

そう言っあの子も笑い出した。そうして2人はひとしきり笑い合った。

それからあの子がふと地面に目をやると、手のそばにさっきのペンが転がっていた。

あの子「そうだお姉ちゃん、このペン使ってみない?」

アムールトラ「いらないよ。それより…キミは私を一人にしないよ

ね？」

一抹の不安を感じながら、アムールトラは彼にこう尋ねた。  
するとあの子は満面の笑みを浮かべながら、大きな声でこう答えた。

あの子「うん！大好きだよ、アムールお姉ちゃん！」

それを聞いて、彼女の胸に熱いものがこみ上げてきた。そして彼をしつかりと抱きしめた。

アムールトラ「ありがとう！私も大好きだよ！」

こうして彼の事が大好きになったアムールトラは、どんな時でも必ずこの子を守ると心に決めた。

あの子もアムールトラが大好きだった。彼女はとても頼りになる憧れの存在で、かけがえのないフレンズだった。彼もまた子供心に『お姉ちゃんがピンチの時は必ず守る』と決めていた。

かくして、大の仲良しとなった2人の心は、固い絆でしっかりと結ばれたのだった。

## 第4話 ○迷子のロツク

ある日の夕方。パークの終業時間となり、寝床へと向かっていたアムールトラは、職員事務所の前でミライさんに呼び止められた。

ミライ「アムールトラさん、ちよつとお話したい事があるのですが、いいですか？」

アムールトラ「いいよ、なに？」

ミライ「実はですね、これからパークに監視カメラを導入しようって話が持ち上がっているんです。」

アムールトラ「か・ん・し・か・め・ら、ですか。」

聞いた事がない単語が出てきたので、彼女は一語一語確認しながら言葉にした。

なんでもここ最近、セルリアンの目撃情報が増えているという。

今のところ小さい個体ばかりでフレンズの脅威にはならないが、万が一を考えて監視体制の強化が検討されているそうだ。

具体的には、ヒトの目を増やしたり、フレンズとの連携を密にするだけでなく、各所にカメラを設置して、24時間パークを監視、録画する事などが考えられていた。

これは警戒だけでなく、サボつてどこかへ行つてしまったフレンズの搜索のほか、落とし物や迷子の管理にも使えるらしい。

ミライ「あなたはしつかりしているから、必要ないですね。」

アムールトラ「私は注目されるのが好きだから気にしないよ。あ、でもマジックのタネを見られるのはイヤだなあ。」

するとミライさんはニツコリした。

ミライ「フレンズさんのプライバシーは、しつかり守るから安心してください。それと、もうすぐここに来て一年ですね。その記念イベント会場でマジックショーをやってみませんか？」

それを聞いたアムールトラは、目を輝かせながら身を乗り出した。

アムールトラ「あのでっかいトコで？やるやる！」

ミライ「招待状や会場の手配などは、こちらでやりますから安心してください。細かいことはまた後で決めましょう。」

アムールトラ「うん、ありがとう！」

そう言つて彼女は、ミライさんに手を振りながらその場を後にしたのだが、ワクワクが抑えられず、弾む足取りでセントラルパークを歩き回つた。

ふと気が付くと、あたりは真つ暗になっていた。

そこで今日はホテルで眠る事にした。しかし部屋に入つてベッドに横になってみても、マジックショーの事で頭がいっぱいで、なかなか寝付けなかった。枕を抱き抱えながら真つ暗な天井を見上げてみると、遠くからズーン…と音がして、地面が少し揺れた。

すると部屋の明かりがついた。アムールトラが上体を起こしてあたりを見回していると、アナウンスが流れてきた。

アナウンス「先ほど職員の宿泊エリア付近で、小規模な噴火が発生しました。被害は報告されていませんが、念のため警戒してください。繰り返します…。」

アナウンスの後電気が消えた。どうやら、たいした問題は起こらなかったらしい。彼女は安堵し、再び横になった。

アムールトラ『噴火か…。新しい友達ができるかもしれないな。』

そんな事を考えているうちに、彼女は眠りに落ちた。

翌朝、セントラルパークは夜中の噴火の話題で持ちきりだった。

アムールトラはみんなと挨拶を交わしながら、軽やかな足取りで高い木の下を通りがかった。すると上から誰かが飛びかかってきて、うつ伏せで地面に押し倒されてしまった。

はずみでシルクハットが脱げ、その中から飛び出した花が彼女の頭に乗った。そして背中から明るい声が響いた。

？「おっはよー！ボンヤリしてどうしたの、アムールトラ？」

アムールトラ「油断してた…。おはよ、サーバル。」

うつ伏せのまま、背中に乗っている相手に挨拶をした。

いつもなら、余裕を持ってサーバルの狩りごっこをさばけるのだが、今日は他のことに気を取られていた。

サーバルは背中から降りると、彼女が起き上がるのを手伝った。そ



して彼女の顔をのぞき込みながらこう尋ねた。

サーバル「やつぱりアムールトラも眠れなかったの？私はずーんぜん気付かなかったけど。」

アムールトラ「そうじゃないんだ、実は…。」

アムールトラがマジックショーのことを話すと、サーバルは目をキラキラさせながら叫んだ。

サーバル「すっごーい！いつも一緒にいるあの子も、きっと喜ぶよ！」

アムールトラ「だよね！忘れられないショーにしてみせるよ！」

そして2人が笑い合っていると、カラカルが駆け足でやってきた。

カラカル「サーバル、ここにいたのね。もー、探したんだから。」

サーバル「おはよー。カラカル、どうしたの？」

カラカル「さつき、あたし達を担当してる職員さんからお願いされただけど、飼ってる犬が噴火に驚いて逃げたらしいの。ジャングルエリアに走って行ったから、その子達に探してもらってるけど、最近セルリアンも多くなってきたし、あたし達にも手伝って欲しいんだって。」

サーバル「大変！すぐ見つけてあげないと。」

そう言つて、すぐさまサーバルは駆け出そうとしたが、カラカルが止めた。

カラカル「闇雲に走り出さないで！ほら、これがその子。アムールトラ、あんたももし見つけたら助けてあげてね。」

カラカルが取り出した写真には、ねずみ色の毛のところどころ白の混じった、大きな犬が写っていた。

不意に、サーバルはアムールトラのシルクハットを指さした。

サーバル「そうだ！なんでも出てくるその帽子で見つけられるんじゃない？」

しかしアムールトラは苦笑しながら、先ほどの花をつまんで軽く振った。

アムールトラ「無理だよ。マジックは魔法じゃないんだ。私も一緒に…ああっ！ごめん、行けないや。」

今日はあの子をパークに招待していたのだった。でもその事は、他のみんなも知っていた。

カラカル「いいの、手分けして探しましょ。これを渡しておくから、あんたはここでみんなに声をかけてみて。」

アムールトラは、カラカルから写真を受け取った。

アムールトラ「分かった。2人とも、セルリアンに気をつけて。」

するとサーバルは片目をつむり、肘を曲げてポーズを取った。

サーバル「大丈夫！自慢の爪で、やつつけちやうよ！」

そこは疑いようがなかった。なにしろサーバルは、このパークで唯一野生解放が使える、一番強いフレンズなのだ。

サーバル「カラカル、この子の名前は？」

カラカル「ロックよ。名前を呼ばれたらすぐ来る子らしいわ。」

サーバル「よし、待っててねロック、必ず見つけるから！」

そうしてサーバルとカラカルは、ロックを探しにジャングルの方へと駆けていった。

フレンズ達「なになに、どうしたの？」

2人を見送ったアムールトラの周りに、フレンズ達が集まってきた。彼女は犬の写真を見せながら事情を説明して、みんなに協力を仰いだ。

☆

目覚ましが鳴って、あの子はベッドから起き上がった。

今日は両親のいない休日で、アムールトラからパークに招待されていた。

彼はあくびをしながら身支度を整えた。予め用意されていた朝食をもそもそと食べた後、端末を取り出してジャパリパークのページを開いた。そこにはいつものように、パークの全体像とアトラクションの紹介が載っていた。

パークは巨大な島に作られていて、そこへ行くには船を使うか、海を渡る大きな橋を通る必要がある。一本は空港とサバンナを繋いでいて、もう一本はここからセントラルパークに繋がっている。

そこには遊園地やホテル、ショッピングモールや飲食店、イベント会場や職員事務所など様々な施設がある。

そこからそれぞれのエリアに道が続いている。ジャングルエリアの隣には、パーク職員の宿泊エリアがある。移動はバスやモノレールが使われていたが、徒歩で回ることもできた。

ページを切り替えると、フレンズや職員の日替わりメッセージが載っている。

その中に、宿泊エリア近くで小規模な噴火があつた事と、職員の飼っている犬がジャングルエリアに入ったきり帰ってこない事が、写真付きで書かれていた。

彼はこの犬を知っていた。

飼い主は仲の良い職員の夫婦で、ジャングルエリアの近くでお散歩したり、一緒に遊んだりしているのを見かけた事があつた。

ジャングルエリアには、アムールトラと何回か行った事があつた。こつそり順路を外れて、木々をくぐり抜けて追いかけてこをしたこともある。平地ではすぐに掴まってしまうが、ここでは体の小さい彼の方が有利だつた。

あの子『心細いだろうな。パークに着いたら、アムールお姉ちゃんと一緒に探してあげよう』

そう考えながら、彼は家を出てパークへと向かった。

☆

噴火が起きた日、ロックはご主人夫婦と夜のお散歩をしていた。とても静かな夜で、夫婦は談笑しながら歩いていた。

すると、突然近くの山から物凄い音がして地面が揺れた。

それに驚いたロックはパニックになり、いきなり走り出した。

急に引つ張られたご主人は、うつかりリードを離してしまった。慌てて追いかけたが、あつという間にロックの姿は豆粒のように小さくなり、そのままジャングルへと消えてしまった。

草を踏み分けながらロックが走っていると、頭上から何かか飛んできて体に当たった。するとあたりが輝きで見えなくなつた。

ロックはますます混乱し、無我夢中で茂みに飛び込んだ。

しだいに輝きが晴れてくると、ロックは体に違和感を覚えた。

なぜか腰が伸びて目線が上がっている。それに、前足を振って後ろ足だけで走っている。

茂みを抜けると、突然目の前が開けた。足が宙を蹴り、バランスを崩した体がゴロゴロ地面を転がってゆく。ロックは3m程の崖から落っこちてしまったのだ。

しばらくめまいがしていたが、徐々に頭がはつきりしてくると、ロックはようやく落ち着きを取り戻した。

あたりには鬱蒼と木々が生い茂っている。どうやらひたすら走っているうちに、いつの間にかジャングルの奥まで足を踏み入れてしまっていたらしい。

そこで初めて、自分の前足がご主人のような手になっている事に気付いた。それだけでなく体全体が変わっていた。ロックはサンドスターに当たって、アニマルガールになっていた。

彼女には何が起こったのか理解できなかったが、とにかくご主人の下に帰ることにした。そして崖を見上げると、先ほどくぐった茂みが見えた。だがよじ登るのは難しそうだった。

それならばと別の道を探すため立ち上がって歩こうとしたが、リードに首輪を引っ張られた。何度か足を踏ん張ってみたが動けなかった。

実は崖から落ちた際、リードが石に引っかかっていた。

しかしそれを外すだけの知識を、彼女はまだ持っていなかった。

草木がザワザワと揺れ、ジャングルの闇の中から得体の知れない動物の声が聞こえてきた。彼女は恐怖でその場に縮こまっていたが、そうしているうちに、いつの間にか眠ってしまった。

彼女が目を覚ますと、あたりはすっかり明るくなっていた。

もはや犬だった頃の記憶はほとんどなくなっていたが、大切な人の所へ帰りたいという思いは強く残っていた。その一心で今度はリードを掴んで力一杯引っ張ってみたが、やはり動けなかった。

すると、前方からガサガサと音がした。

そちらに目を向けると、木の間から無機質なひとつ目がじつと彼女を見つめていた。

木を押し除けながらのっそりと姿を現したのは、彼女の3倍の幅はあろうかという、赤くて太い円柱形をしたセルリアンだった。そしてそれは、6本の触手を蠢かせながらにじり寄ってきた。

「ぎゃあああああー！」

それが何なのかは分からなかったが、恐怖を感じた彼女は、必死にリードを引っ張りながら大きな悲鳴を上げた。

☆

ロツクがまだジャングルの中で眠っていた頃、アムールトラはパークにやって来たあの子にロツクの事を話した。彼も既にその話を知っていて、気にかけていた。そして一緒に探しに行く事になった。

まず職員の宿泊エリアを訪れた2人は、ロツクの足跡を見つけると、それをたどってジャングルエリアへと入った。

それは途中から靴の形が変わったため、2人はロツクがアニマルガールになったのだと考えた。

靴跡と匂いを追ってゆくと、茂みの向こうから悲鳴が聞こえた。

2人がそこから顔を出してみると、崖の下でアニマルガールがセルリアンに襲われていた。

「キミはここにいて」と言っ、アムールトラはシルクハットを投げつけた。その中から激しい光とともに色とりどりの花と紙吹雪が飛び出して、あたりに散らばった。それにより、セルリアンの注意が帽子に向いた。

アムールトラはセルリアンに飛びかかろうと身構えたが、隣にあの子がいなことに気付いた。慌てて崖から下をのぞくと、彼はすでにアニマルガールの下へと向かっているところだった。

あの子は崖から滑り降りると、首輪から素早くリードを外し、ジャングルのさらに奥を指差しながらアニマルガールに言った。

あの子「あつちに走って！」

その声を聞いて、セルリアンが2人をギロリと睨んだ。  
アムールトラが止める間もなく、彼はアニマルガールと一緒にジャングルへと走って行った。セルリアンもそれを追ってゆく。  
彼女は急いで崖から飛び降りると、必死に跡を追いかけた。

あの子はアニマルガールの手を引いて、木々の間をすり抜けながら懸命に走った。後ろからセルリアンが2人を追いかけてきたが、途中で太い木と蔓に引っかかって動きが止まった。

すると彼は振り向いて指を鳴らした。

あの子「やった！うまくいった。」

セルリアンがもがいていると、その背後からアムールトラが猛然と向かってきた。

彼女は高々と跳躍すると、体を翻して急降下し、右手に渾身の力を込めた。すると一瞬、彼女の体が輝いた。そしてそのままセルリアンの背中 of 石目がけて爪を叩き込んだ。

ぱっかーん！

その強烈な一撃で、セルリアンだけでなく木も蔓も全て吹き飛んだ。

あたり一面にカケラが降り注ぐ中、あの子が笑いながら彼女のそばへとやって来た。

あの子「アムールお姉ちゃん、ありがとう。」

アムールトラ「無茶しないでくれ！食べられたらどうなるか分からないぞ！」

あの子を心配するあまり、思わず大声が出してしまった。ハッと冷静になって彼を見ると、あの子は目に涙を浮かべながら全身を震わせている。

あの子「…ごめんなさい。うあーん、怖かったよおー！」

アムールトラ「私こそ、怒鳴ってごめん。」

アムールトラは、泣きじやくる彼をぎゅっと抱きしめた。

アムールトラ「無事で良かった。」

アムールトラはあの子の温もりを噛みしめながら、先ほどの戦いを

思い返していた。2人を助けようと振るった爪には、これまでにない力があつた。

彼女は以前、どうしたら野生解放ができるのか、サーバルに尋ねた事があつた。するとサーバルは一生懸命頭をひねっていた。

サーバル「えつとね、うーん、分かんないや。けど、誰かのためにーって思つたら、すつごい力がでるんだよ。」

あれはこういう事なのかなと考えていると、

「ロッキー、ここにいるのー？」と、サーバルの声がした。

騒ぎを聞きつけて、サーバルとカラカルと飼い主夫婦、それとジャングルエリアのフレンズ達が現れた。

サーバル「悲鳴とでっかい音がしたから急いで来たんだけど、無事でよかつた。」

カラカル「アムールトラもその子と一緒に来てたのね。セルリアンがいたみたいだけど、大丈夫だったの？」

アムールトラはことの顛末を説明した。するとサーバルが「あなたはすつごい頑張り屋さんだね。」と言つてあの子の頭をなでた。

よくよく見ると、葉っぱまみれだったりずぶ濡れだったり、みんなくたびれた様子だった。今までどこにいたのか聞いてみると、彼女達は犬の習性をよく知らなかったため、木の上や水の中など、見当違いの場所ばかり探していたそうだ。

それを知つたカラカルは、ヘナヘナとその場にへたり込んだ。

カラカル「もぐ、始めから言つてよね…。」

すると男性職員がカラカルに手を合わせて謝つた。

男性職員「ごめんよ、てつきり知つているものだとばかり。」

女性職員もみんなに謝つた。

女性職員「本当にごめんなさいね。みんなに迷惑かけてしまったし、お詫びに今日は好きなものをたくさん食べて良いからね。」

サーバル「やったあ。ところであなたは？」

サーバルが、オドオドしているアニマルガールに尋ねた。

「私は、えーと…」

アムールトラ「この子はロッキだよ。サンドスターに当たつてフレ

ンズになったんだ。」

サーバル「そうなんだ！私はサーバル。よろしくねロック。」

そう言ってサーバルは右手を差し出したが、その子は相変わらずもじもじしながら「あ、あう…」と呟いた。

そんなアニマルガールを、飼い主夫婦がそつと抱きしめた。そして優しく声をかけた。

女性職員「フレンズになって、今までの記憶が無くなっちゃったみたいね。けど大丈夫。これから新しい思い出を、たくさん作れば良いんだから。」

男性職員「そうだね。ひとまずみんなに報告しよう。それから新しい名前を考えよう。」

『あつたかい…。』

大切な2人に包まれて、彼女はようやく安心した。そしてピコピコ尻尾を振りながら、ふにやんとした笑顔で「はい。」と返事をした。

男性職員「そうだ、フレンズになったのだから、これはいらさないね。もう迷子にさせないからね。」

そう言って彼は首輪を外そうとしたが、アニマルガールはフルフルと首を振った。どうやら大切な思い出の品としてつけていたいようだ。そして一行は、わいわい話しながらセントラルパークへと向かった。

その後、パークでは彼女の歓迎パーティーが開かれた。

いつもの倍のジャパリまんがフレンズ達に振る舞われた。

他のものが食べたい時は、リクエストも受け付けられた。

そうしてみんなでお腹いっぱい食べて、新しい仲間を迎え入れた。

フレンズとなったロックはイエイヌと名付けられ、そのまま飼い主夫婦が担当する事になった。そして日中はパークで、夜は今まで通り、宿泊エリアで夫婦と暮らす事となった。

また、イエイヌが襲われた件を受けて、パークの監視体制は早々に強化される事が決まった。カメラの設置だけでなく、移動しながら監視や警戒を行うマスコットロボットを作ろう、という事になった。



それから数日後、各地にアムールトラのマジックショーの招待状が届いた。もちろん、あの子やイエイヌも招待されていた。

## 第5話 ○襲撃事件

もうすぐアムールトラの誕生日。正確には、彼女がパークの一員となった日から一年が経とうとしていた。

それを記念して、セントラルパークのイベント会場で、誕生パーティーも兼ねた大規模なマジックショーが開催される事になった。

もちろんあの子も招待されていた。彼は招待状が届いた日から、何を贈り物にするか散々悩んでいたのだが、大舞台で輝いている彼女の姿をスケッチブックに描いてプレゼントする事にした。

そして誕生日当日。その日は朝からとても良い天気にも恵まれた。

アムールトラは会場から少し離れた所で、周りのみんなと談笑しながら機材を運んでいた。

彼女は昨日からずっとウキウキしていた。おかげで夜は、興奮してあまり眠れなかった。思わずグツと伸びをして大きなあくびをした後、あの子の顔を思い出し、慌てて気を引き締めた。

『あぶないあぶない、しっかりしないと…!』

一方あの子は、一足先にマジックショー会場を訪れていた。

そこはアムールトラのためにきらびやかな装飾が施されていた。まだ開演までかなりの時間があり、会場内では数名のスタッフとフレন্ズ：、パークガイドのミライさん、サーバルとカラカル、イエイヌとそのご主人夫婦が設営をしていた。

すると彼に気付いたイエイヌが、大きな包みを抱えて駆け寄って来た。

イエイヌ「おはようございます。来てくれて嬉しいです。ところで、あなたにお願いがあるんです。」

それはパークのみんなが用意したプレゼントだった。包み紙の間から、首に赤いリボンをつけた大きなトラのぬいぐるみが入っているのが見える。

イエイヌ「パーティーが始まったら、みんなを代表してこれをアムールトラさんに渡してあげて欲しいんです。」

それを聞いた彼は喜んで引き受けた。

それからイエイヌは、困ったような顔をした。

イエイヌ「実は私、フレンズになったばかりで、『ふれせん』とは何なのかよく分からないんですね。」

それを聞いた彼はサツとスケッチブックを開き、さらさらとペンを走らせた。そして自分と周りのみんなが笑顔でパークの入り口に並んでいる絵を描いて、イエイヌにプレゼントした。

あの子「はい！大切な友達への贈り物の事だよ。」

イエイヌ「わあ、ありがとう！」

イエイヌは大喜び。尻尾をブンブン振りながら、じつと絵を見つめていた。

そこへ、天井から丸くて緑色のものが落ちてきた。一見飾りか何かのようにも見えるが、それは会場の輝きを取り込んでどんどん膨らんでゆき、あつという間に天井に届くほどの巨大な姿となった。

それはセルリアンだった。

4本の長い腕を蠢かしながら、無機質で大きな目があの子を睨んでいる。彼は恐怖で震えながら、その場に尻餅をついた。

するとセルリアンが彼めがけて腕を振り下ろしてきた。

とっさにイエイヌが彼を助けに向かったが、わずかに間に合わず、目の前で彼は取り込まれてしまった。

そしてイエイヌは腕の衝撃で吹き飛ばされ、気を失ってしまった。

☆

突然、パーク中に警報と緊急アナウンスが鳴り響いた。

アナウンス「緊急事態発生！緊急事態発生！マジックショー会場にセルリアンが現れました。お客様はパークの職員の指示に従い、速やかに避難して下さい。繰り返します…」

それを聞いて、アムールトラはとても嫌な予感がした。そして持っていた機材を放り出すと、会場に向かってわき目もふらずに駆け出した。

パークは大混乱に陥っていた。会場への通路は、パニックになり逃げ惑う人々で溢れている。それをかき分けながら彼女は走った。

そこへ、避難誘導とは別のアナウンスが流れて来た。

アナウンス「子供が1人、セルリアンに取り込まれた模様！応戦できる者は、直ちにマジックショー会場に向かい、子供を救助せよ！繰り返す…」

アナウンスと悲鳴が響き渡る中、アムールトラは懸命に駆けていた。その顔は血の気が引き、頭の中は真っ白になっている。

『あの子に違いない。いや、まだそうと決まったわけじゃない、ああ、でも…。どうか、無事でいて！』

そう祈りながら、彼女はがむしゃらに走り続けた。

☆

サーバル「うみやみやみやみやー!!!」

カラカル「こんのおっ！」

取り込まれたあの子を助けようと、サーバルとカラカルは必死に戦っていた。2人はセルリアンの周りを跳び回りながら、何度も爪を叩き込んだ

しかし相手は強力で、野生解放したサーバルでも敵わなかった。

そしてセルリアンの腕の一撃を受け、とうとうサーバルまでもが取り込まれてしまった。

ところが突然セルリアンの腕が弾け、そこからサーバルが飛び出してきた。

その体からもの凄い勢いでけものプラズムが吹き出し、全身がまるで炎のように揺らめいている。セルリアンが勢いよく残りの腕を伸ばしてきたが、爪で払い除けただけで弾き飛ばした。そして以前とは比べ物にならないパワーでセルリアンに突撃した。強烈な攻撃を受けたセルリアンは、粉々に砕け散った。

セルリアンのかけらが散らばる中、サーバルがあの子を抱き抱えながら歩いて来た。サーバルはパークの職員に彼を預けると、にっこりと笑った。彼は気絶しているが、命に別状は無さそうだ。職員はほつと胸を撫で下ろした。

そこへ、カラカルの叫び声が出た。

カラカル「ちよつと、どうしたのサーバル!?」

なんだかサーバルの様子がおかしい。けものプラズムの放出が止まらず、体がどんどん縮んでゆく。そうしてあつと言う間に、サーバルキャットの姿に戻ってしまった。

ようやく駆け付けたアムールトラが見たものは、倒れているあの子とそれを介抱する職員、そしてポカンとした顔でこちらを見上げている、一匹のサーバルキャットだった。

あの子は医務室のベッドに寝かされ、その横でアムールトラが彼を見守っていた。彼女は自責の念に囚われていた。

『この子に招待状を送らなければ、こんな事にはならなかったのに。私が近くにいれば、守つてあげられたのに。そうすればサーバルだって、動物に戻る事はなかったのに。』

自分を責める言葉だけが、頭の中をぐるぐる回っていた。大切な友達を守れなかった己の無力さが許せなかった。

しばらくして彼は目を覚ました。それを見て、アムールトラは思わず身を乗り出した。

アムールトラ「良かった、気が付いたんだね!気分はどう?痛いところはない?」

すると彼はキョトンとした顔でアムールトラを見つめた後、こう言った。

あの子「お姉ちゃん、誰?」

アムールトラ「!!」

それを聞いて、彼女は大きなショックを受けた。

そして涙が溢れそうになるのをなんとかこらえながら、少しでも覚えていいる事はないかと、自分の事を話したり、初めて会った時に描いてもらった絵を毛皮から取り出して見せたりしたが駄目だった。

『そうだ、これなら何か思い出すかもしれない。』

そう考えて、アムールトラは彼にスケッチブックを見せた。

ページをめくってみると、そこには2人にとってのパークの思い出の場所が、何枚も描かれていた。しかし彼はその場所はおろか、もう

絵の描き方すら覚えていなかった。

サーバルキヤットが医務室の前までやって来ると、中から「ごめんね……。ごめんね……。」という声が聞こえてきた。出入り口からのぞくと、アムールトラが泣きながらあの子を抱きしめていた。

その様子を見てあの子は困惑していたが、彼女を慰めようとそつと抱きしめた。

そこへ職員達もやってきた。彼と話をしてみると、自分の名前は言えるし、受け答えも問題ない。どうやらセルリアンに取り込まれた事で、アムールトラに関する記憶と、紙にもものを書く力が失われてしまったようだった。

あの子は職員達からそのように現状を説明されても、さすがにすぐには飲み込めないようだった。しかし幸いな事に、彼はアムールトラをすんなり受け入れてくれた。その場で軽くやり取りをしただけで、2人はまた仲良しに戻った。

それからあの子は、襲撃事件の事など気にせず、これまで通り元気に日々を過ごした。紙に文字を書く練習を始めたが、またパークに遊びに来たりして、新しい思い出をどんどん増やしていった。

そんな彼に感化され、それまで酷く落ち込んでいたアムールトラも、徐々に前向きに生活が送れるようになった。小規模なマジックショーを開いたり、フレンズとおしゃべりしたり、また彼と一緒に過ごしたりと、元の明るい彼女に戻っていった。

こうして、すっかり元氣を取り戻したかに見えたアムールトラだったが、彼女の心の奥には罪の意識が残り続けていた。

## 第6話 ○ビースト計画（プロジェクト）

### ○ビースト計画（プロジェクト）

子供の輝きを取り込んだためだろうか、マジックショー会場に現れたセルリアンのコアが消滅せずに残った。これをどうしたら良いのか。襲撃事件が起きた後、パークの関係者達で話し合いが行われた。危険性を考えるとすぐにでも破壊すべきだったが、これを傷つけることが出来たのは突如変異したサーバルだけだ。

サーバルが見せた強力な野生解放状態は、ビーストと名付けられた。記録された映像や目撃証言などから推測すると、野生解放よりも大きな力が出せるが、サンドスターを一気に消費してしまうため、制御できなければすぐに動物の姿に戻ってしまうようだった。

フレンズは通常、いわゆる制御機能の働きによりこのような状態にはならないが、今回のケースでは、サーバルがセルリアンに取り込まれた際にこれが失われ、ビースト化したのだろうと考えられた。

サーバルは先のセルリアンとの戦いで、サンドスターを使い果たし動物に戻ってしまったている。現在のところフレンズ化は噴火任せのため、次がいつになるのかは予測できない。また、動物に戻ると記憶が失われるため、たとえ再びフレンズになったとしても、ビースト化できるのかどうか分からなかった。

その後数ヶ月に渡って話し合いが続いたが、今のままのフレンズとヒトの力では、どうする事もできないという結論に達した。

残された手段は、人為的にフレンズをビースト化させ、その力でコアを破壊する事だった。

一連の計画は『ビースト計画（プロジェクト）』と名付けられた。

だが前例の無い試みで、途中で何が起こるか分からない。仮にコアが破壊出来たとしても、そのフレンズは動物に戻ってしまう可能性が大きかった。そのため、フレンズを危険に晒すくらいなら、コアはひとまず放置するべきとの意見も多かった。

しかしそんな中、アムールトラは自ら志願した。彼女も他のフレンズと同様、野生解放すらできない。だが彼女には、みんなを守りたいという強い決意があった。これから起こりうる数々の危険を聞かされても、彼女の心は揺るがなかった。

ジャングルの奥地に、研究者以外立ち入ることのできない研究所があった。ここではいろいろな研究が行われていて、その中にはセルリアンに関するものもあった。厚い壁に囲まれ隔離されたこの場所には、すでにコアが運び込まれていた。

そして計画（プロジェクト）もここで進められる事となった。

こうしてビースト計画（プロジェクト）が始まった。記録されていたサーバルのデータを基に、様々な実験が行われた。

日を追うごとに、アムールトラは強い力を出せるようになっていった。感覚も鋭くなり、セルリアンや輝きの気配を敏感に察知出来るようになった。しかしその一方で、徐々にフレンズとしての特性が失われていった。

容姿が変化し、髪が伸び毛皮が生え変わった。

手は肥大化し巨大な爪が生え、野生動物を思わせる形になった。

物が掴めなくなり、四つん這いで走るようになった。

しだいに言葉を話せなくなり、意志の疎通が難しくなった。

また、戦いと食事と睡眠以外の事への関心が薄まった。

彼女を心配した研究者達が、何度も実験の中止を勧めた。あるいは彼女の力になりたいと、危険を承知で計画への参加を申し出るフレンズも現れた。

しかしアムールトラは、「もう誰にも辛い思いをさせたくない」と言って、それらを頑なに拒否した。その姿勢は、言葉を話せなくなっても変わらなかった。

彼女の強い意思を無下にする事はできなかった。

こうした情報は研究所内のみで共有され、慎重に計画は続けられた。



○ラッキービースト

アムールトラを心配してあの子が何度も研究所にやって来たが、彼女は面会を拒み続けた。

大切な友達を守れなかった不甲斐ない自分が許せない、という気持ちも確かにあった。だがそれ以上に、今あの子に会ってしまったら、決意が揺らいでしまいそうで怖かったのだ。

しかしそう簡単に割り切れるものではない。彼女は表向きは元気そうにしていたが、俯いたりぼんやりしたりする事が増えていった。そんなアムールトラの寂しさを少しでも和らげようと、サポートロボットが導入された。彼女と同じオレンジ色で、膝くらいの高さの丸っこい体に、大きな耳と尻尾が生えている。足は短く、歩く時にポイポイと音が出る。毎日彼女の体調管理と記録を行い、簡単な会話も出来る。

このロボットは、アムールトラの安全と、計画（プロジェクト）成功の願いを込めて、『ラッキービースト』と名付けられた。

近い将来、このロボットは量産され、様々なケースに対応できるよう機能が追加されたのち、パークガイドとして各所に配備される事になる。その際一目でフレンズと区別ができるように、体は青色に変えられた。

そしてヒトがいなくなった未来では、その中の一体がパークの危機を救うため、大活躍する事となる。

○袋小路

しかし計画は行き詰まった。

まずアムールトラの状態が芳しくなかった。

実験の結果、彼女は自らの意思で野生解放を経てビースト化できるようになったが、度重なる実験で彼女の制御機能が弱まり、野生解放状態が解けなくなった。

また力の制御も難しいため、ひんぱんにサンドスターを補給しないとすぐに動物に戻ってしまうのだ。

加えて体に大きな負担がかかっているため、このままの状態が続け

ば、近いうちに死んでしまうかもしれない。

それを防ぐため、睡眠を促し緊張を和らげる機能がついた手枷が作られた。それをはめてからというもの、彼女は1日の大半を寝て過ごすようになった。

これにより、ある程度野生解放が抑えられ、体への負担が減った。だがそれでも、問題の根本的な解決には至らなかった。

さらにもう一つ問題があった。セルリアンのコアは結晶化し、どんな攻撃も受け付けなくなっていて、たとえビースト化したアムールトラでも破壊する事は不可能だった。

結晶が再び動き出すまで手が出せなかったが、それがいつ、どんな形で現れるのかは誰にも分からなかった。

数々のデータから、アムールトラの余命は〇年と推測された。このままではこの計画(プロジェクト)は、彼女を犠牲にするだけで終わってしまうかもしれない。

だが中断したとしても、彼女の野生解放は止まらない。となると体が持たない。かと言って動物に戻ってしまうと、記憶が失われ、彼女の今までの努力が無になってしまう。

失われるのはビースト化だけではない。親しい友人や思い出、あるいは技術や性格といった、これまで生きてきた中での彼女の全てが失われてしまうのだ。

それにセルリアンの結晶が残っている以上、他のレンズが計画(プロジェクト)を引き継がねばならない。意志の疎通が難しいため確認する術が無いが、はたして彼女はこれを望むだろうか？

### ○封印

これから一体どうしたら良いのか、研究者達の間で話し合いが行われた。その中で、アムールトラを休眠状態にし、セルリアンの結晶と一緒に隔離施設に封印する案が出された。

これによると、サンドスターには状態を永久に保存する働きもあるため、休眠で野生解放を停止させれば、彼女はいつまでも眠り続け、死ぬ事はないとされていた。

しかし非情な提案で、とても研究者達だけでは決められなかった。そこで、今まで隠されていた事実も含めて、パーク中に情報が公表される事となった。

すると、あつという間に大騒ぎになった。

これを聞いた誰もが反対し、「勇敢な彼女を、一人ぼつちにした挙句見捨てるのか」と、研究所には非難が殺到した。そんな中、計画（プロジェクト）の中心人物だった研究者が批判の矢面に立った。

その研究者は、これまでの経緯の詳細とアムールトラへの謝意をあらゆる場所で語った。その真つ直ぐな姿勢から、研究者達がアムールトラをととても大切に思っている事が世間にも伝わり、騒ぎはすぐに収まった。

なんとか別の道を探るべく、ヒトが集まって何度も検討が重ねられた。しかし他に方法が見つからなかった。

こうしている間にも、彼女に残された時間は短くなってゆく。

かくして、苦渋の決断だったが提案は受理され、アムールトラは結晶と共に封印される事になった。

そのための様々な準備が始まった。

その内の一つである隔離施設の建造がサバンナで進められる中、アムールトラが眠った後もそこへの出入りを希望する声のパークの内外から多数挙がった。しかしいつまた結晶が動き出すか分からない。

そのため、彼女の世話は施設内に設置されたコンピュータに託された。

これは彼女の様子を24時間カメラで見守り、手枷から送られて来るデータを基に、睡眠と体調の維持管理を自動的に行う。そして結晶を常に監視し、異変を察知したら、すぐさま彼女を目覚めさせるようプログラムが施された。

また、外部から操作される事のないよう、このコンピュータは完全に独立していた。周りにできるのは、無事を祈ることと、彼女を起こす時に発信される信号を受け取る事だけだった。さらに、万が一施設内部で何か別の危機が起こった場合に備えて、頑丈な檻も用意され

た。

だがセルリアンを倒した後、はたしてパークに彼女の居場所は有るのか？という問題が残されていた。

彼女が目覚めると同時に施設のロックは解除され、封印が解けるようになっていた。しかし、その時パークはどうなっているのだろうか？強大な力を得た代償にフレンズとしての特性を失った彼女を、受け入れてくれるのだろうか？

これについて、フレンズとヒトとで話し合いが行われた。そして『どんな事があっても、私達は決してアムールトラを忘れない』という結論が出た。

それからフレンズ達は、毎日彼女の事を話題にするようにした。

ヒトは、彼女との思い出をできるだけたくさん集め、映像や文章で保存した。

それらはマジックショーが行われるはずだった会場に集められ、そのまま彼女の記念館になった。

一方研究所でも、数々の実験データだけでなく、彼女の身の回りを記した日記が多数保存された。

また、どれだけ通じるかは分からなかったが、研究者達は施設が完成するまでの間、体の状態や計画の推移、みんなの様子などをアムールトラに何度も細かく説明した。

彼女はというと、体への負担を減らすため、眠っている事が多かった。さらに実験の副作用で言葉を理解できなくなり、戦いと食事以外の事への関心も薄くなっていた。

それでも誰かが来た時は、うつらうつらしながらも話を聞いていた。そして声の雰囲気から、体の状態が悪い事と計画が良くない方向に向かっている事、そしてパークのみんなが自分のために頑張っている事も、なんとなく感じ取っていた。これは彼女が動物だった頃から身についていた力だった。

月日が流れ、ついにサバナナの一面に隔離施設が完成し、セルリアンの結晶が運び込まれた。

そして数日後、とうとうその日がやって来た。パークのみんなが、アムールトラにお別れをするために施設に集まった。

やがて一台の車がやってきて、中から彼女が降りてきた。久しぶりに会った彼女はすっかり姿が変わっていて、厳つい手枷をはめて、全身からけものプラズムを放出させながら暗い顔をしていた。

アムールトラは檻の前に立つと、悲しげな顔をしているみんなを見回した。そしてその中に、涙を堪えながらこちらを見ているあの子を見つけると、申し訳なさそうな笑顔を彼に向けた。

それからアムールトラがゆつくりとした足取りで檻に入ると、コンピュータが作動した。すると檻の扉が閉まり、手枷から睡眠を促す信号が送られて来た。

彼女はあくびをしてゴロンと横になった。まぶたがだんだんと重くなり、意識が遠くなつてゆく。そして最後に目に映ったのは、泣いているあの子の顔だった。それを見て、彼女は唇を『ごめんね。』と動かした。

みんなが固唾を飲んで見守る中、アムールトラのまぶたが完全に閉じ、規則正しい寝息が聞こえてきた。するとようやく、けものプラズムの放出が止まった。

それからフレンズ達は、一人ぼつちが嫌いなアムールトラが少しでも寂しくないようにと、彼女の周りにフレンズを模したぬいぐるみを飾った。その中には、あの大きなトラのぬいぐるみもあった。

これには、『目が覚めたらみんなでお祝いしようね』という気持ちが入められていた。また結ばれたリボンには、みんなのメッセージがびっしりと書かれていた。

あの子は目に涙を浮かべながら、思い出の品のスケッチブックを彼女のそばにそつと置くと、声を震わせながら叫んだ。

あの子「目が覚めたらまた一緒に遊んでね。絶対、絶対だよ！」

そして最後に、そこにいたみんなで歌を歌った。それは大昔、パークを作った神様が住人達に送った言葉だ、と言われていた。その歌詞には『決してあなたを忘れない』というメッセージが込められていて、綺麗で悲しい、けれど希望が感じられる、そんな歌だった。

とうとうお別れが終わり、みんなが俯きながら施設の外に出ていった。

そして扉がゆっくりと閉ざされ、ガシャン…というロックの音と共に、施設は封印された。

## 第7話 ○目覚め

### ○目覚め

それから長い時間が流れた。

ヒトはこの星から去り、文明は失われた。

パークに残されたフレンズ達も代替わりし、アムールトラの事を覚えていた者はいなくなつた。

それらが変わつてしまつた後も、各地のラツキービーストは、フレンズにジャパリまんを配給したり施設の補修を行つたりと、パークの管理を粛々として行つていた。

フレンズ達は、そんな彼らをボスと呼び、無口でよく分からないフレンズとして接していた。

ヒトの力が無くなつた事で、セルリアンの脅威が高まるかに思われたが、独自に野生解放を身に付けたフレンズが多数現れ、セルリアンとの戦いは一定のバランスが保たれていた。

これは、彼女の事を忘れない、あるいは彼女の力になりたいといつたフレンズ達の思いが、形となって現れた結果なのかもしれない。

ある日、隔離施設付近で大きな地震が起こると同時に火山が噴火し、サンドスターが放出された。これにより建物の内部にあつたものが激しく振動した。これを結晶が動き出したと誤解したコンピューターは、すぐさま信号を送り、アムールトラを目覚めさせた。

長い眠りから目覚めたアムールトラは、瞬時にビースト化した。そして檻を破ると、そのまま結晶に強烈な一撃を加えた。

しかし結晶は相変わらず沈黙していて、全く効果が無かつた。それに気付いた彼女はビースト化を解き、攻撃を諦めた。

それでも野生解放は止まらない。このままでは何もできずに動物に戻つてしまう。彼女は必死に考えた。

アムールトラ『どうしよう。何か、他にできることは…。』

その時、施設の外からセルリアンの気配がした。アムールトラは天井を突き破つて表に飛び出すと、雄叫びを上げた。

するとそれを聞きつけて複数のセルリアンが集まって来た。アムールトラはその中へ飛び込むと、片っ端から蹴散らした。

そんな中、彼女の一撃を受けて吹き飛ばされたセルリアンの一体が、施設の壁に突っ込んで砕け散った。その風圧で、檻の中にあつたスケッチブックが飛ばされて、セルリアンの結晶の上に落ちた。

さらに屋根の穴からサンドスターが転がり落ちてきて結晶に当たった。するとそこから2人の漆黒の羽を持ったフレレンズが生まれた。

戦いが終わると、煌めくかけらの山の中にアムールトラが立っていた。周囲は竜巻が起きた後のようにめちゃくちゃだった。

これでだけのプラズムが一気に失われ、そのまま動物に戻るかと思われたが、なんと彼女はセルリアンのかげらから輝きを取り込み、力を回復させた。長い休眠の結果飢餓状態に陥った彼女の体は、輝きを直接取り込んで、フレレンズの体を維持出来るようになっていたのだ。

それからアムールトラは、セルリアンの気配を感じるたびに、そこへ駆け付けては戦って、輝きを取り込んだ。

輝きの効果は力の回復だけではなかった。

他人の輝き、すなわち楽しい思い出に触れる事で、戦いだけだった彼女の心にも徐々に穏やかな気持ち芽生えてゆき、他の事にも関心を持つようになっていった。

また、これを繰り返すうちにペース配分が出来るようになり、活動できる時間が増えていった。

このようにセルリアンとの戦いは、アムールトラが生きてゆくために必要不可欠であり、彼女の雄叫びは、セルリアンを引きつけると同時にフレレンズ達を危険から遠ざけ、被害が及ばないようにする合図だった。しかしそれに気付いてくれるフレレンズはいなかった。

フレレンズを救ったこともあつたが、彼女の性質上、意図せず周囲を破壊してしまうため、分かってもえなかった。

木から降りられなくなったフレレンズを助けようとした時は、木を根こそぎ倒してしまったし、川に落ちたフレレンズを助けようとした時



は、飛び込んだ衝撃でその子を大量の水と一緒に岸まで吹っ飛ばしてしまつた。川底には大穴が開き、まるで隕石でも落ちたかのような有様となつた。

こうして、アムールトラはあちこちで雄叫びを上げて暴れ回る怖いフレンズだとされ、みんなから避けられるようになった。

#### ○ビーストダヨ

ある日、アムールトラは壊れたラツキービーストを見つけた。長い間放置されていたようで、あちこちに草が絡み付いている。体もすっかり色あせているが、わずかにオレンジ色が残っていた。

それは彼女に向かって、何度もこう話しかけてきた。

ラツキービースト「ハジメマシテ。…クハ…：ビーストダヨ、ヨロシクネ。」

ところどころ音声途切れている。

本来、ラツキービーストはフレンズへの干渉を避けるため、ヒトの緊急時以外会話ができないようプログラムされている。しかしこのラツキービーストは、壊れてその制限が失われたため、彼女に話しかけたのだつた。

たまたまこの会話を耳にしたフレンズが、物陰から2人の様子をうかがっていた。その子はボス（ラツキービースト）が話せる事を知らなかったため、アムールトラがボスに自己紹介をしているのだと勘違いした。そしてその場を離れた後、見聞きした事をお友達たちに話して聞かせた。

フレンズ「見慣れないフレンズがボスに自分の名前を言つてたよ。ビーストって言うんだって。」

アムールトラは、しばらくラツキービーストの前に座っていたが、よく聞くとその声は、近くに落ちていた時計ほどの大きさの機械（本体）から出ていた。

本体「ハジメマシテ。…：ビーストダヨ、ヨロシクネ。」

彼女はもう言葉を話す事も理解する事もできなかつたが、それを聞いているうちに、この子も一人ぼっちで寂しいんだと思つた。

アムールトラ「ガウ：（一緒に来る？私も寂しかったんだ。）」  
そう言うと彼女は、本体を拾ってその場を後にした。

形はフレンズと全然違うけれど、目が覚めてから初めてできたお友達だった。ようやく誰かがそばにいてくれるようになって、彼女はとても嬉しかった。

それから、アムールトラがパーク中を駆けまわっている間も、本体はたびたび同じ台詞を口にした。そして、それを耳にしたフレンズ達の間でも、ビーストという名前が広がっていった。

本体が完全に壊れて話をしなくなった頃、パークには『自己紹介をしながら暴れ回るフレンズがいる』という妙な噂が広まっていた。

いつしか彼女は、フレンズ達からビーストと呼ばれ、避けられるようになっていた。

本体がしゃべらなくなって、アムールトラはまた一人ぼっちになったと感じていた。それはとても寂しくて、恐ろしかった。

彼女はセルリアンと戦いながら、自分を受け入れてくれるお友達を必死に探した。戦って、避けられて、探して、また戦って…。

しかしお友達は見つからなかった。アムールトラはとても優しいフレンズだったのだが、会話ができず不器用で、それをうまく伝えられなかった。

やがて、避けられる事に疲れた彼女は、戦いの時以外はフレンズから身を隠して、ひっそりと暮らすようになった。

## 第8話 ○かばんちゃん和サーバルキヤツト

○かばんちゃん和サーバルキヤツト

その日アムールトラは、ジャングルエリアの研究所の屋根の上で眠っていた。すると突然、近くから強力なセルリアンの気配がした。彼女は飛び起き、そこへ向かって一心不乱に駆け出した。

木がまばらに生えている広場…、そこでかばんちゃん和サーバルが帽子型のセルリアンに襲われていた。ヒトの輝きに引き寄せられたセルリウムが、かばんちゃんの被っていた帽子の輝きを取り込んでセルリアン化し、2人に襲いかかってきたのだ。

サーバルが野生解放して必死に応戦したが、強力なセルリアンで歯が立たなかつた。いくら爪をたたき込んでも、一向にひるむ様子がなない。そしてついにサンドスターを使い果たし、サーバルキヤツトの姿に戻ってしまった。それでも懸命にセルリアンに立ち向かったが一撃で跳ね飛ばされ、そのまま岩に叩きつけられてしまった。

かばんちゃんが倒れているサーバルキヤツトに駆け寄ると、背後のセルリアンが2人に向かって飛びかかってきた。

『サーバルちゃんだけは助けないとー!』

かばんちゃんは決死の覚悟でサーバルキヤツトに覆い被さつた。すると背後からぱつかああん!という音がした。かばんちゃんが振り向いた先には、煌めくかけらが散らばる中で佇んでいるフレンズの姿があつた。絶体絶命の状況に陥つた2人を助けるためにビースト化したアムールトラが、セルリアンを撃退したのだ。

かばんちゃんもビーストの噂は知っていた。乱暴者で、いつも一人で暴れまわっているオレンジ色のフレンズだという。そして目の前の彼女は、厳つい手枷をはめていて、野生動物のような大きな手には巨大な鋭い爪が生えていて、目がギラギラと輝いている。さらにはその体からけものプラズムが激しく吹き出していて、全身がまるで炎のように揺らめいている。

するとその子は、かばんちゃん達をじつと見つめながらゆつくりと歩み寄ってきた。

かばんちゃん『こわい…!』

かばんちゃんは震えながら、サーバルキャットをぎゅつと抱きしめた。

このように怯えてしまったのは噂のせいだけではなく、あまりの出来事に動転していた事も大きかった。頭の中は感謝よりも恐怖でいっぱい、これでは助けてもらったお礼を言うことなどできるはずもなかった。

『ふむ…、こっちの赤い子に怪我はないみたいだ。』

アムールトラはビースト化を解くと、2人の前にしゃがんで様子を見かけた。

かばんちゃんは体を小刻みに震わせて、泣きじやくりながらサーバルキャットを抱いている。一方サーバルキャットは傷だらけで、酷く弱っていた。

『まずい、このままじゃ…けどどうすれば…そうだ、サンドスターを溶ければ助かるかもしれない!』

こう考えたアムールトラは、かばんちゃんに「ガウウ（助ける。任せて）」と言った。しかし言葉が話せなくなっていたので、かばんちゃんには唸り声にしか聞こえなかった。

それから彼女はかばんちゃんの腕からサーバルキャットを奪い取ると、その首筋をしつかりと口に咥え、強い輝きの気配のするサバナに向かつて、四つん這いで猛然と駆け出した。

それを見て『サーバルちゃんがさらわれて食べられてしまう!』と勘違いしたかばんちゃんは、目に涙を浮かべ、サーバルの名を叫びながら必死にアムールトラの跡を追った。

しかし足の速いフレンズが相手では勝負にならない。どんどん引き離され、あつという間に見失ってしまった。

かばんちゃん「サーバルちゃん!サーバル…チャン…、ザー…バル…。」

とうとう息が切れて走る事ができなくなったかばんちゃんは、苦悶の表情を浮かべてガツクリとその場にへたり込んだ。

するとそこへ博士と助手が舞い降りた。ラツキービーストの通信からかばんちゃんの危機を知り、急いで駆け付けたのだ。

ここへ来る途中でジャングルの中にある建物を見かけた2人は、かばんちゃんは休ませるため、そこに連れてゆくことにした。かばんちゃんは錯乱していたが、道すがら「フレレンズは動物を食べない。」と、何度も言い聞かせているうちにしだいに落ち着きを取り戻した。

生い茂った草を踏み分けながら歩いてゆくと、厚い壁に囲まれた大きな建物が見えてきた。入り口のドアに鍵はかかっておらず、すんなり中に入ることができた。

ここには電気が通っていて、様々な機械だけでなく、キッチンや寝室もあった。2人はひとまずかばんちゃんをベッドに寝かせた。

それからキッチンを調べてみると、ホットプレートと鍋があった。火は怖くて扱えないが、これなら電気の力で料理を作ることができそうだ。

博士「おいしい料理を作って、かばんを元気づけてやるのですよ。」  
助手「良いアイデアです博士。料理といえばアレですね。」

蛇口から水が出る事を確認した後、2人はカレーの食材を探しに外へ出た。しかしここにはお米と、とろみの素となる小麦粉と、味と香りを付けるための香辛料が無かった。これではカレーを作れない。

その代わり、何やら赤いものが生えていたので取ってきた。これがなんなのかは分からないが、幸いパークの自然に詳しい者がすぐそばにいる。

2人は寝室に行き、かばんちゃんづてにラツキーさんに教えてもらった。なんでもトウガラシというものだそうだ。辛ければどうにかなるだろうと判断した2人は、これをキッチンに持ってゆき、先程拾ってきたきのこや山菜と一緒に爪で切り刻むと、グラグラとお湯を沸かした鍋に放り込んだ。

しばらくして、博士と助手が得意満面な表情を浮かべながら、お鍋と3人分の食器を持って寝室にやってきた。そして料理をお椀によそうと、匙と一緒にかばんちゃんに手渡した。

その中に入っていたのは、禍々しい真つ赤な汁物だ。かばんちゃんはそれを一目見るなり嫌な予感がしたが、2人のキラキラした眼差しを見て断れなくなってしまうた。

そして3人で「いただきます。」を言って一口食べてみた。すると一瞬の静寂ののち、3人とも凄まじい顔つきになり、派手にむせて吹き出してしまった。

博士と助手がこしらえた料理は具材の大きさがバラバラなうえ、生煮えで灰汁が抜けていない。また汁は苦くて辛いだけで旨味が無いと、とても食べられるような代物ではなかったのだ。

博士「なんれふかこれは！これは料理じゃないれふよ、助手！」  
助手「博士の指示通りに作ったのれふよ！」

目をうるませ、真つ赤になった唇で文句を言い合う博士と助手。しかしそれを見たかばんちゃんが笑った。少し元気がでてきたようだ。その様子を見た2人は安堵した。

博士「闇雲に探してもサーバルは見つからないのです。」  
助手「ここは誘拐犯の縄張りかもしれないのです。何か分かるかもしれないのです。」  
何か手がかりが見つかるかもしれない。4人は建物を探索した。

そして徐々にこの建物の事が分かってきた。ここはかつてビースト計画（プロジェクト）が行われた研究所だったらしい。

かばんちゃんは研究所に残された資料を読み、アムールトラがビーストになった経緯を知った。また研究者の日記には、彼女を心配するパークの住人達の様子が細かく記されていた。

これらの事から、かばんちゃんは彼女が悪いフレンズでは無いと判断した。

かばんちゃん「きつと、サーバルちゃんは大丈夫。」

そう確信したかばんちゃんは、すぐにでも追いかけてサーバルを探したかったが、再び自分がセルリアンを生み出してパークのみんなを危険に晒してしまうかもしれないと考えると、それができなかった。

どうやらここではセルリアンの研究も行われていたようだった。

もしかしたら対処法が見つかって、みんなと安心して暮らせる日が来るかもしれない。いや、どれだけ時間がかかっても必ず見つけ出すと、かばんちゃんは決意した。

かばんちゃん「それまで待っててね、サーバルちゃん。いつか必ず会いに行くからね。」

こうしてかばんちゃんは、ラッキーさんと博士と助手の4人でここに住み、セルリアンの研究に励む事になった。

とは言うものの、まずはじめに取り組んだのは食べられる料理を作ることだった。そうして試行錯誤の末に完成した激辛鍋は、ここでの定番メニューとなった。

☆

一方、サバンナに到着したアムールトラは、水飲み場にやってきていた。走りっぱなしですっかり息が切れていた彼女は、サーバルキヤットを一旦水辺に置くと、泉に直接口を付けてガブガブ飲んだ。

どうにか人心地がついて改めてサーバルキヤットの方を見ると、相変わらず目を閉じたまま倒れている。

すると近くの山が噴火し、あたりにサンドスターが降り注いだ。そしてその中の一つがこちらに飛んできて、サーバルキヤットに当たった。その体が虹色に光り輝き、むくむくと膨らんだのちヒトのような姿が形成されてゆく。

そうして輝きが消えた後には、サーバルキヤットはフレンズの姿になつていた。まだ目を閉じたままだが、規則正しい呼吸をしている。

それを見て彼女はホッと胸を撫で下ろしたものの、気がかりな事もあった。

アムールトラ『よかった。…でも記憶は無くしてしまっただろう。』その時、アムールトラはふと水面に映っているものに気付いた。そこには厳つい手枷のついた腕と、野生動物のような大きな手、長く伸びた髪と鋭い目、そしてギラギラと輝くキバの生えた口をしたフレンズの姿があった。

それから倒れているサーバルを見た。この子の周りには、サンドス

ターがキラキラと輝いている。

それを見て、『この子と私では、住む世界が違うんだ。』と思った。彼女はサーバルを起こさないようにそっと離れると、物陰に隠れて様子をうかがった。

しばらくすると、これまたおつきな耳をしたフレンズ：カラカルがやって来た。その子はしばらくの間サーバルを不思議そうに見つめた後、声をかけた。

するとサーバルはゆっくりと目を開いた。そしてカラカルをじつと見た後、口を動かし始めた。ここからでは会話は聞こえないが、どうやら言葉を交わしているようだ。

それからサーバルは起き上がり、にこにこしながらカラカルと一緒に駆けて行った。

その様子を見届けたアムールトラは、少しだけ寂しそうな顔をしていた。

『お友達もできたようだし、私がいなくても大丈夫だよね。』

彼女はそう判断し、その場から姿を消した。

しかしこの時、彼女はちよつとしたミスを犯した。

サーバルの命が助かった事で気が緩んでしまい、かばんちゃんの下へ送り返す事をすっかり忘れてしまったのだ。



## 第9話 ● ビーストの旅立ち

### ● ビーストの旅立ち

このところパークでは地震が頻発し、大型セルリアンがよく目撃されるようになっていた。

この日もサバンナで大きな地震が起きた。

たまたまそこにいたビーストは木の上で休んでいたが、激しい揺れで起き上がった。

そして大型セルリアンの気配を感じ取った彼女は、自分に注意を引き付けるため雄叫びを上げた。

ビースト「グオオオオオー!!」

声は届いたはずだが、気配はこちらではなく駅の方角に向かってゆく。もしかしたら誰かが襲われているのかもしれない、そう考えた彼女は急いでそこに向かった。

駅ではモノレールが、テレビカメラに3本の巨大なドリル型の足が生えたような形をした大型セルリアンに襲撃されていた。モノレールの背後からレールを突き破って現れたカメラ型セルリアンは、そのままレールの上を物凄いスピードで走り出した。モノレールは懸命に逃げているが、徐々に距離が縮まってゆく。

と、カメラ型セルリアンが一瞬身をかがめた後、モノレール目掛けてハエトリグモのように飛びかかった。

もはや一刻の猶予もない。彼女はビースト化し、地面を思い切り蹴ると、そのまま大型セルリアンの横腹に一直線に飛び込んでゆき、強烈な爪の一撃を叩き込んだ。

その際、横目でモノレールの中の様子をうかがうと、サーバルとカラカル、そして帽子を被った子供が一瞬見えた。

ぱっかああん!

一撃を受けたセルリアンの巨体が吹き飛び、粉々に砕け散った。

そのかけらが散らばる中、ビーストはモノレールを見送りながら、帽子の子の事を考えていた。顔ははつきりとは見えなかったが、シルエットがあの子にそっくりだった。

どういふ事なのかは分からなかったが、とにかく『会いたい』と思つたビーストは、モノレールの跡を追いかけた。

● 2つの影

そんなビーストの様子を、上空からじつと見つめる2つの影の姿があった。それはカンザシフウチョウとカタカケフウチョウのフウチョウコンビだった。

カンザシ「古のけものが動いた。何を思い、何処へ行くのか。」  
カタカケ「己の道を見つけたか、あるいはただの気まぐれか。」  
そうつぶやくと、2つの影は羽音一つ立てずに宙を舞い、何処かに消えた。

モノレールは速い上に匂いも残さないので、追跡は困難だった。  
ビーストはレールに沿って必死に追いかけたが、モノレールが駅に到着し、建物の陰に隠れて停まっていたため、知らずに追い越してしまった。

ひたすら走り続けていると、ジャングルが見えてきた。  
そこに入つてしばらく歩くと、妙な気配がした。

その場所へ行つてみると、木々が途切れて開けた所に出た。  
そこはとても気持ちの良い広場だった。

暖かな日差しが降り注ぎ、泉がキラキラと輝いている。

そこに2つの影が佇んでいた。見た目はフレンズのようだが匂いがしない。セルリアンには見えないが、それに近い気配を感じる。彼女はそれを敵と判断し、飛びかかった。

すると影は音もなく身をひるがえし、彼女の爪をすり抜けた。  
空を切つた爪が勢い余つて地面を大きくえぐつた。

彼女は間髪入れず何度も飛びかかったが、爪が影を捉えることはなかった。代わりに木々がへし折れ、泉は裂け、いたるところに生々しい爪痕が残つた。

しばらくすると、2つの影はフワリと宙に舞い上がり、ジャングルの奥へと消えていった。ビーストはそれを追いかけた。  
後には、見るも無残に破壊された広場だけが残つた。

そこへヒヨウ姉妹がやって来た。

クロヒヨウ「掃除も終わったし、ほんま楽しみやな姉ちゃん…え!?!」

ヒヨウ「これは…!? 一体誰がこんな事を?」

広場の惨状を目の当たりにして、2人は驚きの声を上げた。

翌日も、ビーストはジャングルで影を探し続けていた。

すると、ゴリラ、ヒヨウ、クロヒヨウ、イリエワニ、メガネカイマン達ジャングルのフレンズに混ざって、サーバルとカラカル、そしてあの子の匂いがした。彼女は探索を中断し、無我夢中でそこに向かった。

そこではみんなが紙相撲で遊んでいた。しかし遠くから様子をうかがっていた彼女には、地面を指で叩いて遊んでいるように見えた。そして、みんなの中にあの子供がいるのを見つけ、いてもたってもいられなくなったビーストは、その輪の中に文字通り飛び込んだ。周りの木々より高く跳躍し、みんなが叩いていた地面を思い切り叩いた。

ヒヨウ姉妹&ワニ2人「どわー!?!」

その一撃で紙相撲は粉々になり、地面は粉碎されて大量の砂埃と なって舞い上がり、周囲のフレンズは吹っ飛ばされた。

一瞬早く気付いたサーバルは後方へ跳び、カラカルはキュルルをかかえながら跳んで難を逃れた。

とっさにガードを固めたゴリラは、腕の間から砂埃の向こうの人影を見つめていた。しだいにそれが晴れて、彼女の姿が見えてきた。

ゴリラ『フレンズ離れしたすごい力…もしかして、この子が広場を荒らしたのか?』

ビーストは鼻をひくつかせた後、子供の方を見た。

ビースト『やっぱり間違いない、またあの子に会えたんだ!』

彼女は嬉しさのあまり我を忘れて飛びかかると、カラカルの横をすり抜けて子供を抱きしめようとした。

すると子供は尻餅をつき、怯えたような、困惑したような眼差しでビーストを見た。その様子が、セルリアンに襲われて記憶を失い、

キョトンとした顔で彼女を見ていたあの子の姿と重なった。彼女はすんでのところで立ち止まり、子供をじっと見つめた。

よく見ると、あの子とは何かが異なっていた。姿と匂いは一緒だが、この子供の持つ気配は追いかけていた2つの影とよく似ていたため、彼女は戸惑った。

そこへキュルルを助けようと、カラカルが背後から飛びかかっていた。殺気を感じ取り、彼女は反射的にカラカルに向かっていった。

互いの爪がぶつかり合うかに思われた瞬間、ビースト化したサーバルが間に入って2人を受け止めた。

サーバル「ケンカは駄目だよ！」

突然顔を驚掴みにされ、ビーストは驚いた。

ビースト『この子もビースト化できるんだ。』

彼女はその手を跳ね除け、後ろに跳んで一旦距離を取った。

サーバルの全身から、凄いい勢いだけでもプラズムが吹き出している。カラカルはその様子を見て大きな声を上げた。

カラカル「ちよつとなにこれ、大丈夫なのサーバル!？」

不意に飛びかかられつい応戦してしまったが、ケンカをしたいわけではない。ビーストはぶらりと両腕を下ろし、矛を収めた。それを見てサーバルもビースト化をやめた。すると背後から紙飛行機が飛んできた。

☆

ジャングルで食材を探していたかばんさんと助手は、ラッキーさんからビーストが現れたとの知らせを受けて、車でそこに向かった。

そしてかばんさんは少し離れた所で車を停めると、運転席から降りて双眼鏡で様子をうかがった。すると、思った通りビーストがみんなと揉めていた。

かばんさんは以前ビーストに会ったことがある。それに加えて、研究所の資料などから彼女のことを学んでいた。

彼女の特性上、意図せず周囲やフレレンズを傷つけてしまう可能性があるため、一旦みんなから離す必要があった。

かばんさんは後部座席から紙飛行機を取り出した。

これはセルリアンの注意を引きつけるだけでなく、フレنزの力比を中断させるものでもあった。

ジャングルにはヤンチャな子もいて、時々フレنز同士で力比べが行われていたのだが、夢中になりすぎてけが人が出そうになる事もあった。

そんな子達のまとめ役であるゴリラから、安全な解決策はないかと相談されたかばんさんは、一つの手段として、大きな音や煙、匂いといったものが利用できないかと考えた。

試行錯誤を続けているうちに、どういうわけかネコ科の子の注意を引きつけるマタタビというものを見つけた。これを染み込ませた紙飛行機には、目印として先っぽに小さな赤いリボンがついていた。

かばんさんは、ビーストに狙いを定めてそれを投げた。

紙飛行機はリボンを炎のようにチロチロと揺らしながら、ビーストの目の前を横切って、ジャングルの奥へと飛んでいった。

突然現れた紙飛行機の匂いに惹かれ、彼女はそれを追いかけた。

キュルルはその後ろ姿を見ながら、こう考えていた。

『びっくりしたあ…。あの子は何だったんだろう？襲いかかってきたんじゃないくて、僕に何か伝えたかったように見えたけど。』

その様子を空からうかがっていた助手が、かばんさんに声をかけた。

助手「うまくいったのです。」

かばん「分かった。ありがとう。」

それからかばんさんは運転席に乗り込み、車をみんなの前まで移動させるとこう呼び掛けた。

かばん「みんな乗って！」

キュルル「え、でも…。」

キュルルはビーストの事が気がかりだった。

ゴリラ「早く行くんだ！」

だがゴリラに促され、キュルル達は車に駆け込んだ。

そしてゴリラ達は屋根に乗った。

ゴリラ「みんな乗ったよ！」

かぼん「いい？出発するよ！」

かぼんさんはみんなを車に乗せてその場から離れた。それから少し遅れて、助手は空から辺りを警戒しつつ車を追いかけた。

一方ビーストは紙飛行機を捕まえてじやれていたが、車が走り去る音で我に帰った。そちらを見つめながら、あの子供のことを考えた。

ビースト『あの子供は一体何なんだろう？少なくともあの子じゃない。』

すると突然、背後から得体の知れない気配がした。

振り向くとあの2つの影がすぐそばに浮いていて、冷たい笑みを浮かべながら彼女を見ていた。

すかさずビーストは影に飛びかかった。すると影が弾け、漆黒の闇が彼女を包み込んだ。

そして闇の中から声が響いた。

カンザシ「束の間の寢床を用意した。」

カタカケ「しばし休まれよ。」

気がつくとビーストは、何も無い真っ暗な空間に立っていた。

あたりを見回しても何も見えない。音も匂いもまったくしない。

そして彼女は、闇の中をあてもなくさまよった。

## 第10話 ● 揺れる思い

揺れる思い

注) 希望の歌は漫画版に出てきました。歌詞はネクソン版のプロローグです。

かばんさんはハンドルを握りながらみんなに声をかけた。

かばん「みんな大丈夫？」

すると、屋根の上からゴリラ達の「どうにか。」という返事が返ってきた。

そしてサーバルが後部座席からこう言った。

サーバル「助けてくれてありがとう、私はサーバルキャットのサーバル！あなたは？」

かばん「サーバル…？」

その名前を聞いて、かばんさんは思わず振り向いた。すると目の前に、思い出のままの姿をしたサーバルがいた。そして胸の中が懐かしい気持ちでいっぱいになり、目頭が熱くなった。

じつとサーバルを見つめていると、腕につけたラツキーさんが注意を促した。

ラツキーさん「カバン、前ヲミテ」

その言葉が終わると同時に、車が石を踏みつけてガクンと揺れた。

みんな「わあ!!」

かばんさんは慌てて前を向いた。

かばん「ごめんごめん、すっかり運転するよ。私はかばん。このパークガイドだよ。この腕の小さいのは、ラツキービーストのラツキーさん。」

ラツキーさん「ヨロシクネ。」

サーバル「よろしくね、かばんさん、ラツキーさん。」

そしてカラカルとキュルルもお礼と自己紹介をした。

かばん「君はヒトなんだね。私もそうなんだ。」

キュルル「ええー!!」

ジャングルラツキーが言っていたヒトが目の前にいた事に、キュルルはとても驚いた。

すると屋根から声がした。

メガネカイマン「かばんさん、広場がめちやくちやにされちゃったんです。」

「あらかじめ時間と場所とルールを決めて、力比べをしてみたらどうだろう。」というかばんさんの提案で、そこで運動会が開かれる事になり、ジャングルのみんなで小石や落ち葉を掃除したりして準備を進めていたのだ。

しかし誰かが広場を荒らした事で、ジャングルの子達の間で言い争いが起きてしまった。一触即発の雰囲気の中、ゴリラはなんとか穏便に済ませられないかと考えていた。そこへキュルル達が通りがかつた。

ゴリラ「こうなつた訳を話した後、いくつか競技の内容を教えただ。それを聞いたキュルルさんが、スケッチブックで相撲を作つてくれて争いが収まつただけで、これも壊されてしまった。」

かばん「そつか……。残念だけど運動会は後回しにして、まずはみんなで広場を元通りにしよう。」

それを聞いたキュルルは、さっきの子の事を思い返した。

キュルル「それもあの子がやったのかな？」

カラカル「もー、いきなりなんだつたのよあいつ！」

イリエワニ「あれは素晴らしい一撃だった。今度は正々堂々手合わせ願いたいな。」

ゴリラ「もしかして、あれが噂のビースト？」

かばん「そう呼ばれてるね。あの子は言葉のやり取りができないし、常に野生解放状態だから、本人にそのつもりがなくても周囲を傷つけてしまう事もある。けど安心して。不器用だけど悪い子じゃないから。」

襲われたにもかかわらずあまり怖いと感じないのはそういう事だからかもしれない、とキュルルは考えた。

キュルル「じゃああの子、一人ぼっちなんだ。かわいそう。」



カラカルはそう説明されても半信半疑だった。  
カラカル「うーん、ホントにそうなのかな？」

サーバルは感心した様子で言った。

サーバル「かばんさんは物知りだね、すつごーい！」

かばんさんは、はにかみながらこう言った。

かばん「ハハ、ありがとう。昔ちよつと関わりがあつてね。」

かばんさんはこのやり取りから、サーバルはビーストにさらわれた事と、自分の事を覚えていないのだと判断した。あの時は動物の姿だったし、記憶を失ってしまったか、あるいは別個体かもしれない。なのでサーバルちゃんに会えた！という気持ちは、ひとまずしまっておく事にした。

かばんさんはゴリラ達をビーストから離れた場所に降ろした。

かばん「ここならあの子も来ないと思うよ。広場の事は、もう少し落ち着いてからにしよう。」

ゴリラ「助かったよ。ありがとうかばんさん。」

別れ際に、キュルルが彼女達に絵を手渡した。

キュルル「はい！ジャングルのみんなを描いてみたんだ。」

ヒョウ「おおー！」

クロヒョウ「これうちらか！」

イリエワニ「見事なものだな。」

メガネカイマン「素敵な力ですよね。」

ゴリラ「ありがとう。おうちが見つかったら、ぜひまた来てくれ。」

その後で、キュルルが起きた時の様子と旅の目的を聞いたかばんさんは、何か力になれるかもしれないと考え、3人と一緒に住まいである研究所へと向かった。

かばんさんがハンドル近くのスイッチを押すと、スピーカーから音楽が流れてきた。それに合わせて鼻歌を歌いながら運転していると、隣に座っているキュルルが話しかけてきた。

キュルル「その音、なんなんですか？」

かばん「あ、ごめん、うるさかった?」

キュルル「いえ全然。こういうの、初めて聞いたので。」

かばん「これは歌っていうんだ。音だけじゃなく、それに合わせた言葉もあるんだよ。昔の記録を調べていたら見つけてね。いつ誰が、何のために作ったのかは分からないのだけど。」

それを聞いたサーバルが、後ろから身を乗り出してきた。

サーバル「なにそれなにそれ、聞いてみたーい!」

かばん「そう?それじゃあー!」

かばんさんは曲を巻き戻すと、歌い出しからせつせつと歌い始めた。それはなんだか悲しい、けれどもとても綺麗で気持ちが揺さぶられる歌だった。すると歌を聞いていたサーバルとカラカルも、途中から一緒に歌いだした。そんな3人を見て、キュルルは目を丸くしながらじつと歌に耳を傾けていた。

歌が終わると、キュルルは感心した様子でこう言った。

キュルル「歌ってすごいなあ…。けどどうして2人とも歌えるの?」

サーバル「うーん、分かんないや!なんでだろう?」

カラカル「不思議なんだけど、自然と口から出てきたのよね。」

かばん「ゴリラさん達もそうだったんだ。もしかしたらフレンズみんなが歌えるのかもしれない。私は希望の歌って呼んでるんだ。」

キュルル「希望の、歌…。」

それを聞いたキュルルは、歌えなかった自分はやはりヒトで、フレンズとは少し違うのだなと考え、気持ちが沈んだ。

その様子に気付いたかばんさんは、微笑みを浮かべながら言った。

かばん「心配しないで。みんなと同じじゃなくてもいいんだ。キュルルさんはまだ起きたばかりで不安もたくさんあるだろうけど、好きな場所や得意な事は、探していればきつと見つかるよ。」

「ジャングルでは話を聞いただけで紙で相撲を作ったっていうし、さつきはビーストの事を思いやってくれたよね。君は賢くて器用で、とても優しいんだね。」

キュルル「えっ!?!そう、なのかな…。」

褒められて嬉しい反面、恥ずかしくもあった。周りを見ると、サーバルもカラカルも笑顔でキュルルを見ている。すぐそばに支えてくれる仲間がいる事が分かって、キュルルは安心した。

しばらく進むと、厚い壁に囲まれた研究所が見えてきた。

サーバル「わー、でつかーい！」

カラカル「ここがあんたのおうちなの？」

キュルル「多分違う…けどなんだかワクワクするよ！かばんさんはここに一人で住んでるんですか？」

かばん「違うよ。アフリカオオコノハズクの博士さんと、ワシミミズクの助手さんと一緒に暮らしているんだ。」

そこへ助手が音もなく空から下りてきた。そして車の屋根に乗ると、逆さに身を乗り出して窓からぬつと顔を出した。

助手「お前達、研究所を案内してやるですよ。」

キュルル達「わあっ!？」

車は薄暗いガレージに入って行った。その中には一台のジャパリバスがあり、かばんさんはその隣に車を停めた。

研究所では博士が待っていた。

博士「かばん、助手、戻ったんですね。ビーストはどうなった…

おや、珍しいお客が来たのです。」

かばん「ただいま博士さん。それは後で話すよ。この子達はおうち探しの旅をしていて、たまたまジャングルにいたんだ。知りたい事があるそうだから連れてきたんだよ。」

それを聞いた博士は胸を張った。

博士「何でも聞くと良いのです。我々は賢いのです。」

かばんさん達は3人に研究所を案内した。ここにはラッキービーストのメンテナンスを行う機械もあり、数体のラッキービーストがその上に並んでいた。本体は外されて、前の台座に固定されていた。

その後、かばんさん達はお茶とお菓子で3人をもてなした。それからキュルルの話を聞いて見解を述べたり、セルリウムの研究を見せた

り、セルリアンと海底火山の関係に気付いたキュルルの判断力に驚かされたりした。

そうこうしているうちに夕方になった。かばんさん達は3人に、今日はここに泊まるよう勧めた。夕食は定番の激辛鍋にしたが、警戒心の強いカラカルは食べようとしなかったので、あらかじめ用意しておいたジャパリまん、きのこのスープをご馳走した。

ご飯を食べた後、3人はお風呂に入った。サーバルとカラカルは毛皮を着たままだったが、キュルルはどうにも違和感が拭えなくて、服を脱いで一緒に入った。

それからたくさんのベッドが並んでいる寝室に案内された。

窓のそばにカラカル、それからキュルル、サーバルと順に並んだ。

サーバル「面白いとこだね。辛いご飯も、最初はビツクリしたけどおいしかった。カラカルも食べればよかったのに。」

カラカル「いいとこなのは分かるけど、あれだけはゴメンだわ。あんた火イ吹いてたじゃない。キュルルはどう？」

キュルル「うん。もしかして、おうちつてこういう所なのかもしれない。美味しいものがあって、みんなが笑ってて、あったかくて明るくて、安心できて……。」

サーバル「キュルルちゃんのおうちも、きっと素敵なお所だよ。」

カラカル「あたし達と一緒に探せば、必ず見つかるわよ。」

キュルル「そうだね、ありがとう。」

それからしばらく話をした後、3人は眠りについた。

☆

今夜は満月。博士と助手にビーストと車の中での事を報告した後、かばんさんは2階の自室で調べ物をしていた。すると部屋に助手が入ってきた。

助手「かばん、ちよつといいですか？」

かばん「どうしたのミミちゃん？」

そう呼ばれて助手の顔が赤くなった。

助手「……!!くれぐれも、お客の前ではそう呼ばないで欲しいので

す。」

かばん「大丈夫、気をつけてるよ。それで何か用？」

助手は、ホウツと息を吐き出して仕切り直した。

助手「あの子供は、なんだか怪しいのです。うまく言えないのですが、フレンズともヒトとも違う、セルリアンに似た気配がするのです。」

「ですが無邪気で明るくて、とても危険な存在には見えないのです。博士も同じ意見で、ひとまず様子を見ると言っているのですが、いつか大事件を起こしそうな、嫌な予感がするのです。」

かばん「うーん、それは考えすぎなんじゃないかな？」

助手「なら良いのですが。かばんは何か気になる事はないのですか？」

かばん「そうだね、そばにいとこう、違和感みたいなものがあるんだ。難しい事を考えられるのに、動作は誰かの真似をするのに必死というか。最近までずっと眠っていたそうだから、心と体がチグハグなのは、無理もない事なのかもしれないけどね。」

助手「おうちを探すと言っていました、この記録から察するに、キユルルはセルリアンの結晶から生まれたのです。教えてあげないのですか、かばん？」

かばん「難しいところだね。それを知ったら多分、すごく傷つくと思う。ピーストの事を詳しく話せないのも、それに触れないためだしね。もし教えるなら、旅を続ける中で自分の居場所を見つけてからじゃないと。」

でも、あのまま行かせるのは不安なんだよね。私と一緒に行けたらよかったんだけど。」

そう言って、かばんさんはふと月を見上げた。

煌々と輝く月の光が、ガレージの窓から差し込んでいる。そこには、ジャパリバスの横に並んで立っている2つの影の姿があった。

カンザシ「今宵は満月。闇が謳い躍る夜。」

カタカケ「我らが王の目覚めを祝い、舞踏会と洒落込もう。」

その言葉が終わると同時に大きな地震が起こった。研究所が激しく揺れ、非常用の明かりがついた。寝室で眠っていた3人は、一斉に目を覚ました。

地震で研究室の棚が倒壊し、そこに保管されていたセルリウムが動き出した。するとそれはバスの輝きに引き寄せられてゆき、バス型セルリアンとなった。2つの影は、それにそつと触れると姿を消した。

外から大きな音がしたので、かばんさんと助手は窓に駆け寄った。そこからのぞいてみると、ガレージを破ったバス型セルリアンが、キュルル達が眠っている部屋めがけて猛スピードで走ってゆくのが見えた。

そこへ博士が部屋に駆け込んだ。

博士「かばん、大変なのです！」

かばん「分かっている、行こう！」

かばんさん達は大急ぎで彼らを助けに向かった。

外からバリバリという音が聞こえた後、いきなり寝室の壁が吹き飛んで、黒いジャパリバスの姿をしたセルリアンが現れた。

それは一つ目でキュルルを睨みつけると、後輪で立ち上がり、長く伸びた前輪のシャフトを触手のように蠢かしながら迫ってきた。

カラカルがとつさにキュルルを抱き抱えて逃げようとしたが、バス型セルリアンは前輪のついた2本の触手を振り回した。唸りを上げながら巨大なタイヤが突っ込んできて、カラカルの背中を直撃した。全身に激痛が走り、カラカルは意識を失って、まるで人形のようにぐったりとキュルルに覆いかぶさった。

キュルルはカラカルを支えながら、涙声で叫んだ。

キュルル「カラカル、しつかりして！」

そこへバス型セルリアンがにじり寄ってきた。それを見たサーバルは、ビースト化するために力を込めた。

すると部屋に博士と助手が飛び込んできた。2人は空中からバス型セルリアンに体当たりし、壁の穴から外へ押し出すところ叫んだ。

博士&助手「今です、かばん！」

間髪入れずかばんさんの運転するジャパリバスが、猛スピードで突っ込んできた。かばんさんは運転席からサーバルをチラツと見ると、バス型セルリアンに突進し、3人がかりで壁に押し付けた。

ドオオン！夜の闇を切り裂く大きな音がした。

かばんさんはアクセルを目一杯踏み続けた。タイヤが物凄い音を立てて回転し、車体がガタガタ揺れている。博士と助手の爪が食い込み、バス型セルリアンの体にヒビが入り始めた。

それでもなお相手は抵抗を続けていた。2本の触手を大きく振り回して博士と助手を振り払うと、今度はジャパリバスにタイヤを叩きつけようとした。

ラツキーさん「キケン、キケン。」

警告を聞いても、かばんさんは笑みを浮かべていた。

かばん「大丈夫！」

その言葉が終わるより先に、ビースト化したサーバルが矢のような速さで飛び込んできて、一つ目の上に強烈な一撃を加えた。

バス型セルリアンの動きが止まった、かと思うと体が膨れ上がり、木っ端微塵に弾け飛んだ。

キラキラしたかけらが散らばる中、かばんさんはバスから降りてサーバルに駆け寄った。

かばん「やった！さすがだね、サーバ…。」

サーバルは、全身からけものプラズムを放出させながら弱々しく笑っていた。

かばん「!!？」

サーバル「やったね、かばん、ちゃん…。」

そしてその場に膝から崩れ落ちた。

薄れゆく意識の中、かばんさんの声だけがわずかに頭に響いた。

かばん「サーバルちゃん!?!すっかりして…。」

☆

かばんさん達は2人をベッドに寝かせた。

それから研究室に残っていた、最後のサンドスターの入った瓶を持ってきた。それをいくつか取り出して、まずカラカルの背中に当て、その上から包帯を巻いた。

サーバルには、残りのサンドスターを細かく砕いて混ぜたスープを与えた。かぼんさんがサーバルの体を起こして口元に皿を当てがうと、彼女は眠ったままあつという間に飲み干した。

処置が終わると、眠っている2人の体がぼんやりと輝いた。

それを見ていたキュルルが不安そうに言った。

キュルル「他に何かできる事はないんですか？」

博士「このくらいで十分なのです。フレンズは強いので。」

助手「後は静かに見守っていれば良いのです。」

それを聞いたキュルルは、カラカルのベッドの隣に座って、2人の様子をじつと見つめていた。

次の日のお昼頃、カラカルは目を覚ました。まだ少し背中が痛むが、動けないほどではない。そして左側を見ると、キュルルがベッドに突っ伏して眠っていた。

反対側を見ると、破壊された壁には青いシートがかけられていて、隣のベッドではサーバルが寝ていた。そして2人のベッドの間に置かれた椅子に、かぼんさんが座っていた。

かぼん「おはよう。よかった、目が覚めたね。彼もさすがに疲れたんだね。さつきまで必ずおうちを見つけるんだとか、今度はみんなを守るんだとか、いろいろ話してくれてたんだよ。」

カラカルはキュルルに慈しむような眼差しを送ると、サーバルの方を見た。

カラカル「この子は大丈夫なの？」

かぼん「心配しないで、怪我はないよ。サンドスターが少なくなつて倒れてしまったんだ。」

かぼんさんは愛おしむような、でもどこか悲しげな目をしながらサーバルを見つめていた。そしてこう呟いた。

かぼん「自分の事はなりふり構わず、誰かを助けにいつてしまう。」



すごいなっと思うけど、それが誰かを心配させるって事も分かってくれたらなあ。」

それを聞いたカラカルは、思い切って尋ねてみた。

カラカル「あのね、前にサーバルから聞いたんだけど、昔とっても仲の良いフレンズと、一緒に旅をしたんだって。その子の事はよく思い出せないけど、変わった格好をしてたんだって。それってもしかしてかばんさんの事なの？」

それを聞いて、かばんさんはハツとなった。

しかしすぐに困ったような笑顔を浮かべてカラカルを見た。

かばん「さあ、どうだろうね。」

カラカル「ごめん、変な事聞いちゃって。」

かばん「ハハ、いいよ。それよりお腹空いたでしょ。ジャパリまんを持つてくるから待つてね。」

かばんさんはカラカルの質問をはぐらかして部屋から出たが、廊下を歩きながら、顎に手を当てて難しい顔をしていた。

かばんさんは先ほどの話から、あの子がサーバルちゃんだと確信した。彼女が目を覚ましたら胸の内を明かしたいとも考えたが、すぐに思いとどまった。

今3人は大切な旅をしている真っ最中だ。ここでサーバルを引き止めてしまったら、3人の思いとキュルルの成長を邪魔してしまうかもしれない。

そして何より、自分が再び強力なセルリアンを生み出してしまった事が恐ろしかった。

かばんさんがこの隔離された研究所に住み続けているのは、万が一ヒトの輝きからセルリアンが生まれても自分達で対処できるように、という意図もあった。にもかかわらず、一番大切なお友達を危ない目にあわせてしまった事に、強い憤りを感じていた。

そこへラツキーさんが話しかけてきた。

ラツキーさん「カバン、チョットイイカナ。めんて中ノラツキービーストガ、聞イテモライタイ事ガアルソウダヨ。」

かばん「え？どうしたんだろう？」

そこへ行ってみると、一体だけ目を赤く点滅させているラツキービーストがいた。話を聞いてみると、体の調子が悪く、休んでも動けないのだという。そこでかばんさんはその子を窓の近くへ連れて行き、外が見えるように角度を調節した後、こう声をかけた。

かばん「お疲れ様。ゆつくり休んでね。」

そして本体だけが台座に残された。ラツキーさんによると、この状態でもパーク中のラツキービーストと情報のやり取りができるのだそう。けれどもその本体は、かばんさんにこう訴えた。

本体「マダマダパークヲ歩キタインダ。」

それを聞いて、かばんさんは一つ思いついた事があった。

かばん「それなら、キュルルさんの旅についていってくれないかな？」

本体「マカセテ。」

一緒に旅をする事はできなくても、キュルルにこの子を渡していつでも連絡が取れるようにしておけば、何かと安心だと考えたのだ。

それからかばんさんは、2個のジャパリまんをお皿に乗せて寝室に戻ってきた。まだぐっすり眠っているキュルルを起こさないよう気をつけながらカラカルのベッドの反対側に回り込むと、一瞬足を止めて心配そうにサーバルを見た。それからカラカルにお皿を渡した。

かばん「お待ちませ。はい、どうぞ。」

カラカル「ありがとう。って、あれ!？」

いつのまにかジャパリまんが消えている。慌ててあたりを見回すと、サーバルが口をもぐもぐさせながら眠っている。どうやら寝ながらジャパリまんをかっさらったらしい。2人は肩をすくめながら苦笑した。

サーバルは食事の時以外は眠り続けていたが、2日もすると目を覚まして、すっかり元気になった。

その翌日、再び旅に出るというキュルルに、かばんさんはあの本体

を手渡した。

かばん「この子がいればいつでも連絡できるから。」

本体「ヨロシクネ。」

キュルル「わあ、ありがとう！」

キュルルは早速それを左腕につけた。

かばん「それと地図で見た通り、海辺にはセルリアンが多いから気をつけて。」

キュルル「分かりました。」

博士「お前はもっと辛さを学ぶべきです。」

助手「料理の高みを目指すのです。」

カラカル「甘いモノ作りなさいよ！」

サーバル「かばんさん、いろいろありがとう。キュルルちゃんのおうちが見つかったらまた来るね。」

かばん「楽しみに待っているよ。」

サーバル「それじゃ、いってきまーす！」

かばん「いってらっしゃい。元気だね。」

かばんさんは笑顔で3人を送り出したが、その背中が見えなくなる  
と、途端に寂しそうな顔になった。そして別れ際にキュルルからも  
らった絵に目を落とした。

博士と助手は、そんなかばんさんを心配そうに見つめていた。

## 第11話 ● 理解者

理解者

ビーストは闇の中をさまよい続けていた。

あれから一体何日経ったのか。もはや時間の感覚が完全に無くなっていった。

なぜかここでは野生解放が止まっていたが、体と心はすり減っていた。どれだけ歩いてても周りは闇だけで、暗くて寒くて寂しくて仕方なかったが、そんな事が考えられなくなるくらいビーストは疲れ切っていた。今自分が寝ているのか起きているのか、それすらもはっきりしない。もし倒れてしまったら、もう起き上がる事はできないだろう。そんな闇の中にポツンと明かりが見えた。ビーストは足を引きずりながらそこに向かった。

しかし行けども行けども明かりは大きくなならない。意識が朦朧となり、とうとう彼女は前のめりに倒れてしまった。

気がつくくと、ビーストは暗い森の中をたった一人で走っていた。森はどこまでも続いていて、一向に先が見えない。不安と寂しさで、頭がおかしくなりそうだった。

するとどこからか冷たい笑い声が聞こえてきた。そしてザワザワという音と共に木々の形が歪んでいった。それらは無数の巨大なセリリアンの姿へと変わり、たくさんの目が彼女を一斉に睨んだ。恐怖で胸が張り裂けそうになり、彼女は大きな悲鳴を上げた。

ビーストは叫び声を上げながらガバツと起き上がった。

心臓をバクバクさせながら慌ててあたりを見回すと、上には研究所の天井があつて、いつの間にかベッドに寝かされていた。

どうやらさっきのは夢だったようだ。ビーストは、ふうーっと大きな安堵の息を吐いた。それからすぐそばに誰かがいる事に気づいた。

そこには耳を塞ぎながら細くなっている博士と、羽を逆立てている助手がいた。2人とも目をまん丸にしながら彼女を見ている。

博士「お、脅かさないでほしいのです、まったく。」

助手「さ、騒がしい客なのです、まったく。」

ビーストは、ふと自分の体を見回した。なんだかこぎつぱりとしていて良い匂いがする。すると博士と助手が得意げにこう言った。

博士「気付いたようですね。眠っているフレンズを風呂に入れるなど、今の我々にはチョチョイのチョイなのです。」

助手「まさかサーバルを世話した経験が、こんなに早く活きたとは思わなかったのです。」

そこへ、叫び声を聞いたかばんさんが慌ててやってきた。

かばん「一体どうしたの!?…あ、よかった、気がついたんだね。近くで倒れていたから運び込んだんだよ。」

ビーストはかばんさんをぼんやり眺めていたが、急にハツとした。

ビースト『ヒトが呼びに来た。もう行かないと。』

寝起きのせいもあって混乱していたため、かつての実験の日々に戻ったと思い込んだビーストは、疲れ切った体で無理にベッドから出ようとした。それを見て、かばんさんが優しく声をかけた。

かばん「よかつたら元気になるまで休んでいってよ。もし行く当てがないなら、ここで暮らしてもいい。」

これを聞いたラツキーさんは、思わず声を上げた。

ラツキーさん「アワワワワ。」

けれどもかばんさんは、ラツキーさんをそつと押さえながら「大丈夫だよ。」と言った。

ビーストは言葉は分からなかったが、かばんさんの声から優しい気持ち伝わってきて、とても心が安らいだ。

彼女の声と匂いには覚えがあった。見た目はすっかり変わっているが、セルリアンに襲われた時、自分の身を顧みずサーバルキャットを守ろうとした子だ。

落ち着きを取り戻したビーストを、かばんさんはもう一度ベッドに寝かせた。

かばん「ゆっくりしててね。ご飯ができたら持って来るよ。」

博士「我々は、お前が悪いフレンズではないと知っているのです。」

よ。」

助手「ですが、もう少し静かにして欲しいのです。我々、騒がしいのは苦手なので。」

そう言うと、3人は部屋を出て行った。

それを目で見送ったビーストは、大きなあくびをした。

あの3人は自分を受け入れてくれている事が分かったため、彼女は安心して再び眠りについた。

もう怖い夢は見なかった。

いい匂いがして、ビーストは目を覚ました。ゆっくり休んだおかげで、今度はやすやすとベッドから起き上がる事ができた。

そこへかばんさんがジャパリまんを持って現れた。

かばん「お昼ご飯だよ…あれ、もう起きて大丈夫？気分はどう？」

ビースト『ごほん！』

ビーストはかばんさんからジャパリまんをもぎ取ると、ガツガツとほおぼった。それを見て、かばんさんはここにこしながらいこう言った。

かばん「よかった、元気がでてきたようだね。たくさんあるから慌てないで。」

そこへ、博士と助手が小皿を持って現れた。

博士「いい食べっぷりなのです。」

助手「これも食べてみると良いのです。」

刺激臭がして、ビーストの食べる手が止まった。恐る恐る皿の中をのぞいてみると、赤くてドロドロしたものが入っている。

かばん「それはやめたほうがいいんじゃない？」

博士「マイルドなヤツなのです。」

助手「どんなフレンズでも食べられるよう作ったのです。」

2人はキラキラした目でビーストを見つめている。彼女は警戒しながらもお皿を受け取ると、それを少しだけ口に含んでみた。

とたんに舌が痺れ、全身が燃えるように熱くなり、口から火が出た。あまりの刺激に、彼女は気を失ってしまった。

かぼんさん達は慌ててビーストを介抱した。  
ベッドに横たわる彼女をみて、博士と助手は申し訳なさそうにしている。

博士「悪いことしたのです。」

助手「実験で感覚が鋭くなっていると資料にありましたが、味覚もなのでですね。」

かぼんさんは試しにそれを舐めてみたが、舌の先がわずかにピリツとしただけだった。

そして少し不安そうに言った。

かぼん「もしかして私達、知らないうちに舌がおかしくなってるんじゃないかな。」

博士「そんなはずはないのです!」

助手「グルメな我々がおかしいなどありえないのです!」

こんなドタバタをよそにビーストが静かに寝息をたて始めたのを見て、3人はひとまず安心し部屋を出ていった。

それから数時間後、2つの影が舞い降りてきて、開いている窓の外からビーストをのぞいた。その気配に気付いた彼女はベッドから飛び起きて臨戦態勢をとったが、影はクスクスと笑いながらフワリと舞い上がった。

彼女は窓から飛び出して、その跡を追いかけた。

物音に気付いたかぼんさんが部屋をのぞいてみると、ベッドはもぬけの殻だった。慌てて窓から外を見てみたが、ビーストの姿はどこにも見当たらなかった。

かぼん「まだ体が回復しきっていないのに、どこへ行ったんだらう?」  
するとラッキーさんが慌てた様子でこう言った。

ラッキーさん「タイヘンダ。ふれんず型セルリアンガ現レタヨ。」

## 第12話 ●ごめんなさい

●ごめんなさい

影を追っていると、かつてパークの職員が生活していた宿泊施設が見えてきた。確かあそこにはイエイヌが一人で暮らしていたはず。ビーストは雄叫びを上げ、周囲に警戒を促した。

そこにたどり着く頃には夕方になっていた。

するとイエイヌのおうちの近くで、2つの影の姿がフツと消えた。だが気配はそこから感じられる。玄関の扉は開いていて、どうやら今は留守にしているようだ。

警戒しながら中の様子をうかがうと、壁に一枚の絵が飾られていた。

ビースト『あの絵はもしかして。』

中に入って近くで見ると、絵からあの子の匂いがする。

ビーストは懐かしさから、思わずその絵に手を伸ばした。すると絵の背後から2つの影が飛び出してきて、彼女に取り憑いた。

瞬く間に体が黒い輝きに覆われ、自分の意思では動かせなくなつた。そしてキュルルの匂いを追って、体が勝手に走りだした。

森林を走っていると、キュルルとイエイヌを見つけた。ビーストは2人の前に飛び出すと、唸り声を上げながらキュルルに迫った。

するとイエイヌがキュルルを守るために立ちはだかり、ビーストに飛びかかってきた。

彼女は片手で払っただけでそれを弾き飛ばした。しかし地面に叩きつけられながらも、イエイヌは懸命に立ち上がろうとしている。

それを見たビーストは、イエイヌにとどめを刺そうと向かっていった。彼女の意思は必死に抵抗していたが、体を止める事ができなかった。

するとキュルルがイエイヌを庇った。その姿があの子と重なり、彼女の頭の中にあの子の声が響き渡った。

あの子「やめて、アムールお姉ちゃん！」

振り下ろした爪が、キュルルの眼前でようやく止まった。



次の瞬間、キュルルの危機によりビースト化に目覚めたカラカルが、頭上から飛びかかってきた。彼女はとつさに、カラカルの稲妻のような一撃を両手で防いだ。腕が痺れ、轟音と共に地面が大きく凹み周囲が吹き飛んだ。すると影が彼女の体から飛び出した。

カラカルは後方に跳んで、ビーストと距離を取った。

イエイヌとキュルルも吹き飛ばされたが、サーバルが空中で2人を受け止めて、ビーストから少し離れた所に下ろしてくれた。

体から黒い輝きが消え、正気に戻ったビーストがあたりを見渡すと、敵意を剥き出しにしているカラカル、傷ついたイエイヌとそれを支えるキュルル、2人の前に立ちはだかり、警戒しているサーバルの4人が、じつとこちらを見ていた。周りはめちやくちやになっていて、爪にはイエイヌの毛がついていた。

ビースト『みんなを守るって決めたのに。』

ビーストはいたたまれない気持ちになり、俯きながら

「ガウ…（ごめんなさい）」と呟いた。

そして後ろを振り向くと、その場から一目散に逃げ出した。

#### ● 落とし物

ビーストが顔を背けた時、キュルルはその頬に一筋の涙が光っていることに気付いた。

しかし声をかける間もなく、彼女はどこかへ走り去ってしまった。寂しげな背中がどんどん遠ざかってゆくのを、キュルル達は見送った。

ビーストが立ち去った後、地面にキラリと光る何かが転がっていた。

サーバル「なんだろう、これ？」

それは壊れたラッキービーストの本体だった。キュルルやかぼんさんが着けている物と似た形をしていたが、レンズはひび割れ、あちこちボロボロになっている。サーバルはそれを拾い上げた。

ビースト化を解除したカラカルが、その場にガツクリと膝をついた。心配したキュルルはカラカルに駆け寄った。

キュルル「カラカル大丈夫？助けてくれてありがとう。」

カラカルは弱々しい声でこう答えた。

カラカル「こんなにしんどかったなんて…。」

そこへイエイヌもやってきて、キュルルと一緒にカラカルを支えた。

イエイヌ「みなさん、ひとまず私のおうちで休んでください。」

キュルル「ありがとう。イエイヌさんの手当てもしないとね。」

イエイヌ「私は平気ですから…。」

一行はイエイヌのおうちで一休みする事にした。

酷く疲弊していたカラカルは、ベッドに横になった。サーバルはその隣の椅子に腰掛けながら、カラカルを心配そうに見つめている。

キュルルは棚にあった絆創膏を、イエイヌの顔に貼ってあげた。

イエイヌは、構ってもらえるのが嬉しくてにっこりしている。

イエイヌ「ありがとう、えへへ。」

キュルル「ごめんね。僕はみんなに守られてばかりだ。」

サーバル「そんな事ないよ。」

カラカル「コーユーコトは、あたし達に任せておけばいいの。それにしてもあいつ、あんなに乱暴だったなんて！かばんさんにはああ言われたけど、やっぱり信用できない！」

いつもより声に迫力が無いが、カラカルはカンカンに怒っている。危うくキュルルが命を落とすところだったのだから当然だ。その事には理解を示しつつも、サーバルは考え込みながらこう言った。

サーバル「うーん、あの子、何か様子がおかしかったんだよ。変なものでも食べたんじゃないかな？」

キュルル「僕もそう思う。襲われた時は体が黒いモヤみたいなものに覆われていたんだけど、カラカルの攻撃でそれが無くなって。そしてたらこつちを見ながら、すごく悲しそうな顔をしてたよ。」

そしてあの涙。キュルルにはどうしても、ビーストが悪いフレンズには思えなかった。

サーバル「そうだ！ねえキュルルちゃん、あの子、これを落として

いったみたい。」

サーバルはさつき拾った本体をキュルルに渡した。

キュルル「ボロボロだけど、これって…。」

するとキュルルの腕のラツキービーストがこう言った。

ラツキービースト「コレハ壊レタラツキービーストダネ。シャベル  
コトハデキナイミタイダケド、何ヲ考エテイルカハ分カルカモシレナ  
イヨ。」

キュルル「そうなの？じゃあ聞いてみて。」

ラツキービースト「ワカツタ。接続完了。解析中…解析中…。」

キュルル達は固唾を飲んで見守っていたが、窓の外が暗くなっても  
ラツキービーストはずっとカシヤカシヤいつていた。

そこで今日はここに泊まって、明日の朝出発する事にした。

翌朝、みんなが起きたところで、ようやくラツキービーストが話し  
始めた。

ラツキービースト「解析終了。でーたモホトンド壊レテルネ。分  
カツタノハコレダケダヨ。『アムールトラヲタスケテ。』」

キュルル「アムールトラ…ビーストの事？助けてってことは、苦し  
んでるのかな。」

サーバル「やっぱり何かあったんだよ、追いかけてようよ。」

キュルル「そうだね。ねえカラカル、これ、あの子に渡してくれな  
いかな？きつと困ってるよ。」

カラカル「むく、しようがないわね。」

カラカルは訝しみながらもうなずくと、キュルルから壊れた本体を  
受け取った。

キュルル達はビーストの跡を追う事にした。イエイヌによれば、彼  
女が走って行った方角には、セントラルパークという島の中心に当た  
る場所があり、かつてはたくさんさんの施設があったが、今どうなってい  
るかは分からないという。

キュルル「イエイヌさんは、ここで大切なヒトを待っていてあげて  
よ。」

イエイ又「すみません。どうか気をつけて。」

キュルル「ありがとう。行ってくるね。」

キュルル達とイエイ又は、お互いの姿が見えなくなるまで、ずっと手を振り続けた。

そしてカラカルがキュルルにこう尋ねた。

カラカル「スケッチブックには、まだ何か描いてあるの？」

キュルル「うん、これが最後の手がかりだよ。」

そこには観覧車とホテル、そして笑っているトラのフレンズが描かれていた。

サーバル「ここはビーストのおうちなのかな？」

カラカル「ずいぶん変わった形ね。眠りやすいのコレ？」

すると突然、ラツキービーストがかばんさんの声で喋り出した。

かばん「もしもし、：ザツ：聞こえる？」

カラカル「えっ!？」

サーバル「なにになに!？」

キュルルはラツキービーストに向かって話しかけた。

キュルル「かばんさん!?!どうしたんですか？」

かばん「ザツ聞いて：ザザ：パークの危機：：ザツ：セントラルパークに：き：：て：：ザザツ」

雑音がひどい上に、言葉が途切れ途切れでなかなか聞き取れない。それでもわずかに聞こえた言葉を手掛かりにして、キュルルはこう答えた。

キュルル「分かりました。ちょうど僕たちも、ビーストを追ってセントラルパークに向かっています。」

しかしかばんさんからの返事はなかった。しばらく雑音が続いた後、通信が途絶えた。

考え込みながらサーバルが言った。

サーバル「パークの危機ってなんだろう？」

カラカル「わかんないけど、何か危ない事が起こってるみたいね。」  
キュルル「うん。もしかばんさんがそこにいるのなら、助けないと。」

そして、キュルル達は再びセントラルパークへと歩き始めた。

## 第13話 ● 2人の軌跡

### ● 2人の軌跡

かばんさん達はいなくなったビーストを探して、ジャパリバスに乗ってジャングルを訪れた。しかしゴリラ達に話を聞いてみても、見えないという。

ゴリラ「ただおかしな事があったんだ。キュルルさんの絵から、私達にそっくりな黒い一つ目のセルリアンが出てきて、どこかへ走っていったんだ。」

かばん「ここでもか……。実はキュルルさんと出会った他のフレンズからも、同じような報告が来てるんだ。私達はこれから各エリアを回って、ビーストを探しながら話を聞いてみる。もしかしたら、パークの危機が迫っているのかもしれない。」

その言葉を聞いて、ゴリラが考え込みながらこう言った。

ゴリラ「パークの危機……。私達も一緒に行つて良いだろうか。何か力になれるかもしれない。」

かばん「いいよ、乗って！」

それからかばんさん達はジャパリバスに乗って、各地のフレンズ達に話を聞きながら、キュルル達の来た道を逆にたどった。休憩も挟みつつモノレールの線路に沿って進んで、翌朝サバンナに到着した。

各エリアを訪れるたびに「一緒に行きたい！」と申し出たフレンズを乗せたため、その頃にはバスはすし詰め状態となっていた。

話をまとめると、フレンズ型セルリアンはセントラルパークに向かっているらしい。またアツアエンのバンドウイルカとカリフォルニアアシカは、海のご機嫌がどんどん悪くなっていると言っていた。これは海中のセルリウムが増えているという事だ。

かばんさんが考え事をしながらハンドルを握っていると、空から甲高い笛の音と共に誰かが舞い降りてきた。

カルガモ「そんなに速く走ったら危な……。わあ!? フレンズさんがいっぱい！」

お互い自己紹介をしてから、かぼんさんはここまでの経緯を説明した。カルガモの話によると、やはりキュルルの絵から黒くて一つ目のカルガモ型セルリアンが現れたようだ。

パークの危機と聞いて、彼女も同行してくれる事になった。そして急いでいると伝えると、空を飛びながら道案内をしてくれた。

しかし、駅のホームにも割れた岩のある水辺にもビーストは見当たらなかった。かぼんさんは地図を片手に、カルガモにこう尋ねた。

かぼん「このあたりに頑丈そうな建物があるはずなんだけど知らないかな？もしかしたらそこにビーストがいるかもしれない。」

カルガモ「キュルルさんが眠っていたという所でしたら知ってますよ。しつかりついてきてください。」

カルガモについてゆくと、隔離施設に到着した。建物のあちこちに大きな穴が開いている。

かぼん「おーい、誰かいないかー？」

かぼんさんは呼びかけてみたが、何の反応もなかった。どうやらここにもビーストはいないらしい。

かぼんさん達が入ってみると、そこにはキュルルが眠っていたセルリアンの結晶とコンピュータ、そしてビーストが入っていた檻があった。

鉄格子は内側から破られていて、床にはぬいぐるみがたくさん並んでいる。かぼんさんは、その中でひときわ目を引く大きなトラのぬいぐるみを抱き上げた。

結ばれているリボンには、「忘れないよ」「また会おうね」などの文字とフレンズの手形がびっしりと並んでいた。

かぼん「アムールトラは、本当にみんなから愛されていたんだな。そして長い眠りから目覚めた後、ここをこじ開けて結晶に向かっていった。けど何か問題があつて壊せなかったんだ。」

そして彼女はここを出た後、たった一人でパーク中を駆け回り、いつしかビーストと呼ばれ避けられるようになった。

それから結晶も触ってみた。ひんやりしていて、軽く叩くとキンキ

ンと硬い音がした。

かばん「その後で、キュルルさんがここで目を覚ました。それから外に出て、そこで出会った2人と旅を続けている。」

誰からも愛されていたのに一人ぼっちになってしまったビーストと、一人ぼっちで生まれたけれどみんなに受け入れられたキュルル。同じ場所で過ごした2人の今は、あまりにも対照的だった。

こうしてしばらく思いを巡らせた後、かばんさんはこちらの様子を伝える為、キュルルと連絡を取る事にした。

かばん「ラツキーさん、キュルルさんがどこにいるか分かる？」

ラツキーさん「せんとらるぱーくニ向カツテイルヨ。」

かばん「いけない、止めないと！キュルルさんに繋いで。」

ラツキーさん「ワカツタ。」

かばん「もしもし、キュルルさん聞こえる？」

すぐにキュルルから返事がきた。

キュルル「ザツ：ばんさん？：：したんですザツ。」

かばん「よく聞いて。大変な事が起こってるんだ。もしかしたらパークの危機かもしれない。私はフレンズ達とセントラルパークに向かうよ。危険だから、キュルルさんは安全な所にいて。」

キュルル「ザザツ：ビーストを：：：ザツ：セントラル：ザザ。」

かばん「ビースト？ビーストがそこにいるの？」

雑音が酷くて言葉が聞き取れない。かばんさんは通話を諦めた。

ラツキーさん「アノラツキービーストハ、疲レテイルミタイダヨ。何力大変ナ作業ヲシタンジヤナイカナ。」

かばん「急ごう。ああ、こんな事になるなら、ビーストの事をもっと話しておけばよかったなあ。」

かばんさんは急いで建物から出ると、フレンズ達を連れてバスを走らせた。

地殻変動により、セントラルパークは海に沈んでいる。

バスでは調査が難しいと考えたかばんさんは、一旦アツアエンへ行き、そこから船で向かう事にした。



## 第14話 ● あの日の約束

### ● あの日の約束

ビーストは泣きながら四つん這いでがむしやらに走っていたが、上空にセントラルパークの方角へと向かう2つの影をみつけると、顔を振って乱暴に涙を拭いそれを追いかけた。

日が暮れてあたりが暗くなり始めた頃、大部分が海に沈んだホテルが見えてきた。長い年月の間に地殻変動が起こり、セントラルパークは施設ごと海に沈んでしまったが、辛うじて頭を出しているのがあのホテルだ。

その時不意に、ビーストの頭の中で声がした。言葉が分からなくなっているはずなのに、なぜかそれは理解することができた。

「お前はなぜ戦うのだ？」

「お前はみんなの為に戦った。だがみんなはお前に何をした？」

そしてビーストの周囲の闇に、様々な映像が浮かび上がってきた。セルリアンと戦う自分の姿。それに怯え、自分を避けるフレンズ達。イエイヌを傷つけた自分をじっと見ている、先ほどの4人の顔。一人ぼっちで走り続ける自分…。

ビースト『うああっ…!』

彼女はなんとか映像を振り払い、ひたすら走り続けた。

声はさらに続けた。

「お前が必死に守ろうとしたものも、いずれは消える。」

「その時は、目前に迫っている。」

映像が切り替わり、今度はパーク各地の様子が映し出された。

そこでは火山があちこちで噴火し、パークが崩壊していた。フレンズ達は動物に戻り、なすすべもなく死んでいった。

ビースト『そんなっ…嫌だ…!』

それでもセルリアンだけは活動を続けていた。そして一部のセルリアンがビーストに気づき、集団で襲いかかってきた。

彼女は、すくみ上がりそうな手足を懸命に動かしてすり抜けた。

すると海の前で2つの影がおもむろに振り返り、ビーストの方を見た。

カンザシ「お前はもう十分走った。」

カタカケ「何もかも忘れて過ごせば良い。」

すると海から巨大な黒い塊が現れ、ビーストに迫ってきた。

ビースト『もう嫌だ、見たくない!』

彼女は恐怖で立ち止まらないように目をつぶった。

ビーストは真つ暗な闇の中を、たった一人で走り続けた。

走っているのにとても寒く、地面も硬く冷たい。音も匂いも何も無い。徐々に手足が重くなってゆき、走っていられなくなった。

そして彼女の心の中に、寂しい、悲しい、怖いといった負の感情が溢れていった。

ビースト「うあ…、ああああー…」

彼女は鉛のように重い手足を引きずるようにして歩きながら、声を出して泣いた。

その時、かすかな音が聞こえてきた。

たまらなくなつて、ビーストは目を開けた。すると、なんと彼女の周りには、フレンズとヒトが一緒に暮らしていた頃のセントラルパークが広がっていた。

軽快な音楽に、きらびやかな光に包まれた施設、そしてみんなの笑い声。どこもかしこも、とても活気に溢れていた。

そんな中、ビーストは一人で泣きながら通りに佇んでいた。

するとそこへ誰かがやってきて、ビーストに声をかけた。

?「キミ、どうしたの?」

顔を上げると、そこにはかつての自分が立っていた。

アムールトラは心配そうな顔をしていたが、ゆっくり片手を上げると、ビーストの目の前で指を弾いた。すると手から1枚の青い羽が現れた。

そして彼女はビーストのそばにしゃがむと、羽を頭につけてくれ

た。

その時ビーストは、自分の目線がやけに低くなっている事に気がついていた。いつの間にかビーストはあの子と同じくらいの幼い姿になっていて、肩に鞆を掛けスケッチブックまで持っている。

アムールトラ「キミ、一人ぼっちなの？お名前は？お母さんやお友達は？どこか行きたい所があるの？」

しかしビーストは何も答えることができなかった。そんな自分でもどかしくて、また涙が溢れてきた。すると彼女は少し困った顔をしてから、ビーストの頭をなでた。

そして微笑みながらこう言った。

アムールトラ「キミは凄いや。自分が困ってるって、ちゃんと周りに伝えていたんだ。だから私は、キミを見つけられたんだ。」

それを聞いてビーストは泣き止んだ。そして彼女と手を繋いで、一緒に歩き出した。

それからビーストはあの子の目線で、かつての自分と一緒に過ごした。彼女のマジックショーを見たり、絵を描いてあげたり、一緒にパークを回ったりと、とても楽しい時間が過ぎていった。

そんなある日、ポカポカ陽気の下、2人は原っぱに並んで寝転がっていた。ビーストは大の字に、アムールトラは胸の前で手を組み、目を閉じていた。気持ちの良い風が2人の顔をなでてゆく。

そしてビーストは寝転んだままアムールトラの方を向くと、ある質問をした。すると彼女は目を開けて、空を眺めながらこう答えた。アムールトラ「フレンズになつて変わった事？うーんそうだな、やっぱり明日が見えるようになった事かな。

あ、これじゃ分かんないよね？ええと…、動物だった頃は、とにかく今日を必死に生きてれば、明日にたどり着けたんだ。それが今は、まず明日があつて、それに向かって今日を生きてるんだ。」

彼女は時折顔をこすりながら、じつくりと言葉を選んで話を続けた。

「けど中には、今日を必死に生きるのをやめてしまう者もいる。なぜって？嫌な明日が見えたからだよ。どっちみちそこにたどり着くなら、必死に生きても意味がないって考えたんだね。」

「私は違うよ。どんな明日が見えたって、今日を必死に生きてる。」

それでもたどり着いてみると、良い日もあれば悪い日もある。でもこれは、昨日見たイメージなんかじゃなく、今日の自分が実際に掴んだ、かけがえのないものなんだ。」

と、ここで彼女は言葉に詰まった。そしてビーストの方を見ると、困った顔をしながら笑った。

「ごめんね、うまく言葉にできないや。」

それから不意に、真面目な顔になった。

「キミにもいつか、嫌な明日が見える日が来るかもしれない。」

けどね、今日を必死に生きるのをやめちゃ駄目だよ。でないと、良い明日には絶対にたどり着けないんだから。約束だよ。」

彼女はそう言うと、寝転びながら小指を立てた右手をビーストに差し出した。

正直、話は難しくてよく分からなかったが、彼女が自分を気にかけてくれている事が分かって、ビーストはとても嬉しくなった。そしてバツと起き上がって彼女の手を握ると、そのまま腕をブンブンと振った。

ビースト「やくそく！」

そんなはしゃいでいるビーストを見た彼女は、満足げな表情を浮かべながら何か言葉を続けようとしていた。

この時、ビーストは心に小さな引っかかりを感じた。

小指を満足に絡められない自分の太い指とジャラジャラ鳴る手枷、明日、指切り、アムールトラの表情。

これらの事が頭の中をぐるぐると回った。そして思い出した。

ビースト『そうだ、私はこの日あの子と約束したんだ、守らないと。』

ビーストがこう呟くと同時に周囲が暗くなってゆき、目の前のアムールトラや風景が見えなくなった。

そして代わりに2つの影が現れた。  
カンザシ「やはりお前は、我らの僕にはならないようだ。」  
カタカケ「これより先は一本道。足を踏み入れたら戻れない。」  
カンザシ「恐れるなら退け。恐れぬなら行け。」  
カタカケ「恐れぬは無知か、真の勇氣か。」  
そう告げると影はしだいに遠ざかってゆき、闇の中に消えた。

ビーストは、海のそばの木の上で目を覚ました。

いつの間にかここで何時間も眠っていたらしく、すでに日は高く昇り、あたりには強い日差しが照りつけている。

そして目の前のホテルの方を見ると、海中からこれまでになく巨大なセルリアンの気配がする。

ビーストは木から飛び降りると、そこへ向かって走り出した。

## 第15話 ● ジャパリホテル

### ● ジャパリホテル

セントラルパークに向かうキュルル達の前に、リヨコウバトが現れた。彼女はパーク中を旅していて、様々なものを見てきたそう。ビーストを見なかったか聞いてみると、ホテルの方向へ向かったという。

そこでは近々ペパプのライブが行われるそうで、彼女はそれを見に来たらしい。目的地が同じなので、一緒にホテルに向かう事になった。

しばらく歩いて行くと栈橋があつて、その向こうには海の中に建っている大きな建物があつた。水面から3階分建物が見えていて、それより下の階は完全に沈んでいる。

リヨコウバト「あれがジャパリホテルです。近くには遊園地をはじめとした様々な施設があつたのですが、だんだん海の水が増えてきて沈んでしまいました。」

「ホテルの中はとても綺麗で、娯楽施設もあります。屋上にはヘリポートという場所があるのですが、ヒトが作ったものなので、何に使うのかは分かりません。あそこへは飛んで行ったり泳いで行ったり、船で行く事もできますよ。」

栈橋には一隻の船がとまっていて、緑色のラッキービーストが乗っていた。リヨコウバトがホテルへ行きたいというと、ラッキービーストが船を動かしてくれた。

こうして一行は、船でホテルに向かった。

☆

イエイヌの心はざわざわしていた。キュルル達は大丈夫だと何度も自分に言い聞かせたが、嫌な予感がして仕方がない。でもお留守番も大切だ。

お茶を飲んでみても落ち着かない。部屋の中をうろろと歩き回りながら悩んでいると、壁に立てかけてあつたフリスビーが目にと

まった。

イエイヌ「遊んでもらえて嬉しかったなあ。また来てくれるでしょうか。」

思い返してみると、キュルル達がここに来てくれたのは、センザンコウ達にヒトを連れてきてとお願ひしたからだ。もしお留守番を続けているだけだったら、会えなかったかもしれない。

イエイヌはこう呟いた。

イエイヌ「やっぱり、待ってるだけじゃダメですよ。」

お留守番よりもキュルルを気にかける気持ちが勝り、イエイヌはセントラルパークへ行く決心をした。

留守の間誰かに壊されたりしないように、大切な絵は持って行く事にした。それを大事に毛皮にしまうと、キュルルの匂いを頼りに跡を追いかけた。

☆

ホテルでは支配人のオオミミギツネが、ニコニコしながらライブ会場の準備をしていた。

ブタとハブは少し離れた所で掃除をしていたが、そんな彼女の様子を、ハブはじつと見つめていた。そして視線を動かさずに、隣で鼻歌を歌いながら掃除をしているブタに声をかけた。

ハブ「支配人、幸せそうだな。」

ブタ「長年の夢が叶うんですからね、本当によかったです。」

ハブ「なあ、いまさら掃除なんて、やらなくてもいいんじゃないか？どこもかしこもピッカピカだぜ？」

ブタ「私はお掃除大好きなんですよ。それより…。」

耳の良いオオミミギツネに聞こえないよう気をつけながら、ブタはハブにこう耳打ちした。

ブタ「ひよつとしてハブさんは、『ライブを一緒に楽しもう』って、支配人を誘うタイミングをうかがっているんですか？あんまりサボってる嫌われちゃいますよ？」

凶星を突かれ、真っ赤になりながら小声で言い返すハブ。

ハブ「んなつ、何言ってるんだ!？」

ブタ「ふふつ、お掃除お掃除」

オオミミギツネは2人が話をしているのは気づいていたが、内容までは分からなかったため、ハブがヒマそうにしていると思っただけで声をかけた。

オオミミ「ハブさん、手が空いているなら、こっちに来て手伝ってください。」

ハブ「へーい。バレてないよな…?」

ブタ「フフフ、頑張ってくださいね。」

その時、受付のベルの音がした。

☆

キュルル一行はホテルにたどり着いた。他にも誰か来るかもしれないので、船には一旦引き返してもらおう事にした。船ラツキーにお礼を言って別れた後、非常口と書かれたドアから中に入ってみると、小さいテーブルが置かれていて、その上に呼び鈴が設置されていた。鳴らしてみるとオオミミギツネ達がやってきて、一行を出迎えた。

オオミミ「いらつしやいませ、ようこそジャパリホテルへ。」

私は支配人のオオミミギツネ。こちらは従業員のハブさんとブタさんです。」

キュルル「こんにちは。聞きたい事があるんですが…。」

キュルルはオオミミギツネ達にビーストとかばんさんの事を聞いてみたが、2人ともここにはいなかった。

キュルル「かばんさんがパークの危機って言ってたんですけど、何かおかしな事はありませんか?」

オオミミ「危機、ですか?...さあ、これといって。地震なら以前から時々起こっていますし」

具体的にそれが何なのかは、キュルル達にも分からない。

とりあえずかばんさんが到着するまでの間、ホテルに滞在する事にしました。

オオミミ「ブタさん、この方達をお部屋にお部屋に案内してください。」



ブタ「分かりました。どうぞ皆さん、こちらですよ。」

案内された部屋はとても豪華で、キュルル達は大はしやぎした。

そして一通りホテルの中を見て回った後、キュルルはリヨコウバトにこう尋ねてみた。

キュルル「リヨコウバトさんはパーク中を旅してるんですね。ヒトが暮らしている場所を見た事はありませんか？」

リヨコウバト「ええと、ジャングルの奥の研究所で暮らしているヒトがいると聞いた事はありませんが、実際に会ったのはキュルルさんが初めてです。それ以外にはちよつと…。」

それを聞いたキュルルは、シヨックでふらりとどこかへ行ってしまった。カラカルは心配になり、跡を追いかけた。

キュルルは屋上のへりに立って、海の向こうを見ながら絵を描いていた。そこには今まで出会ったフレンズ達が描かれている。

キュルルは旅の間、誰かと会うたびにこのページに描き足してきたが、オオミミギツネ達を描いたところで、ページはいっぱいになった。キュルル『僕のおうち…。優しくて、あつたかくて、安心できて…。あれ？これって…。』

そのイメージが、いつも隣にいるカラカルと重なった。

いつの間にか、キュルルの心の中で彼女はとても大きな存在となっていた。それだけに、おうちが見つかったらお別れしなければならぬと考えると、胸が張り裂けそうになった。

そこへカラカルがやって来て、元気が無いキュルルを励まそうと声をかけた。

カラカル「こんな所で何してんの？」

キュルルはビクツとした後振り向いた。

キュルル「カラカル、ここも僕のおうちじゃないみたいなんだ。でももう手がかりも無くなっちゃったし。あまり考えないようになっただけ、もしかしたらおうちなんて、どこにもないのかもしれない。」

でもカラカルがそばにいてくれるなら、悲しくなんかない。そう

キュルルは考えていた。

一方カラカルも、おうち探しと関係なく、ずっとキュルルと一緒にいたいと考えていた。少しの沈黙の後、2人は同時に話しだした。

キュルル「あのね、カラカル…。」

カラカル「あのね、キュルル…。」

すると突然、ホテルが激しく揺れ始めた。

☆

オオミミ「噂のビーストにパークの危機…、気になりますね。」

オオミミギツネはどうするか考えていた。しばらく悩んだ末、ライブは一旦延期し、避難する事を決めた。そんな彼女を称えるハブ。そこへブタが慌ててやって来た。

彼女が指差す方を見ると、窓の外から無数のフレンズ型セルリアン（以下フレリアン）が3人を見ていた。そして海底の暗がりから巨大な船セルリアンがヌツと現れ、そのままホテルに体当たりした。

その衝撃でホテル全体が激しく揺れた。窓が割れ、大量の海水と共にフレリアンが入り込んできて、うねうねと蠢いた後、フレンズ達に襲いかかって来た。

☆

突然の揺れでキュルルはバランスを崩し、屋上から落ちた。

キュルル「うわーっ！」

カラカル「キュルル!？」

カラカルは咄嗟に手を伸ばしたが間に合わない。キュルルはそのまま、スケッチブックを抱えながら海に落ちてしまった。

海が怖いカラカルは、水面を見て一瞬躊躇したが、意を決してキュルルを助けに海に飛び込んだ。

はじめての海の水は冷たく、うまく体を動かせない。必死に目を凝らしたが、あたりにキュルルの姿は見当たらない。すると海の底に何か黒くて大きなものが蠢いていた。

危ないと思ったが、いくらもがいても体が浮かない。だんだん息が

苦しくなってきた、視界が暗くなってゆき、意識が朦朧とし始めた。その時、誰かがカラカルの体をがちり捕まえた。

気がつくと、カラカルはホテルの屋上に寝かされていて、サーバルとリヨコウバトが心配そうな顔でのぞき込んでいる。

その隣に、バンドウイルカとカリフォルニアアシカが立っていた。イルカ「大丈夫？ 私達海のご機嫌がすごく悪くなったから、かばんさんより先に様子を見にきたの。」

アシカ「そうしたら、カラカルさんが溺れているのを見つけたんです。」

カラカル「助けに来てくれてありがと。ねえキュルルを知らない？ 先に海に落ちたの。」

2人は顔を見合わせた後、キュルルの帽子を差し出した。

イルカ「その、言いづらいんだけど…。」

アシカ「キュルルさんは大きな船の形をしたセルリアンに飲み込まれてしまったんです。私たちの力では、これを持ってくるだけで精一杯でした。」

それを聞いてカラカルの顔が青ざめた。そして帽子を受け取ると、ギョツと抱きしめた。そこへサーバルがこう言った。

サーバル「あのね、カラカルとキュルルちゃんがない間に、大変な事になってるの。」

リヨコウバト「大きな船の形をしたセルリアンが現れて、ホテルにぶつかってきたそうなんです。すると窓が割れて、そこから大量の海水が流れ込んできて、下の階はあつという間に沈んでしまいました。それと一緒にフレンズの姿をしたセルリアンが何体も入り込んできたので、私達は必死にここまで逃げてきました。」

「どうしようか考えていたら、イルカさんとアシカさんが、カラカルさんを抱えて飛び込んできました。出入り口のドアが開けられないようオオミミギツネさん達が押さえつけていますが、いつまでもつか…。」

観音開きのドアの取手につつかえ棒が渡されていたが、ドアを叩く音はどんどん大きくなってゆく。しだいに棒がひび割れ、ドアの形が

歪み、ちようつがいが軋んだ音を立てはじめた。

ハブは扉を押さえながら、カラカル達に向かってこう叫んだ。  
ハブ「くるぞ！」

カラカル達は戦いに備えて身構えた。

## 第16話 ● 眞実

船セルリアンに飲み込まれたキュルルは、闇の中を漂っていた。するとすぐそばに、その闇よりも黒い2つの影が現れた。

カンザシ「ようこそ、我らが王。」

カタカケ「この日を夢見て幾星霜。だが思い返してみれば、長かったようでもあり、まばたきをする一瞬だったようでもある。」

キュルル「君たちは誰？」

カンザシ「我らは影。名を明かす必要はない。」

カタカケ「どんな光も、我らの闇の羽を照らす事はできない。」

キュルル「ここから出してよ。僕はおうちに帰らなきゃならないんだ。」

カンザシ「おうちとは何だ？なぜ帰らねばならないのだ？」

カタカケ「そもそもそんなもの何処にあるのだ？」

キュルル「それは、その…。」

カンザシ「それが何処にあるかは、お前自身が一番分かっているはずだ。」

カタカケ「そんなものは何処にも存在しない。」

キュルル「そんなの、確かめなきゃ分からないじゃないか！」

カンザシ「そうだな。探し続けていれば、認める必要はない。」

カタカケ「しかしその悪あがきもいつかは終わる。お前はそれに怯えながら、探し続けなければならぬ。」

カンザシ「だがそんな努力も徒労に終わる。」

カタカケ「最初から存在しないものを、見つける事はできない。」

一方的に否定され続けて、キュルルは苛立ちを隠せなかった。

キュルル「なんでそう決めつけるんだ！会ったばかりなのに、僕の何が分かるっていうんだよ！」

すると2つの影は、キュルルの顔をじっと見つめた。

カンザシ「どうやらあのヒトは、何も語らなかつたようだな。」

カタカケ「ならば我らが語るとしよう。」

そして影が同時に叫んだ。

カンザシ&カタカケ「刮目せよ！己のすべてを見届けるがいい！」

するとあたりの闇に映像が映し出された。そこには白衣を着て特徴的な髪飾りをつけた、長い黒髪の女のヒトが映っていた。

彼女はカコ博士。熱心な研究者で、昼夜を問わず絶滅動物の研究と復元に明け暮れていた。それだけでなく、セルリアンにも強い関心を持っていた。

しかしある時、突然の事故で最愛の家族を失ってしまった。

もう言葉を交わす事も、一緒に過ごす事もできない。カコ博士は、今あるものは必ず消え去る不確かなものだと思い知った。

失意のどん底にあったカコ博士は、研究のため厳重に保管されていた一体のセルリアンを解放し、自分の輝きを心ごと取り込ませた。

セルリアンは取り込んだ輝きを保存し再現する。こうすれば、たとえ偽りでも家族に会えると考えたのだった。

心を取り込まれ意識を失ったカコ博士の体は、医療機関に運ばれた。一方、彼女の心はセルリアンの中で家族を探していた。

セルリアンはカコ博士の持つ最も強い、家族に関する輝きを再現した。これにより、彼女は再び家族に会うことができた。それは全身真っ黒で巨大な一つ目をしていて、はじめは驚かされたが、彼女にとっても優しく接してくれた。

言いたかった言葉を伝えたり時には甘えてみたりと、永遠に繰り返される理想の家族との時間の中で彼女は幸せに過ごした。

たとえ偽りでもいい、もうこの時間を壊されたくない、彼女は心の底から思った。

一方ヒトの心を取り込んだセルリアンは、他のセルリアンを統率する力を持った女王セルリアンとなった。

女王セルリアンはカコ博士の「家族に会いたい」という願いを歪んだ形で解釈し、彼女の家族の再現だけでなく、セルリアンを率いてこの世界の全てを取り込み、永遠に再現し続けようとした。

しかしその企みはフレンズによって砕かれた。力の大半を失った

女王セルリアンは元の小さな姿に戻ってしまい、そこから一目散に逃げ出した。カコ博士の心も体に戻り、彼女は目を覚ました。

しかしこのセルリアンの中には、カコ博士の輝きの残滓である家族への願望と、女王の意思がこもった一片のかけらが残っていた。

そしてしばらくの間、このセルリアンは息を潜めていた。

その間、パークに束の間の平和が訪れた。

そんなある日、アムールトラのマジックショーが開催されることになった。会場に満ち溢れている強い輝きに引き寄せられたこのセルリアンは、アムールトラの心の闇をも感じ取った。

家族を殺され仲間も失った経験から、極端に一人ぼっちを恐れる彼女の心：これにかけらが共鳴し、その輝きを取り込んで一気に膨れ上がった。

そして再びセルリアンを統率するため、一番近くにいたヒトの心を取り込もうとしたが、またしてもフレンドズに邪魔された。

しかし敗北が確実となった時、女王セルリアンの意思の隣で、カコ博士の輝きがこう告げた。

『目的を果たすにはヒトの心が必要不可欠だ。だが生きているヒトを使えば、必ずどこかで繋がりのある者が現れ邪魔をしてくる。しかし自分が一から作り上げたヒトならば、その心配はない。』

この頃にはもう、2人の意思の境界は曖昧になっていて、カコ博士の理性や感情といったものは失われつつあった。

この世の全ての保存と再現、それだけが2人の望みだった。

そして最後の力で辛うじて奪い取ったヒトの輝きをコアに閉じ込めると、これを基に完全なヒトのコピーを作り上げ、完成と同時に体ごと心を取り込む事にした。

それは非常に困難な作業だった。特にヒトの心は外部と関わる事で、どんどん成長してゆく。そんな予測不可能な変化をする心を再現するには、気の遠くなるような長い時間が必要となった。

しかしいくら時間がかかっても問題はなかった。

寿命を持たず、作業に飽きる事も苦痛を感じる事もないセルリアン

にとって、重要なのはできるかどうかだった。

それと並行して、フレンズのビースト化に対応できるよう、輝きの力でコアを結晶化させた。これでもはや安泰と思われた。

しかし途中でアクシデントが発生し、かけらがフレンズ化して結晶の外に飛び出してしまった。だが幸い記憶はそのままだったため、コピーが完成するまでそばで見守り続けた。

時には隔離施設にセルリアンが入ってきた時もあった。その時は直接接触してこちらの思考を送り込む事で従わせ、来たるべき日に備えた。

そしてついにヒトの完全なコピーが完成した。後は息のかかったセルリアンがその心を取り込めば、女王に成り代わる王が誕生する。しかしコピーはすぐにフレンズと出会って共に行動したため、迎えに行つたセルリアンはそのつど撃退されてしまった。

自身は幽霊のような存在で、できることといえばセルリアンを従えたり、周囲の危険を感じ取ったりする事だけで、フレンズにはなんの影響も及ぼせなかった。

だが同じ時の記憶を持ち続け、実験で不安定になったビーストだけはお互い干渉できたので、時には妨害し、時には利用した。

カンザシ「そしてようやく、お前を迎え入れる事ができた。」

カタカケ「お前は我々が作り出した完全なヒトのコピーだ。記憶だけでなく、技術も容姿も言動も心も、全て複製されたものだ。」

カンザシ「お前の記憶が曖昧なのは、輝きから再現するにはこれが限界だったからだ。」

カタカケ「オリジナルから奪った輝きは、書く力とアムールトラに関するものだった。お前が絵を描いたり、ビーストを信じ続けたりしたのはこのためだ。」

カンザシ「オリジナルは取り込まれた時、ここから出て安全な所に行きたいと願っていた。」

カタカケ「そのイメージを、お前はおうちに帰ると捉えたのだ。」  
キュルル「僕には何も無いっていうの!?!でも大切な仲間がいるん



だ。何度も助けてもらったし、今度は僕が守るって決めただ。それを聞いて2人が笑い出した。

カンザシ「守るだと？」

カタカケ「滑稽だな！」

動揺するキュルルを尻目に、2人は言葉が続けた。

カンザシ「その仲間をお前がおびやかすのだ。たとえここから逃れたとしても、お前の行く先々で、我々に従うセルリアンが何度でも迎えに現れる。」

カタカケ「それだけではないぞ。セルリウムに触れることで、お前が関わったすべてのものから強力なセルリアンが誕生する。」

カンザシ「その一つであるお前の絵が何をもたらしたか、よく見てみるがいい！」

すると映像が切り替わった。そこでは絵から生まれたフレリアンがホテルに集まり、フレレンズに襲いかかっていた。

キュルルは頭を抱えながら、わなわなと震えた。

キュルル「そんな…。今までみんなが危ない目にあつたのは、全部僕のせいだったの？じゃあもしかして海底火山も…。」

カンザシ「あれは自然の力だ。我々は感知する事はできても止める事はできない。」

カタカケ「噴火の時は間近に迫っている。そしてこれを皮切りに、パーク中で火山活動が活発になる。」

その言葉とともにまた映像が切り替わった。

そこに映し出されたのは、パークのいたるところで噴火する火山、噴煙に覆われた真っ暗な空、あちこちが大きく裂け、溢れ出た溶岩で焼けただれた大地、そして何もできないまま元の姿に戻り、そのまま死んでゆくフレレンズ達だった。

だがセルリアンは活動し続けていた。

いつの間にか、2つの影はカコ博士と女王セルリアンの姿になっていた。そしてキュルルにこう告げた。

カコ「すべての物事は、いつか終わりが訪れる。輝きは失われ、元に戻る事はない。」

女王「ダガオ前ガ協力シテクレルナラ、ぱーくノ草一本、砂ノ一粒ニ至ルマデ再現デキル。」

カコ&女王「我々セルリアンは保存し、再現する。永遠に。」

残酷な事実を容赦なく突きつけられたキュルルは絶望し、拒む力を失った。そこへすかさずカコ博士と女王セルリアンがキュルルに飛び込むと、その体が黒い輝きに覆われた。

そしてついにキュルルはセルリアンの王となった。

スケッチブックから大量のフレリアンが現れ、キュルルの周りを取り囲み指示を待っている。ホテルからはまだフレンズの輝きの気配がする。キュルルは手始めに、彼女達を取り込むことにした。

そしてキュルルが手をかざすと、船セルリアンが浮上し始めた。

☆

Bannon!

けたたましい音と共に、屋上のドアが弾け飛んだ。するとドアの破片と一緒にゴリラ型フレリアンが水平に吹っ飛んできて、海へ落ちていった。

壊れたドアの向こうには、ゴリラをはじめとした各地のフレンズ達が立っていた。

かばんさんに連れられて、パークとキュルルの危機に駆けつけてくれたのだ。そしてフレリアンを蹴散らしながら、ここまで登ってきたのだという。その中にはイエイヌの姿もあった。

そこへ博士と助手が現れた。

博士「お前達、無事で良かったのです。」

助手「ひとまずかばんの船で脱出するのです。」

下をのぞいてみるとアツアエンの船がいて、その上でかばんさんが手を振りながら叫んでいる。

かばん「みんな、早くこっちに避難して！」

すると、突然海中から巨大な船セルリアンが現れた。それによつて大波が起き、かばんさんの乗る船はまるで木の葉のように流されてし

まった。それを見て、とつさに助手が救助に向かった。

その時ふとキュルルの匂いを嗅ぎ取ったイエイヌは、船セルリアンの方を見た。すると甲板に、大勢のフレリアンと一緒に黒い輝きをまとったキュルルが現れた。

イエイヌ「あそこにキュルルさんがいます！」

カラカル「キュルル！良かった、無事だったのね！待ってて、今助けに行くから！」

こう叫んで向こうに飛び移ろうとしたカラカルを、サーバルが引き留めた。

サーバル「待って！なんだか様子がヘンだよ!？」

キュルルはカラカルの呼びかけにも全く反応が無い。

そして無表情のままスツと右手を挙げると、フレリアンが一斉に向かってきた。その中には、サーバル型、カラカル型、ビースト型の強力な3体がいた。

フレリアンが甲板から次々と屋上に飛び移ってくる。さらに壊れたドアからも、倒し損ねた個体が入ってきた。フレンズ達は必死に応戦したが、強力な3体の力も加わった相手にしだいに押されていった。

一方助手は船に追いつき、かばんさんの隣に着地した。

助手「大丈夫ですか、かばん!？」

かばん「平気だよ！早くあの子達を助けないと！」

かばんさんは船の体勢を立て直し、もう一度ホテルのそばにつけようとした。すると背後から水の跳ねる音がして、何かが屋根に乗った。

それに気付いた2人が振り向くと、そこにはずぶ濡れのビーストがしゃがんでいて、じつと2人を見つめていた。

## 第17話 ● はじめてのありがとう

海中にいた巨大セルリアンの気配がホテルにどんどん迫ってきている…。それを感じ取ったビーストは、泳いでそこへ向かっていた。しかしその途中でヒトの輝きの気配を感じた彼女は、海面から飛び出して船の屋根に乗つくと、その場から下を覗き込んだ。

するとそこにはかばんさんと助手がいて、突然現れたビーストを驚いた様子で見上げていた。

かばん「ビースト!?!?」

助手「なぜここに…?」

ビースト『ジャングルで助けてくれた2人だ、こっちじゃない。危ないのは…!』

ビーストが辺りを見回した。すると泳いでいる時は気づかなかつたが、船のすぐそばには巨大な船型セルリアンがいて、そこから2つの影と同じ気配がする。

彼女はすぐさま屋根を蹴って船セルリアンの頭上まで高々と跳躍すると、それ目がけて急降下した。

近付くにつれ、それまで豆粒のようだった像が次第にはっきりしてきた。

船セルリアンの甲板にはスケッチブックを持ったキュルルが立っていて、その全身から黒い輝きが放たれている。

彼女はビースト化し、爪を振りかざして向かっていった。

キュルル「…!!?」

だがすんでのところまでキュルルが身をかわしたため、爪はスケッチブックに当たった。大岩をもやすやすと切り裂く爪に敵うはずもなく、スケッチブックはあつという間に粉々になり、かけらがあたりに散らばった。

そしてその勢いのまま、彼女は船セルリアンに強烈な一撃を叩き込んだ。

ズドオオン!

大音響と共に爪が甲板を引き裂き、凄まじい衝撃が船底を突き破つ

て大きな穴が開いた。

キュルルはその衝撃で吹き飛ばされ、甲板に叩きつけられて動けなくなった。また船セルリアンは船体が大きくめり込み、低く唸った後、ブクブクと音を立てて沈み始めた。

こちらのセルリアンの気配が消えたため、彼女はビースト化を解除した。そして今度はホテルの屋上へ跳ぶと、空中で身を翻し、爪を閃かせてフレリアンを一掃した。するとそれを見たフレレンズ達から感嘆の声が上がった。

残るは強力な3体のみとなった。そしてオオミミギツネ達がヘリポート用の照明を点け、3体がそれに気を取られた隙に、野生解放したサーバル、カラカル、ビーストが連携し、撃退した。

フレリアンが蹴散らされ、歓喜に沸くフレレンズ達。それを見て役目を終えたと考えたビーストは、すぐにその場を立ち去ろうとした。

しかし、サーバルとカラカルに引き留められた。

サーバル「待つて待つて。やっぱりあなたはすつごく強くて優しいんだね！」

カラカル「待ちなさいよ！あのね、助けられてありがと。」

言葉の意味は分からないが、2人から感謝の気持ちがあひひしと伝わってくる。これまで何度もセルリアンと戦ってきたが、フレレンズから怖がられる事はあってもお礼を言われたのは初めてだったため、ビーストはどう反応したら良いかが分からず、キョトンとしながら2人を見つめた。

するとカラカルがすまなそうな顔をした。

カラカル「あたし、あんたに謝らなきゃいけない。それに、渡したいものも…。」

そこへ再びセルリアンの禍々しい気配がした。3人はゾクツと身を震わせると、船セルリアンの方を見た。

甲板で大の字になって倒れていたキュルルの体から、再び黒い輝きが吹き出した。

彼はむくりと起き上がり、あたり一面に散らばっている絵のかけらを見つめた。すると、バラバラになった絵から輝きが溢れ出し、船セ

ルリアンに流れ込んでいった。

それを取り込んだ船セルリアンの姿が変わってゆく。穴はみるみる塞がってゆき、側面に6つの小さな羽が生え、船首が裂け巨大な口が現れた。

そして船セルリアンは雄叫びを上げながら、海上から身を躍らせてフレンズ達に飛びかかって来た。

唸り声を上げながら、巨大な口が迫ってくる。

しかし次の瞬間、サーバル、カラカル、ビーストがビースト化し、3人一丸となって船セルリアンに飛び込んでいった。そして大きな目の下あたりに一斉に爪を叩き込んだ。

パワーアップしたとはいえ、ビースト化したフレンズ3人の同時攻撃をくらってはひとたまりもない。船セルリアンの体はくの字にひん曲がり、ものすごい勢いで海まで吹っ飛んでいった。

そして乗っていたキュルルは、ヘリポートに向かって落ちていった。

ビーストは空中で何度も回転しながら屋上に着地した。なんとか船セルリアンを撃退したは良いが、体は酷く消耗していた。

そして荒い息をしながら、『自分はともかく2人は大丈夫なのだろうか?』と心配になって様子をうかがうと、カラカルは同じように息を切らしていた。

一方サーバルは、全身をキラキラさせながら佇んでいた。度重なる戦いでサンドスターが尽きてしまったのだ、徐々にフレンズの姿がぼやけてゆく。

ビースト「ガア……!」

それを目の当たりにしたビーストは、シヨツクのあまり思わず声が出た。

しかしサーバルは、そんな状態にもかかわらずビーストに屈託のない笑顔を向けた。

サーバル「また助けてもらっちゃったね、ありがとう。すっごくかつこよかったよ!」

カラカル「サーバル!?!? あんた…っ」

それに気付いたカラカルは仰天し、自分の体の事など忘れてサーバルに駆け寄った。すると彼女は明るく笑いながらこう言った。

サーバル「キュルルちゃんのをばにいてあげて。」

カラカル「まっつて、サーバル!」

カラカルは必死に手を伸ばしたが、サーバルに触れる事はできなかった。彼女のサンドスターが、指の間をすり抜けて消えてゆく。

そしてあの言葉を最後に、彼女はサーバルキャットの姿に戻ってしまった。

カラカル「嘘、でしょ…。」

くりくりした目がポカンとこちらを見つめている。それを見たカラカルは、全身をワナワナと震わせながらガツクリと膝をついた。

## 第18話 ● 永遠に（ずっと）一緒

キュルルは空中で姿勢を立て直すと、ヘリポートにふわりと着地した。

そしてこう呟いた。

キュルル「時は来た。」

それと同時に、海底火山が本格的に噴火した。空は厚い噴煙に覆われ、パーク中で巨大な地震が発生し、山が震え大地が裂けた。

何も知らないパークのフレンズ達は、そのあまりの光景にただ怯えるしかなかった。

もちろんホテルも無事では済まない。あちこちに亀裂が走り、部屋の壁が崩れ天井から瓦礫が降り注いだ。

それだけではない、屋上にいたフレンズ達の頭上には、巨大な噴石が次々と降ってきた。これに押しつぶされないう、みんな必死になつて逃げ回った。

そんな中、噴石がイエイヌをかすめた。すると毛皮から大切な絵が滑り落ちてしまった。

イエイヌ「あっ!!!」

イエイヌはすぐに手を伸ばしたが、絵は手をすり抜け、風に飛ばされてどこかへいつてしまった。

一方のかばんさんはホテルが沈むと判断し、必死に舵を操って船をホテルにつけた。そしてみんなに、早く飛び乗るように言った。

かばん「急いで！運動が苦手な子には手を貸してあげて！」  
すると、突如波が大きくうねった。

船は制御を失ってホテルに激突し、船体がへし折れた。危うくかばんさんは海に投げ出されそうになったが、すんでのところで助手が抱き抱え、そのまま飛び上がった。

そして空中から周りを見た2人は、目の前の光景に言葉を失った。

海底火山から放出された大量のセルリウムにより、海が真っ黒に染まってゆく。そして、ホテルの周りに発生した漆黒の巨大な渦が、フ



レリアンと船セルリアンをも飲み込んでゆく。

さらにそれはどんどん大きくなってゆき、見上げるような高い壁と なって周囲を取り囲んだ。それはもはや渦というよりは、黒い水で きた竜巻だった。と、そこに複数の巨大な目が現れ、体からは何本も の細い腕が四方に向かって伸びてきた。それに絡みとられた船がそ のまま渦に飲み込まれ、原型をとどめないほどバラバラにされてゆ く。

すると渦セルリアンの巨大な目の一つが、かばんさんと助手をギロ リと睨んだ。そして沢山の腕が2人目掛けて伸びてきた。助手はそ れらを必死にかいくぐり、屋上へと向かった。

一方屋上では、渦セルリアンがホテルごとフレンズを飲み込もうと 迫ってくる様子を、みんな呆然と見つめていた。

もはや泳ぐのはもちろん、飛ぶこともできない。もうどこにも逃げ る事はできなくなってしまった。

そこへ助手がかばんさんを抱えて、サーバルキャットの近くに着地 した。

降りるやいなや一瞬で状況を把握したかばんさんは、すぐさま駆け 寄ろうとした。しかしサーバルキャットは牙をむき出し全身の毛を 逆立てて、かばんさんを威嚇した。

かばん「どうしたの？私、かばんだよ！」

かばんさんが戸惑っていると、突然サーバルキャットの足元が崩れ た。

「サーバルちゃんー！」

それを見て、かばんさんはこう叫びながらとつさに手を伸ばした が、サーバルキャットは瓦礫と一緒に暗い穴の中へと落ちていった。

かばんさんは呆然と穴を覗き込んでいたが、今にも飛び込んで行き そうだった。

カラカル「待って！あたしも一緒に！」

その事に気付いたカラカルもついて行こうとしたが、博士と助手が それを止めた。

博士「ここは我々に任せるのです。」

助手「お前は早くキュルルを止めるのです。」

そう言うと、2人はかばんさんを抱えて真つ暗な穴の中へと消えていった。

カラカルはサーバルの言葉を思い出し、キュルルの下へと走った。そしてその跡を、ビーストも追いかけた。

すると周囲にフツと影が差した。見上げると、空から巨大な噴石が2人めがけて一直線に落ちてきている。

カラカル「潰される！」

カラカルがそう思った瞬間、

ビースト「ガアッ！」

ビーストが雄叫びと共に体当たりし、カラカルを突き飛ばした。

ドズウウン！

そして、地響きと共に辺りに轟音が響き渡った。

カラカルはすぐに立ち上がり後ろを振り向いた。すると巨大な噴石がビーストを押し潰していた。彼女は一刻も早くビーストを助けようと大岩にかじりついて持ち上げようとしたが、重くてびくともしなかった。

そこへフレンズ達が駆けつけて来た。そしてゴリラがこう言った。

ゴリラ「彼を止められるのはカラカルさんだけだ！ここは任せてくれ！」

カラカル「あんたたち…、ありがとう！」

サーバル、かばんさん、博士、助手、ビースト、フレンズ達、みんなが背中を押ししてくれている。

その思いを受け、なんと少しでもキュルルを止める、という強い決意がカラカルの胸に宿った。

そしてカラカルは毛皮から壊れたラツキービーストを取り出すと、噴石のそばに置いた。

カラカル「これ、あんたの落とし物。キュルルを連れてすぐ戻ってくるから、しっかりしなさいよ！」

そう言ってカラカルは駆け出した。

ゴリラ「頼んだよ。よしみんな、気合い入れろ！この岩を持ち上げ

てあの子を助けるんだ！戦える子はあのセルリアンの腕を防いでくれ！」

フレンズ達「おー！」

今までの戦いで消耗しているカラカルにとって、亀裂や噴石を乗り越えながら進むのは困難だったが、体の疲れを気にしている余裕はなかった。

一度に様々な事が起こりすぎて、頭の中がごちゃごちゃしている。それでも巨大な亀裂を飛び越えながら、なんとか考えをまとめた。

カラカル『こんな大騒ぎを起こして、ただじゃおかないんだから。おでこを弾くくらいじゃ済まさない。ひっぱたいで叱りつけて、みんなの前で謝らせる！覚悟しなさい！』

そしてカラカルは、ようやくキュルルの下にたどり着いた。

彼は体に黒い輝きをまとい、無機質な目をしている。

カラカル「キュルル、いい加減にしないと怒るわよ！こんなバカ騒ぎは早くやめなさい！」

だが必死に呼びかけたにもかかわらず、まるでカラカルがそこにいる事に気付いていないかのようには、キュルルは何の反応も示さない。

そんなキュルルに、カラカルの方が気圧されてしまった。

カラカル「ちよつと聞いてるの？そうだ、これ持ってきたの。なくしたら困るでしょ？」

そう言つて毛皮から帽子を取り出しても、彼の表情はピクリとも動かない。

カラカル「ねえ、あたしの声届いてる？あたしの事見えてるの？サバンナで出会って、一緒に旅をしてきたじゃない？サーバルやビースト、かばんさんや旅の途中出会ったみんなだつて待つてる。こんな事はもうやめて帰りましょ？」

それまで凜と響いていた言葉が、濁った涙声になってゆく。

「おうちなら見つかるまで探せばいい。どれだけ時間がかかっても、パーク中を歩き回る事になったってあたしはついて行く。たとえ見

つからなくつてもいい、もうそんな事関係なく、あたしはキュルルと一緒にいたいの！」

とうとうカラカルは、今まで溜め込んでいた思いをぶちまけた。しかし精一杯の叫びも虚しく、キュルルはうつろな視線をカラカルに向けて、感情のこもらない声でこう言い放った。

キュルル「我々セルリアンは保存し、再現する。永遠に。」  
ズキツ…！

その言葉は、カラカルの心に深く突き刺さった。

カラカル『なんだろう、前に誰かに同じ事を言われたような。』

彼女はもう覚えていないが、それはかつて女王セルリアンがフレンズ達に突きつけた言葉だった。

カラカル「この…！」

カラカルは思わずキュルルに手を振り上げた。だがそれは途中で止まり、小刻みに震えだした。

カラカルはキュルルにゆっくりと手を伸ばすと、能面のような顔にそつと触れた。そして膝をついて、ぎゅつと彼を抱きしめた。

今のキュルルには、何をやっても届かない。

そのことをまざまざと思い知らされ、胸がいっぱいになってしまい、もう何もできなくなってしまったのだ。

なら、せめて、

カラカル「ずっと一緒にいてあげる。」

そう言っただけカラカルは目を閉じると、キュルルの肩に顔をうずめた。

すると彼女の目から一雫の涙がこぼれ、彼の左目の近くに落ちた。そしてそれはそのまま頬を伝って、一筋の道を作って地面に落ちた。

しかしキュルルは相変わらず、何も反応しなかった。

そして低い唸り声を上げながら、渦セルリアンが間近に迫ってきた。

渦に浮かんだいくつもの巨大な目が、フレンズ達を睨んでいる。

いつも前向きなフレンズ達の心にも、今回ばかりは絶望が暗い影を落としていた。

## 第19話　●　けもハーモニー

穴からホテルに入ったかばんさん達は、落ちたサーバルキャットを必死に探していた。

部屋の中はいたるところに瓦礫が散乱し、水は既にすねまで来ている。

ひび割れた窓からは、渦セルリアンが迫ってくるのが見える。もはやホテルが沈むのとホテルごと食べられるのでは、どちらが早いかわからない。

かばん「サーバルちゃん、返事して！」

かばんさんは何度も大声で呼びかけながらサーバルキャットを探した。

体はあちこちが擦りむけ、傷口が海水に触れてジンジン痛んでいる。

しかしそんな事を気にしている余裕はない。3人は周りの様子に気を配りながら、慎重に進んでいった。

すると博士と助手の耳に、すぐそばの瓦礫の下からサーバルキャットのかすかな息遣いが聞こえてきた。すぐに3人がかりでそれをどかすと、ついにサーバルキャットが見つかった。

だが目を閉じたまま、ぐったりと横たわっている。

かばん「サーバルちゃん！サーバルちゃん！しっかりして！」

かばんさんは膝をつく、サーバルキャットを抱き抱えて懸命に呼びかけた。

しかしサーバルキャットは目を開けず、ピクリとも動かない。しだいにその体が冷たくなってゆくのを感じて、かばんさんがわなわなと震えた。その様子を見て、博士と助手は口をきつく結んだままうつむいた。

そこへ再び地震が発生し、ホテルが大きく揺れた。

博士「かばん、ひとまずここを出るのです。」

助手「外も危ないですが、このまま何もせず生き埋めになるわけにはいかないのです。」

かぼん「……。」

かぼんさんは無言のまま小さくうなずくと、サーバルキャットを抱いて立ち上がりかけた。すると目の前に、キラキラしたものが流れて来た。それは海底火山から噴出したサンドスターだった。

かぼん『もしかしたら……!』

かぼんさんはいちろの望みをかけて、サーバルキャットをサンドスターに当てた。するとその体が光り輝いた。輝きは徐々に大きくなってゆき、手、足、頭と、みるみるうちに輪郭が形作られていった。かぼんさんは、祈るような気持ちでその様子を見つめていた。どの道セルリアンに食べられたら意味の無い行為だと分かっていたが、やらずにはいられなかった。

そして輝きが消えると、フレンズの姿のサーバルが現れた。しかし目を覚まさない。

かぼんさんは目を閉じたまま横たわっているサーバルを抱きしめると、涙で声を詰まらせながら、今までずっと言えなかった言葉を吐き出した。

かぼん「お願い、起きてよサーバルちゃん!聞いて欲しい事がたくさんあるんだ!私…僕は、サーバルちゃんが大好きなんだよ……!」

研究所でサーバル達を見送った後、かぼんさん達はこんなやりとりをしていた。

博士「追いかけても良いですよ。」

助手「難しく考えず、自分の気持ちを大切にしてください。」

するとかぼんさんは、頼りない笑顔を浮かべた。

かぼん「たとえ気持ちを伝えられなくても、あの子がどこかで元気でいてくれるなら、それだけで私は満足だよ。」

そうして研究所に入っていった。悲しげな背中が暗がり消えてゆくのを、2人はじっと見つめていた。

博士「あれは『つよがり』というやつなのです。」

助手「まったく、ヒトの行動には謎が多いですね。」

サーバルと離れてから、かばんさんは研究に打ち込む事で寂しさを押し殺していた。ようやくサーバルと出会ってからも、彼女の思いやパークの安全を優先して、自分の気持ちを押しさえ込んでいた。

だがこの機会を逃したら、もう二度とそれを伝える事はできないだろう。ずっと堪えてきたが、ここにきてやつと言葉に出す事ができた。

その時、壁の隙間から一片の絵のかけらが流れ込んできて、目の前のサンドスターに触れた。すると絵が輝き始め、そこから歌声が流れてきた。それは大昔の記録から見つかって、かばんさんが希望の歌と呼んだ歌だった。

そしてそれに共鳴して、かばんさんが持っていたキュルルの絵も輝きだし、歌声が流れてきた。

輝きと歌声はどんどん大きくなってゆく。

その時腕のラッキーさんが、壊れているはずのラッキービーストからこんなメッセージを受信した。

ラッキーさん「アムールトラヲタスケテ。」

フレンズ達「これはっ…!?？」

旅の途中でキュルルがみんなに渡した絵も次々と輝き始め、歌声が流れてきた。また、風に乗って各地に散らばった絵のかけらもキラキラと輝きだし、パーク中に歌声を届けた。

そして各地のラッキービーストからも、歌声とメッセージが流れ出した。ラッキーさんが、それらを全てのラッキービースト達に送信したのだ。

こうして歌声と、『アムールトラヲタスケテ。』という言葉がパーク中に響き渡った。

それを聞いたフレンズ達は、口々に同じ歌を歌い始めた。

なぜ歌えるのかは分からないが、歌っていると胸の中が懐かしい気持ちでいっぱいになった。

すると、今までビーストがやってきた事が頭の中にあきあきと浮かんできた。

フレンズ達『え…？あの子、今までずっと私たちを守ってくれてたの？』

その頑張りを知り、自分たちがずっと誤解していた事に気付いたフレンズ達は、長い間彼女が戻ってくるのを待ち続けていた事を思い出した。

ホテルのフレンズ達もまた、彼女の事を思い出して、諦めかけていた心を奮い立たせた。そうして互いに声を掛け合い、あるものは気合を入れ直して噴石を持ち上げる腕に力を込め、またあるものは伸びてくる腕を次々と叩き落とした。するとその勢いに押されたのか、渦セルリアンがうめき声をもらった。

そしてパーク中のフレンズ達が、彼女への思いを歌に込めた。

『気づかなくてごめんなさい。今までありがとう。そしておかえり、アムールトラ！』

こうして、みんなの心が一つになる事でホテルを中心にけもハーモニーが起こり、建物がまばゆい輝きに包まれた。

☆

カラカルを庇ったビーストは、巨大な噴石に挟まれて身動きが取れなかった。身も心もクタクタで、全身に全く力が入らない。しだいに息も苦しくなり、頭がぼんやりとしてきた。

すると、頭の中にこれまでの出来事が次々と浮かんできた。しかしその中に、ずっとそばにいてくれるお友達の姿はなかった。

ビースト『疲れた…。目が覚めてから走り続けてきたけれど、どこまでいっても私は一人ぼっちなんだ…。このまま寝よう。もう、目が覚めなくても、いいや…。』

その時ふと、あの子の顔が脳裏をよぎった。

ビースト『ごめんね…。約束、守れなかった…。ああ、最後にもう一度、会いたかった、な…。』

そして彼女の意識は、暗い闇の中へと落ちていった。

その時、噴石が少し浮き上がり、ビーストの顔に光が射した。

フレンズ達の協力により、ついに大岩が持ち上がったのだ。そして



その中心となったジャングルのフレンズ達が、岩を持つ手に力を込めながらビーストに声をかけた。

メガネカイマン「しっかりとしてください！」

ヒヨウ「うちらをふっ飛ばしたヤツが、へこたれたらあかんで！」  
クロヒヨウ「忘れててかんにんな。今度はうちらがあんたを守る番や！」

イリエワニ「私達は群れの仲間だ、誰一人として見捨てたりしない！」

すかさずゴリラが隙間からもぐり込み、ビーストの手をつかんで引つ張り出した。そして意識のない彼女を肩に担ぐと、こう声をかけた。

ゴリラ「しっかりとするんだ！なんでも一人で抱え込むな。辛いときは誰かを頼ってくれ！」

すると2人に向かって、渦セルリアンの細い腕が何本も伸びてきた。

片腕でビーストを支えながらゴリラが拳と蹴りでそれらをかたっぱしから叩き落している、再びホテルが大きく揺れた。とうとう渦セルリアン本体がホテルに到達したのだ。

あたりを包んでいた輝きを取り込まれ始め、渦セルリアンの体から一本の太い腕が生えてきた。そして、まるで大木のような黒い腕がものすごい勢いでゴリラに向かってきた。

ズシン！

その一撃でホテルの屋上が大きくめり込んだが、ゴリラはなんとかそれをかわした。すると背後から細い腕が伸びてきて、彼女の体に絡みついた。

さらに彼女の周りに無数の細い腕が集まってきて、瞬く間に全身が絡めとられてゆく。

ゴリラ「しまった、うわー！」

ジャングルのフレンズ達「親分!？」

ゴリラはそのまま、ビーストと一緒に渦セルリアンに取り込まれてしまった。

☆

「いっは…？」

顔を上げると、かばんさんはどこまでも続く白く輝く草原に佇んでいた。どこからか希望の歌が聞こえてくる。ふと体を見ると、知らない間に小さい時の姿に戻っていた。

？「かばんちゃん、みーつけた！」

かばんちゃん「うわあ！」

すると突然背後からサーバルが飛びついてきた。とつさに後ろを振り向いたかばんちゃんは、仰向けに組み伏せられた。

かばんちゃん「もう、サーバルちゃんったら。」

サーバル「やつと見つけたよ！どこいったの？あのね、あつちにずーっと眠ってる子がいるの！かばんちゃんなら起こせるかもって思ってたんだ。」

かばんちゃん「そうなの？じゃあ一緒に行ってみよう。」

サーバル「うん！そこまで案内するからついてきて！」

そしてかばんちゃんは、サーバルに連れられて歩き出した。

☆

知らないうちに、イエイヌは白い草原に立っていた。

イエイヌ「ここは…？キユルルさーん、カラカルさーん、みなさんどこですかー？」

あたりを見回しながら歩いていると、後ろから歌が聞こえてきて、とても懐かしい匂いがした。思わずそちらを振り返ると、輝きの中からご主人夫婦が現れた。

男性職員「ただいま。」

女性職員「ただいま。」

イエイヌ「!!…おかえりなさい、うあ…会いたかったあ〜。」

イエイヌは顔をくしゃくしゃにしながら2人に駆け寄ると、勢いよくジャンプして抱きついた。

2人は目に涙を浮かべながらイエイヌを抱きしめている。

そしてイエイヌは、寂しかった事、センザンコウ達にヒトを探して

もらった事、キュルル達に遊んでもらって、とても嬉しかった事などを一気に話した。

2人は笑顔でうなずきながら、じつと話に耳を傾けている。

イエイヌ「それから、それから…、あとは、ずっと一人でお留守番をしていました。」

ようやく話す事がなくなって、イエイヌは少し落ち着いた。

すると2人はイエイヌを撫でながら、優しく語りかけた。

女性職員「長い間一人にさせてごめんなさいね。待っていてくれてありがとう。」

男性職員「ごめんね、突然いなくなつて。私達もあんなに早くお別れする事になるとは思わなくて、もつと話しておけばよかったと後悔したよ。本当に頑張ったね。」

それを聞いたイエイヌは2人がいなくなつた時のことを思い出そうとしたが、遠い昔の事なので細かいことは覚えていなかった。それでもしばらく思いを巡らせていると、不意に頭の中にキュルルの顔が浮かんだ。

イエイヌ「そうだ、今キュルルさん達が大変なんです！」

すると2人はうなずいて、真剣な顔をした。

女性職員「そうね。それであなたに起こしてもらいたい子がいるの。」

男性職員「一緒にその子の所に行こう。」

イエイヌ「はいっ！」

そして3人はそこへ向かって歩き出した。

☆

いつの間にか、カラカルは白い草原に座りこんでいた。

カラカル「え？どこなの、ここ？」

立ち上がって周りを見回しても、どこまでも同じ景色が続いていて歌が聞こえてくる。

カラカル「かばんさんが歌ってた歌…、ねえ、誰かいないの？」

カラカルが呼びかけると、草の陰からオレンジ色のラツキービーストがひよっこり現れた。

ラッキービースト「コツチ。コツチ。」

カラカル「ん？」

ラッキービーストはカラカルに話しかけた後、数歩進んでまた振り返り、「コツチ。コツチ。」と言った。

カラカル「ついてこいつて事？」

そしてカラカルが後について行くと、ラッキービーストは「コツチ。コツチ。」と言いながら歩き出した。白い草原に、ポイポイという足音が響いた。

## 第20話 ● ただいま

ビーストの意識は暗い闇の中を漂っていた。目を閉じていても、自分がどんどん沈んでゆくの分かる。このまま消えてゆくんだと、ぼんやりとした頭で考えていたその時…、

どこからともなく歌声が聞こえてきた。そしてまぶたの向こうが明るくなったかと思うと、急に体が軽くなった。

？「こんな所で寝てると風邪ひくよ。」

すぐそばで誰かの声が出て、彼女は目を開けた。するとサーバルが心配そうに彼女の顔をのぞき込んでいた。

そしてその隣の子も、彼女にこう声をかけた。

かばんちゃん「よかった、気がついたんですね。」

彼女の目の前には、白く輝く草原がどこまでも広がっていた。噴石はどこにも見当たらず、どこからか懐かしい歌が聞こえてくる。

周りにはみんなが立っていて、それぞれが彼女に声をかけた。

サーバル「ずっと一人で、みんなのために頑張ってくれてたんだね、ありがとう。気づかなくてごめんね。」

その隣でかばんちゃんが頭を下げた。

かばんちゃん「サーバルちゃんを助けてくださったんですね。遅くなりましたが、ありがとうございました。」

カラカルが申し訳なさそうな顔で言った。

カラカル「ごめん。あなたの事、悪いヤツだと勘違いしてた。この子、大切なお友達なんでしょ？今度ははぐれないようにね。」

オレンジ色のラッキービーストが、彼女のそばへやってきた。

ラッキービースト（ポイポイ）「ヨカッタ、マタアエタネ。」

イエイヌがご主人夫婦と一緒に微笑んでいる。

イエイヌ「あなたをずっと待っていた方がいるんです。どうか会ってあげてください。」

そしてみんなが彼女に手を差し伸べた。その手を取って立ち上がると、今度は目の前に輝きの塊が現れた。それはしだいに小柄なヒト

の形を成してゆき、そこから現れたのはっ…！

あの子「おかえりなさい、アムールお姉ちゃん！」

はるか昔の思い出と寸分違わぬ姿をしたあの子だった。彼は輝くような笑顔を浮かべながら、彼女に向かって両手を伸ばした。

アムールトラ「あ…、あ…！」

アムールトラの全身が震えた。この日が来るのを何度夢見た事だろう、一番大切なヒトにようやくやく出会えた事で胸の中が喜びでいっぱいになり、目からとめどなく涙が流れた。

アムールトラ「会いたかったよ…！」

そしてしっかりと彼を抱きしめた。いつときも忘れたことのない懐かしい匂いとともに、温もりがひしひしと伝わってくる。

するとアムールトラの全身が輝き始めた。そしてそれがひとときわ強く輝いたかと思うと、2人の姿が忽然と消えた。

☆

ゴリラはビーストを抱き抱えながら、セルリアンの体内を漂っていた。ここは真つ黒な重たい水のように、体がうまく動かせない。それでもゴリラは全身からサンドスターを放出させながら、ビーストをギユツと抱きしめた。そうやって彼女が取り込まれないよう守りつつ、心の中で呼びかけ続けた。

ゴリラ『諦めるもんか…。君の頑張りに比べたら、これくらいなんともないよ！頼む、目を開けて！ようやくみんなが君の事を思い出したんだ！君が守ってきたパークを一緒に見たいし、誤解してた事だつて謝りたい。それと…』

そして、ゴリラは声にならない叫びをあげた。

『ありがとうを言わせてくれ！』

すると、ビーストの体が輝き始めた。

一方屋上では、フレンズ達が臆する事なく渦セルリアンと対峙していた。

イリエワニ「ひとつつ力比べというじゃないか！」

イリエワニはこう呟くと、不敵な笑みを浮かべながら、何人かのフレンズと一緒に渦セルリアンの太い腕に飛びかかった。するとそれは、フレンズ達を払い除けようと物凄い力で抵抗を始めた。

そのあまりの力に全身の筋肉が悲鳴をあげたが、イリエワニは意に介さずさらに両腕に力を込めると、ガツチリと腕を押さえつけた。そして相変わらず笑みを浮かべたまま、ヒヨウ姉妹に向かってこう叫んだ。

イリエワニ「コイツを伝って、2人を助けに行け！」

ヒヨウ「よっしゃ！」

クロヒヨウ「まかせとき！」

2人がうなずいて駆け出そうとした時、メガネカイマンが何かに気づいた。

メガネカイマン「待って、あれを見てください！」

そちらを見ると、渦セルリアンの体の一部が輝いている。かと思うとそこが弾け飛び、中から何かが飛び出してきて、フレンズ達の前に降り立った。

それはゴリラを抱き抱えたビーストだった。

そしてホテルを包んでいた輝きが、ビーストに集まってきた。

すると、輝きをまとった彼女の姿が変わりはじめた。

長い髪がするすると縮んで、くせつ毛のショートヘアになった。また毛皮の形が変わってゆき、サーカス団員かマジシャンのような格好になった。さらに頭に集まった輝きが小さなシルクハットに変わり、ちよこんとそこに乗った。

そこへ、渦セルリアンの腕があらゆる方向から一斉に向かってきた。そのあまりの密度に2人の姿が見えなくなったが、次の瞬間、閃光がその腕を全て消し飛ばした。

光の中心には、全身が白く輝くアムールトラが立っていた。

彼女は呆気にとられているゴリラを下ろすと、渦セルリアンに向かって大きく腕を振った。すると巨大な斬撃が発生し、渦セルリアンの体に大きな光る爪痕が刻まれた。それから彼女が右手をたかだかと掲げると、まばゆい光と共にトラの火の輪くぐりに使うリングが現

れた。

彼女はそれを渦セルリアンに投げつけた。リングは青白い炎をまといながら、どんどん大きくなってゆく。

するとその穴の中から、白く輝く巨大なアムールトラが雄叫びを上げながら現れた。それは彼女が動物だった頃の姿をしていた。

体高10メートルはあろうかという巨大なアムールトラは、勢いよく渦セルリアンに飛びかかると、その体を突き破り、そのまま海へ飛び込んだ。そして一直線に海底火山に向かって泳いでゆき、頭から火口に突っ込むと、どんどんマグマの中を突き進んでいった。

すると、地響きと共にズンツンという鈍い音がして、火山活動が収まった。そして各地の地震が止んだ。

ビキツ、ビシビシビシツ！

体を開いた巨大な穴から、大きなひび割れが渦セルリアンの全身に広がってゆく。そしてオオーンという叫びと共に、渦セルリアンは粉々に弾け飛んだ。

渦セルリアンのかげらがあたり一面に散らばって煌めきながら消えてゆき、噴煙に覆われて真っ暗だった空が、あつという間に晴れ渡ってゆく。

そして、火口に飛び込んだ巨大なアムールトラの輝きがパーク中に広がって、裂けた大地や倒れた木々を元の姿に戻していった。

こうして地形が元に戻った事で、みるみるうちに海の水が引いてゆき、沈んでいたセントラルパークが姿を現した。

屋上ではアムールトラが静かに佇んでいた。その白い姿が陽炎のように揺らめきながら空へと昇ってゆく。するとそのそばにあの子が現れた。

2人は見つめあつた後、にっこりと笑った。

あの子「やったね。」

白いアムールトラ「ごめん、長い間待たせてしまったね。もう離れないから。」

あの子「いいんだ。僕の事をずっと思っていてくれて、こうして会



いに来てくれたんだから十分だよ。よし、それじゃあ最後の仕事に取りかかろう。もう一人の僕を起こしてあげないと。」

白いアムールトラ「そうだね。一緒に呼びに行こう。」

そして2人は寄り添いながらフレンズ達に向かって手を振ると、輝きとなって飛んでゆき、キュルルの体の中へ飛び込んでいった。

カララン。

元の姿に戻ったアムールトラの腕から手枷が滑り落ち、乾いた音があたりに響いた。

獣のような形をしていた大きな手が、細くて華奢なフレンズの手となった事で手枷が外れたのだ。

そしてアムールトラが無事だと知ったフレンズ達は、歓声を上げながら彼女に駆け寄ると、口々にお礼を言ったり、体を気遣ったりした。彼女はその勢いに圧倒されていたが、『みんなが私を受け入れてくれる。』と実感すると、思わず顔がほころんだ。

ふと胸元に目をやると、色あせた紙が毛皮から飛び出していた。アムールトラはそれを大事そうに取り出すと、感無量な面持ちでじつと見つめた。それは長い年月の間につきかりボロボロになってしまっただが、初めて会った時にあの子が描いてくれた彼女の絵だった。

そこへ爽やかな風が吹いてきて、彼女の頬を撫でた。その中にあの子の笑い声が聞こえた気がして、アムールトラは顔を上げた。そしてこう呟いた。

アムールトラ「ただいま、○○（あの子の名前）。」

それは唸り声などではない、しっかりとした言葉だった。

そんな彼女の足元にはいかめしい手枷と壊れたラツキービーストの本体が落ちていて、そのひび割れたレンズには、満ち足りた表情を浮かべているアムールトラの姿が映っていた。

するとそこから本当にかすかな声が出た。

「…………アムールトラ、オ…、ヨロシクネ。」（アムールトラをよろしくね）

## 第21話 ● それぞれの時間（とき）へ

キュルルは真つ暗な闇の中で、膝を抱えてうずくまっていた。

キュルル『ここでじっとしていれば、誰も傷付かないし何も考えなくて済む。僕はもう、ずっとここに居るしかないんだ。』

しかしキュルルの心は安らぐどころか、どんどん寒くなっていた。

その時、闇の中から声がした。

？「どうしたんだい？」

キュルルは顔を膝にうずめたまま呟いた。

キュルル「もう疲れたんだ。僕には何もなかった。」

？「違うよ。君はかけがえのないものを持っている。」

持つて生まれた力はきっかけにすぎない。誰かのために絵を描いたり、誰かのことを思いやって優しい言葉をかけたりしたのは、全部君の力だよ。」

キュルル「守られてばかりで、誰も助けられなかったんだ。」

すると今度は別の声がした。

??「爪も牙も強い力もあって何度もみんなを助けていたのに、誰にも分かってもらえなかった子がいてね。でもキミはその子を避けようとせず、理解しようとして一生懸命だった。キミはその子より、もっと強い力を持っているんだ。」

「あるフレンズはキミの言葉で救われた。またあるフレンズはキミの絵で勇気づけられた。そしていつも一人ぼっちだったあの子にも、キミは目を向けて手を差し伸べようとした。そんな優しいキミは、みんなに受け入れられた。」

？「君は帰るべき所も強い力も、すでに持っているんだよ。」

けれどもキュルルはうずくまっていたまま体を震わせ、手をぎゅつと握った。

キュルル「でも僕、みんなを大変な目に…。」

??「それなら心配いらぬ。セルリアンはやつつけたし、火山も収まった。やつと使命が果たせたよ。」

その言葉を聞いて、キュルルはほんの少しだけ頭を動かした。するとピシツと音がして、あたりの闇に亀裂が走り、隙間から光が差し込んできた。それからキュルルが恐る恐る顔を上げると、彼の周りにはキラキラと輝く絵のかけらがたくさん漂っていて、そこから希望の歌が聞こえてくる。

そして目の前には、自分とそっくりな子供と、マジシャンのような格好をして白く輝いているトラのフレンズが立っていた。

あの子「さあ、立ち上がるんだ！」

白いアムールトラ「キミを待っているみんなの所へ帰るんだ！」

その声に促されキュルルが震える足で立ち上がると、ガシャーンという大きな音とともに闇が砕け散り、粉々になって消えていった。それからあたりが真っ白になり、キュルルは思わず目を閉じた。

しばらくしてゆっくりと目を開けると、キュルルは白く輝く草原に立っていた。あたりには希望の歌が流れている。周りを見渡しても、あの2人の姿はどこにもない。すると向こうから、カラカル達が駆け寄ってきた。

カラカルがキュルルに飛びついた。

カラカル「もー、どこ行ってたの？心配したんだから！」

サーバル「なんかすつごい音がしたから来てみたんだけど、キュルルちゃんもここにいたんだね。」

イエイヌ「ご無事で何よりです。」

キュルル「みんな、心配かけてごめん。でももう大丈夫だよ。」

かばんちゃん「この姿で会うのは初めてですね。僕、かばんです。キュルルさんが元気そうでよかったです。」

でもひとつ気になることがあって……。僕たち、ここからどうやって帰ればいいんでしょう？」

それを聞いて、キュルル達は顔を見合わせた。言われてみれば、帰り道を知っている者がいないのだ。

サーバル「好きな方へ走ればいいんじゃない？よーし、こっちにきーめた！しゅっぱーっ！」

そう言つて駆け出そうとしたサーバルを、かばんちゃんが苦笑しながら止めた。

かばんちゃん「サーバルちゃん…。」

そしてカラカルが呆れた様子で言った。

カラカル「だから、闇雲に走り出さないで！」

？「大丈夫ですよ。」

すると後ろから誰かの声が出て、キュルル達は振り向いた。

いつの間にかキュルルの後ろに、カコ博士と女王セルリアンが佇んでいる。

そしてカコ博士の隣には、眼鏡をかけて羽のついた帽子を被った女のヒトが、女王セルリアンの隣には、サーバルによく似た姿をした緑色のフレンズがそれぞれ立っていた。

そのヒトはにこやかにカコ博士に話しかけた。

ミライ「お久しぶりです。お元気でしたか？」

カコ博士「ミライ、私は間違っていたのだろうか？」

ミライ「そんな事ないですよ。ただ、一人で頑張りすぎちゃいましたね。」

一方の女王セルリアンは無表情だったが、驚いた様子だった。

女王セルリアン「サーバル!? ナゼココニ？」

サーバル「久しぶり。もう、一人ぼっちには、させないよ。」

そこへ、サーバルとカラカルが声をかけた。

サーバル「ねえ、どこかで会ったことないかな？」

カラカル「思い出せないんだけど、何か大変な事があつたような…？」

するとカコ博士がかぶりを振った。

カコ博士「私達は過去の住人だ。今を生きる君達は、覚えていなくても良いんだよ。」

女王セルリアンも、淡々とこう述べた。

女王セルリアン「ワタシハ負けタ。モウ、才前達ノ前ニハ現レナイ。セルリアンニ出シタ指示ハ消去シタ。」

そしてミライさんとサーバルが、申し訳なさそうな顔をした。

ミライ「いろいろお話ししたいんですが、もう時間がありません。さよならです。」

セーバル「そういえば、ちゃんとお別れ、言っていなかったね。バイバイ、サーバル。」

そう言うと、4人は向こうへ歩きだした。

それを見てイエイヌは急に不安になった。

イエイヌ「ご主人は、もうどこにも行きませんか？ずっと一緒にすよね？」

しかし隣を見るとご主人夫婦がいない。慌ててあたりを見回すと、いつの間にか夫婦はイエイヌを振り返りながら、ミライさん達と並んで歩いていった。

男性職員「私達も、もう行かないと。お別れだね。」

イエイヌ「嫌です！私も連れて行ってください！」

イエイヌは追いかけてしようとしたが、なぜか足が動かない。

イエイヌ「え、なんで歩けないの？嫌だ、一人にしないで！」

泣きじやくるイエイヌに、2人はまるで自分達の子供に言い聞かせるように優しく語りかけた。

女性職員「これからはあなたの好きな事をして。お友達をたくさん作ったり、遊んだり笑ったり。そうして楽しい思い出をいっぱい作ってね。笑顔のあなたを見るのが、私達にとって何よりの幸せなの。」

男性職員「私達はいつでもそばで見ているよ。」

その言葉を聞いて、イエイヌは追うのをやめた。そして顔をくしゃくしゃにしながら2人に手を振った。

イエイヌ「わがりました、うええくん！」

しだいに6人の姿が遠ざかって輝きとなって消えてゆくのを見て、キュルルは呼び止めようとした。

キュルル「待ってください！みなさんはヒトについて何か知ってるんですか？他にも聞きたい事がたくさんあるんです！」

するとミライさんが振り向いた。そして笑顔を浮かべながら右手で敬礼のポーズをとった。

ミライ「あなたの未来を歩いてくださいね。」  
そして6人の姿が消えると、あたりがまばゆく輝きだした。キュルル達は眩しさのあまり目を閉じた。

☆

気がつくくと、イエイヌはホテルの屋上にしゃがみ込んでいた。

イエイヌ「あれ？私は今まで何をしていたんでしよう？」

まるでついさっきまで泣いていたかのように、目には涙がいっぱい、顔がぐしゃぐしゃに濡れている。なぜだか記憶がはつきりしないが、ご主人夫婦と会った事だけはしっかりと覚えていた。

イエイヌは両手で涙を拭うと、目の前に風に飛ばされた絵が落ちているのに気づいた。

それを拾ってじっと見つめていると、なんだか絵の中の2人が喋ったような気がした。

「これからはあなたの好きな事をして。」

「私達はいつでもそばで見ているよ。」

イエイヌ「分かりました、ご主人。」

そう言って、イエイヌはギュツと絵を抱きしめた。

☆

キュルルは意識を取り戻した。

キュルル『あれ…？僕は今まで何をしていたんだろう。』

海に落ちたあたりから記憶が曖昧で、気がついたらヘリポートにいて、カラカルに抱きしめられている。頭がぼんやりしていて、考えがまとまらない。

その時腕に着けていたラッキーパーブーストから、「オカエリ。」という声が出た。それを聞いて、キュルルの頭は急にハッキリした。

すると顔のすぐ横に、目を閉じているカラカルの顔があるのに気付いた。そのうえぎゆつと抱きしめられているため、彼女の体温と息遣いが直に伝わってきて、急にドキドキしてきた。

キュルル「カ、カラカル、なんだか恥ずかしいよ。」

その声を聞いて、カラカルの耳がピクンと動いた。それからカラカルはゆつくりと顔を上げた。

しばらく放心した様子でキュルルを見ていたが、急にハツとして、彼の両肩を掴んで激しく揺さぶった。

カラカル「キュルル、元に戻ったの？」

キュルル「な、何の事？」

その様子を見て張りつめていた気持ちが一瞬緩んだ途端、ここで口にした言葉が一気にカラカルの頭の中に蘇ってきた。

あの時は必死で気付かなかったが、今になつて考えてみるととんでもない事を口走っていた。嬉しさと恥ずかしさと怒りで、彼女の顔がみるみる赤くなつてゆき、口が変な形に歪んでゆく。

それを間近で見ているキュルルは、困惑した表情を浮かべた。

そしてそれに気付いたカラカルは、自分の顔が見えないように、キュルルを力一杯抱きしめた。

キュルル「いたた、苦しいよカラカル。」

ジタバタするキュルルを、いじわるそうな顔でぎゅーつと抱きしめるカラカル。

カラカル「うるさい！あんたは目を離すと、何しでかすか分からない！ずっとそばで見張つてあげてから、覚悟しなさい！」

キュルル「ごめ…え？それって…。」

カラカルがずっとそばにいてくれる。その言葉を聞いて、キュルルはとても嬉しくなった。

キュルル「ありがとう！僕も、カラカルとずっと一緒にいたい！」  
それを聞いて、カラカルはキュルルを離した。そしてキュルルに帽子を被せると、ポンと頭を叩いた。

カラカル「よろしくね。おかえり、キュルル。」

キュルル「ただいま、カラカル。」

そこへ、2人を探しにきたフレンズ達が駆け寄つて来た。

そして周りに散らばっていたスケッチブックのかけらが、日の光でキラキラと輝きながら飛んでいった。

☆

かばんさんはホテルの中でハッと目を覚ました。

かばん『…?こんな時にうたた寝しちゃったのかな。』

何か夢を見ていた気がするが、全く思い出せない。ぼんやりしながらあたりを見回すとすでに輝きと歌声は消えていて、目の前の水溜りにはアムールトラの笑顔が描かれている絵のかけらが浮いていた。

かばん「そうだ、サーバルちゃんは？」

かばんさんは腕の中のサーバルに目を落とす。

すると、その体がかすかに動いた。それに気付いたかばんさんは、サーバルを揺り動かしながら必死に呼びかけた。

かばん「サーバルちゃん！起きてよサーバルちゃん！」

「…バルちゃん！起きてよサーバルちゃん！」

すぐそばで誰かの声が聞こえる。サーバルがゆっくり目を開けると、かばんさんの顔がうつすら見えてきた。

『私を抱きしめてるのは誰だろう？この声、この匂い、この姿…』

そしてサーバルの頭の中で、夢の中にいたかばんちゃんと、かばんさんが重なった。

『ずっと思い出せなかったけど、私の大事なお友達。そう、名前は…』

かばん「サーバルちゃん!?よかった、目が覚めたんだね！」

サーバル「おはようかばんちゃん。ずいぶんおつきくなつたね。」

その言葉を聞いて、かばんさんの動きが止まった。

かばん「サーバルちゃん、今なんて？」

サーバル「やつと思ひ出したよ！大好きなかばんちゃん、私の大切な、1番のお友達！」

かばんさんは少しうつむいた後、また顔を上げた。その目には温かい涙が溢れていた。そして精一杯の笑顔でこう言った。

かばん「おかえりなさい、サーバルちゃん!!？」

それから2人は、しっかりとお互いを抱きしめた。

地震は収まり、ホテルから水は引いた。



濡れた瓦礫から、しずくがポタポタと滴り落ちている。

割れた窓から暖かな光が差し込んでいる。それを浴びて、ところどころに残っている水たまりの中のサンドスターが、キラキラと輝いている。

2人はいつまでも抱き合っていた。そこへ…、

ラッキーさん「カバン、タベチャダメダヨ。」

かばん「食べないよ！」

ラッキーさんの言葉を聞いて、かばんさんは慌ててサーバルから離れた。その様子を見て笑顔になるサーバル。そんなサーバルを見て、かばんさんも笑顔になった。そして部屋の中に、かばんさんとサーバルの笑い声がこだました。

一方部屋の外では、博士と助手が壁に背中をつけて、中の様子に聞き耳を立てていた。

博士「ようやく素直になったのです、まったく。」

そう言っただけと胸を撫で下ろす博士と、

助手「ヒトは素直が一番なのです、まったく。」

そう言っただけ少し悔しそうなの、でも安堵した表情を浮かべる助手。

そんな助手を片目で見ながら、博士はやれやれといった感じのため息をついた。

博士「助手は素直じゃないのです、まったく。」

それを聞いた助手は、顔を赤らめながら反論した。

助手「なっ…！何を言うのですか、博士！」

博士はイタズラっぽくふふつと笑うと、ふと上を向いた。

博士「そういえばお腹が空きましたね、助手。」

そして助手も上を見上げた。

助手「まったくですね。ひさびさにかばんとサーバルにご馳走になりますか、博士。」

2人の視線の先の天井に開いた穴からは、澄みきった青空がのぞいていた。

## 第22話 □おちやかい

イエイヌ「フッフ、フーフフーン♪」

イエイヌのおうちから、希望の歌のメロディが聞こえてくる。

その中では歌を口ずさみつつ椅子に腰掛けているイエイヌが、キュルルが描いてくれた絵を見ながら微笑んでいた。

それはイエイヌが大切にしていた絵と同じ構図だが、人物が変わっている。

左からイエイヌ、アムールトラ、カラカル、キュルル、サーバル、かばんさん、博士と助手がパークの入り口に並んで笑っている。

するとコンコンとドアを叩く音がした。イエイヌがドアを開けると、そこには絵に描かれていたメンバーと、ジャングルのフレンズ達がいいた。

イエイヌ「みなさん、ようこそ！」

そう言つて、イエイヌは笑顔でみんなを出迎えた。

うららかな日の光の下、イエイヌのお庭でお茶会が催された。

アルパカからもらったお茶とかばんさんが持ってきたお菓子が振る舞われ、集まったみんなで近況を報告し合った。

海底火山の活動は、けもハーモニーにより鎮静化した。

これによりセルリアンの数は大幅に少なくなり、大型の個体は出てこなくなった。

地震で壊れた所は、ラッキービースト達による整備が進んでいる。

レールが修復された事でモノレールでパーク中を回れるようになり、セントラルパークの遊園地などの施設も、海の水が引いたため利用できるようになっていた。

キュルルはおうちを見つけることはできなかったが、カラカルというかけがえのない友達を見つけた。

またセルリアンが原因とはいえ、パークの危機の中心人物だとカラカルから聞かされたキュルルは、ホテルでみんなに謝罪した。そして

罪滅ぼしのため、困っているフレンズのお手伝いをする事にした。

カラカルはそんなキュルルに協力を申し出て、一緒にパーク中を回る事となった。

そんな2人のお手伝いは大好評。たちまち評判となり、あちこちからお手伝いやお使いを頼まれるようになった。その依頼方法は直接だったり人づてだったり、ラツキービーストが教えてくれたりした。

こうして2人は、パーク中を旅しながらフレンズに品物や伝言を届けるメツセンジャーになった。

ちなみにけもハーモニーが起きたあの日から、ヒトの輝きからセルリアンが生まれる事はなくなつたため、キュルルは今でも絵を描き続けている。時にはフレンズたちの交流を、絵や文章で繋いだりもしている。

サーバルはかばんさんとの記憶を取り戻し、博士助手と一緒に研究所で暮らしている。もうセルリアンの心配をしなくても良くなり、かばんさんも研究を続ける必要がなくなつたため、近々サバンナに引越して2人で暮らすそうだ。

そして博士と助手は、お菓子を頬張りながらこう言った。

博士「それに合わせて、我々は図書館に戻るのです。」

助手「時々様子を見に行くのです。料理の腕を磨いておくのですよ。」

アムールトラはジャングルのフレンズ達と同じテーブルに座って、笑いながらみんなとおしゃべりをしている。まだ言葉はところどころぎこちないものの、時々かばんさんに教わりに行っていて、少しずつ会話の幅も増えてきている。

けもハーモニーの力で彼女の野生解放は治まり、強大な力は失われた。獣のようだった大きな手は、すっかり縮んで器用に物を掴めるようになり、今は小さなカップでお茶を飲んでいる。

そんな彼女の左腕には、壊れたラツキービースト本体が光っていた。練習を繰り返す事で着脱もできるようになり、大切なお友達とし

ていつもそこに着けている。

彼女はゴリラ達とジャングルで暮らしていた。

なんでも壊してしまった広場をみんなで修復し、フレンズが自身の身体能力を活かしたショーを披露する、サーカス会場にしたのだという。

イエイヌはおうちを開放し、積極的にみんなと交流するようになった。聞いたところによると、あの日のホテルで大切なヒトと出会って約束したのだという。

それからというもの、それまでしよぼくれていたのがウソのように明るく社交的になり、今ではお茶の淹れ方もすっかり板についていた。

そうしてお茶会が一段落した頃、キュルルが鞆からなにかを取り出してイエイヌに手渡した。

キュルル「はい、招待状だよ！ようやくホテルの修理が終わって、パパがお祝いのライブをやるんだ。パークのみんなが招待されているんだけど、とりわけあの時駆け付けてくれたイエイヌさんには、ぜひ参加して欲しいんだ。」

それを聞いたイエイヌは、笑顔で「はい！」と返事をした。

## 第23話 □おたんじょうび

ペパプライブ当日は、とても良いお天気に恵まれた。

会場となったホテルの屋上は、パーク中から招待されたフレンズ達でいっぱいだった。テーブルがいくつも並べられ、その上には食べ物や飲み物が用意されている。そしてブタがここにこしながらテーブルを回って、それらを配ったり補充したりしている。

またヘリポートは、黄緑色のカーテンで仕切られた特設ステージとなっていた。大きなライトやスピーカーが設置されているが、その中の様子はカーテンが閉じていて見る事ができない。

ついにこの日を迎えられて、オオミミギツネは感無量の面持ちでステージの前で涙ぐんでいる。ハブはその隣で、そんな彼女を誇らしげに見つめていた。

そうしてステージの端からマーゲイが現れて挨拶をした。

「皆さん、ようこそおいで下さいました。今日は思いっきり楽しんでいてくださいね。それではいよいよペパプの登場です、どうぞ！」

そんな彼女の呼びかけに合わせて反対側から5人のペパプのメンバーが現れ、ステージの中央に立つとそれぞれ挨拶をした。すると客席から拍手と歓声が上がった。

そしていよいよライブが始まるかに思われたが、プリンセスがこう言った。

プリンセス「ライブの前に、大切なお知らせがあるの。アムールトラ、ちよつとステージの上に来てちょうだい。」

突然アムールトラがステージに呼ばれた。何も知らない彼女は戸惑っていたが、ゴリラ達に背中を押されながらステージに上がった。

すると彼女の目の前で、スルスルとカーテンが開いていった。

そこにはでっかい『おたんじょうびおめでとう』の文字があった。

大きなパネルに一文字ずつ、色とりどりの文字が書かれていて、その周りには笑顔のみんなが描かれていた。

プリンセス「アムールトラ、おたんじょうびおめでとうの会を始め  
るわよ！」

先日のお茶会で、「アムールトラさんにお礼がしたい。」というキュルルの相談に乗ったかばんさんは、研究所で見た彼女の過去を考慮してお誕生会を開く事にした。

そしてお茶会に出席したメンバーが中心となって、彼女に内緒で準備が進められていたのだ。

アムールトラ「え…、ええ…？」

思いがけない事が立て続けに起こったため、気持ちが追いつかずオロオロしているアムールトラ。

そこへ大きな拍手と共に、キュルルとイエイヌがステージに上がり、彼女にそれぞれプレゼントを手渡した。

それは、サーカス会場でショーを披露しているアムールトラがみんなと一緒に笑っている絵と、隔離施設で見つけた古ぼけたトラのぬいぐるみだった。

そして設置された大型スピーカーから、希望の歌のメロディが流れ始めた。それに合わせて、集まったみんなで歌を歌った。

そして『今は、さよなら』の後に、かばんさんが『いつか、おかえり』の一文を付け加えた。

歌が終わると再び大きな拍手が巻き起こり、みんなが口ぐちにおめでどうを言った。それを聞いて、アムールトラの目から大粒の涙が溢れた。

プリンセス「おめでどう！じゃあ一言みんなに挨拶を！」

と、プリンセスから彼女にマイクが渡された。

アムールトラは涙を拭って満面の笑みを浮かべると、みんなに向かってこう言った。

アムールトラ「みんな、本当にありがとう！」

そして彼女がマイクを一振りすると、なんとマイクが花束に変わった。それを見た客席からは、どよめきと歓声が上がった。

それから彼女は何事もなかったかのように花束からマイクを取り出すと、それらをペパプに手渡した。

信じられない……という顔をしているメンバーをよそに、フルルがマイクを振りながら首を傾げている。

フルル「あれ？いくら振ってもジャパリまん出てこないよ？」  
イワビー「闇雲にやっても出るわけないだろ！」

相変わらずマイペースなフルルに、すかさずイワビーがツツコミを入れた。

コウテイとジェーンは、感慨深そうにうなずいている。

コウテイ「パークにはまだまだ不思議なことが沢山あるんだな。」

ジェーン「私たちも負けていられませんね。」

そしてプリンセスが明るく声を張り上げた。

プリンセス「それじゃあ、いつも以上に張り切っていくわよ！」

それを合図に、スピーカーからペパプの歌が流れ始めた。

するとステージの上空にトキ、シヨウジョウトキ、クロトキの3人が大きなくす玉をぶら下げて現れ、バンドウイルカとカリフォルニアアシカがステージの前に進み出た。そして音楽に合わせて、アシカの組んだ手を足がかりにイルカが高々とジャンプしてくす玉を割ると、中からたくさんの花が飛び出してみんなの頭上に降り注いだ。

そんな花のシャワーとともにライブが始まった。

歌と音楽、そして歓声と拍手が、あたりいっばいに響き渡った。

歌声を乗せた風は、あの隔離施設まで流れて行った。

施設の中はまるで時が止まっているかのように静まり返っていて、アムールトラが眠っていた檻の床には、砂埃が積もっている。

しかしよく見ると、そこに足跡がついている。それをたどってゆくと、うっすら砂の積もったアムールトラの手枷が置かれていた。

そして壁の穴から流れ込んだ風が砂埃を散らした。すると手枷のすぐそばの床から文字が現れた。

それはスケッチブックを置く際、やっと書けるようになった文字で、あの子が床に書いたものだった。たとえ読めなくても、いつか彼女が目覚めたら真っ先に目に入るように、との思いでここにメッセージを残したのだ。

そこにはたどたどしい筆跡でこう書かれていた。  
『おかえりなさい、アムールお姉ちゃん。』



## 番外編1 贈り物

※時系列でいうと、6話と7話の間のお話です。

アムールトラとお別れをした後、あの子が隔離施設から出ると、計画(プロジェクト)の中心人物だった研究者と、オレンジ色のラッキービーストを抱いたミライさんが声をかけてきた。

研究者「今日はよく来てくれたね。この子は、彼女と一緒にいたラッキービーストだよ。頼みがあるのだが、この子を連れて行つてくれないだろうか。君と一緒になら、彼女もこの子も喜ぶと思うんだ。」  
彼は涙で濡れた顔を拳で拭うと、うなずいた。

ミライ「ありがとうございます。この子にはもう一つ機能があつて、アムールトラさんが起きたらすぐ知らせてくれます。その時は、どうかこの子にも会わせてあげて下さい。お願いしますね。」

そう言うと、ミライさんは悲しそうに微笑みながら、彼にラッキービーストを手渡した。

家に帰った彼は、ラッキービーストを自分の部屋に連れて行った。そして足音に因んでポイポイと名付けた。

あの子「これからよろしくね、ポイポイ。」

ポイポイ「ヨロシクネ。サツソクダケド、アムールトラカラキミニめっせーじガアルンダ。」

するとポイポイのお腹についているレンズが光りだし、壁にアムールトラの映像が映し出された。

彼女はとまどいながらもこちらに手を振っている。日付を見ると、彼が研究所を訪れた日だった。

「え…と、話していいのかな？」

やあ、元気かい？私は見ての通り元気だよ。今日はせっかく来てくれたのに、会えなくてごめんね。今キミの顔を見たら、何もかも投げ出して、すぐパークに戻ってしまいたいそうで怖いんだ。」

「今日は研究所のヒトが、私のために新しいお友達を連れてきてくれたんだ。ラッキービーストって言って、私の事をずっと見ててくれる

んだって。小さくて丸っこくて、私と同じオレンジ色で、お話もできるんだよ。」

「この子から音がして、壁に私の姿が出てきた時はびっくりしたよ。この子は私の事を全部覚えてて、こうして伝えておけば、いつでも教えてくれるそうだよ。」

彼女は終始明るく話していた。

そんな彼女の瞳には、ポイポイの姿が小さく映っていた。

映像にはメッセージ以外にも、アムールトラの日々の生活が記録されていた。彼女は森林を模した部屋で過ごしていた。

朝起きて、実験の時間になると研究者が呼びにきて、部屋を出て、しばらくするとヘトヘトになって帰ってくる。それからご飯を食べて、気絶するように眠る。

翌朝起きて、出て行って、帰って来て、食べて、寝て。

それと起床後や食後に、身嗜みを整えてから彼宛のメッセージを述べる。彼女の生活は、大体この繰り返しだった。

彼はポイポイに頼んで、メッセージの部分だけ見せてもらう事にした。

この日、彼女は胸の前に鏡を掲げていた。そこにはポイポイの姿がはつきりと映っていた。

「この鏡？とか言う光る板を使えば、この子の姿がキミにも見えるんだって。こここのヒトが持ってきてくれたんだ。みんな優しいよ。」

今日は少しだけど、野生解放ができたよ。やっぱり、キミの事を考えると強い力が出せるみたい。早くセルリアンをやっつけて、キミに会いたいよ。」

時折、研究者と話をしている彼女の姿が映った。

最初のうちはみんな明るい雰囲気だったが、日を追うごとに笑顔がなくなっていく。重苦しい空気が伝わって来て、見ている胸が苦しくなった。

しだいに姿が変わってゆくにつれ、彼女は言葉がなかなか出てこなくなり、話もただどしくなっていく。

この日は、彼女の体から大量のけものプラズムが放出していた。「困った。ビースト化してもセルリアン倒せない。けど頑張る。体、キラキラ止まらない。はあ…、お腹空いた。」

これ以降、彼女は腕に厳つい手枷をはめて、眠っている事が多くなった。それでもけものプラズムの放出は続いていた。

しばらく寝顔を眺めていると、眠っていた彼女がモゾモゾと動いて、トロンとした目をしながらこう言った。

「あいたい。だいすき。」

これが最後のメッセージだった。

それからはムニヤムニヤと口を動かしたり、薄目を開けて少し唸ったりするだけだった。

映像が終わる頃には外はすっかり暗くなっていて、しとしとと雨が降っていた。彼は膝の上に置いた両手をぎゅっと握ると、こう呟いた。

あの子「待ってるよ、アムールお姉ちゃん。」

それから、あの子はポイポイを大切な友達として迎え入れた。

どんな時でも2人は一緒だった。

アムールトラはポイポイにメッセージを残してくれた。

映像の中の彼女は、困難な状況であっても辛いとか辞めたいとかは口にせず、いつも前向きだった。

だったら今度は、自分が記録を残して彼女に見せてあげる番だと思った。

そしていつか彼女が起きたら、真っ先に会いにいったって、これまでの自分の姿を見せて一緒に笑おうと考えていた。

それから数年後、かねてからセルリアン襲撃事件やビースト計画（プロジェクト）の問題が取り沙汰されていた事もあって、ジャパリパークは閉鎖されてしまった。

それでも彼は、アムールトラを待ち続けた。

明日は会える、明日こそ会える、また明日…。

だが結局その日が来ないまま、何年もの月日が流れていった。

番外編2 灰色の街 〽 もうすぐヒトはいなくな  
る 〽

※時系列でいうと、番外編は6話と7話の間のお話です。

あの子はベッドの中で目を覚ました。

まだ朝日が登ったばかりのようで、部屋の中は薄暗い。彼はふうつと息を吐くと、もう一度目を閉じた。

そのまましばらく横になっていたが、どうしても寝付けな。何度目かの寝返りの後、彼は眠るのを諦めた。そして起き上がってベッドに腰かけると、あくびをしながら伸びをした。

すると枕元にいたポイポイが、彼に挨拶をした。

ポイポイ「オハヨウ。マダ寝テテモ大丈夫ダヨ。」

あの子「おはようポイポイ。もう目が覚めちゃったよ。今日は特別な日だからね。」

この星でポイポイとお話するのも、今日でお終いだ。とうとうこの日が来たかと思うと、なんだか名残惜しい気持ちがあった。

そして彼は気怠げに立ち上がると窓まで歩いてゆき、カーテンを開けて外を見た。

そこにはいつもと変わらずがらんとした、灰色の街並みが広がっていた。この景色とも今日でお別れだが、こちらは何の感慨も湧かなかった。

朝日に照らされた彼の目は、生気がなくどんよりと曇っていて、顔には皺が刻まれていた。

アムールトラが長い眠りについてから、もう何十年も経った。あの子も歳を取り、初老の男性になっていた。

その頃、ヒトの世界から情熱が失われていた。

始まりが何だったのかは分からない。その変化は、誰も気付かないくらいゆっくりと訪れた。

しだいに今あるものだけを使って暮らすヒトが増えてゆき、いくら

新しく物を作っても売れなくなった。

働きたがらないヒトが増え、経済が成り立たなくなった。

そして夢を持ったり、何かに打ち込んだりする気持ちをなくした、無気力なヒトが増えていった。

子供も生まれなくなり、寿命も短くなつて、数がどんどん減つていった。

原因ははつきりしない。

科学がピークを過ぎ衰退し始めたとか、もう作れるものは全て生み出してしまったからだとか、これがあるべき姿なんだとか、色々な説はあつたが、この流れを止める事は出来なかつた。

無気力なヒト達は誰かに世話をしてもらわないと生きてゆけなかつたが、街には沢山のロボットがいて、そんな彼らを支えていた。水や食糧の生産、衣食の配給、衛生面の管理などは全て行つてくれるため、食べて寝るだけの最低限の生活は保証されていた。

あの子はどうだったかというところ、異変が始まった頃、彼は介護用ロボットを開発する仕事に就いていた。ヒトの様々な要求に応じてロボットを改良するのは大変だったが、やりがいを感じていた。

ところがだんだん無気力なヒトが増えてくると、ロボットに新たな機能は求められなくなり、修理が主な仕事となつた。しかしそれも、徐々に同じ型のロボットばかりが広まってゆくにつれ、同じ事の繰り返しになつていった。

そしてヒトが減り、これらの作業を全てロボットがやってくれるようになった時、彼は仕事を辞め、ロボットに支えられながらもなんとなく日々を過ごすようになった。

完全な無気力ではないが積極的に働きたいわけでもない、ここには彼のようなヒトもたくさんいた。

一方働きたいヒト達は、この星を捨て、よその星を開拓して自分たちが住みやすい世界を作り上げていた。こうして移住する者と残る者の棲み分けが進んで、もうここには働きたいヒトはほとんど残っていないなかつた。

当然、彼の周りのヒト達も、どんどん移住していった。

友人から、一緒に行こうと誘われたことも何度かあった。移住先にはまだまだ新しいロボットを必要としているヒトがいるそうで、すでに新しい職場も住居も決まっていた。

しかし、明日アムールトラが目を覚ますかもしれないと思うと、どうしてもこの星を離れられなかった。そして結局ギリギリまで出発を延ばしているうちに、この日が来てしまった。

今日は、向こうへ行く宇宙船が飛び立つ最後の日だ。それに乗ったら、もう2度と帰ってくることはできない。

あの子は着替えを済ませると、朝食の準備に取り掛かった。

冷蔵庫から卵1個とレタス2枚、プランターで育てたミニトマトを取り出し、空になったのを確認した。

そしてフライパンを火にかけ油を引くと、卵を割って弱火でじつくりと焼いた。

調理をしながら、もう片方の手で端末を立ち上げてニュースを見ると、各地の宇宙船の出発時間が放送されていた。

この星で放送が行われるのも今日で最後だ。画面の右上に、『移住先でお会いしましょう』の文字と、カウントダウンが表示されている。

ぼんやりと画面を眺めていると、目玉焼きが焼き上がった。それをレタスと一緒に最後の食パンに挟み、ミニトマトも皿に盛って食卓に着いた。するとポイポイがテーブルに飛び乗ってきて、彼の正面に陣取った。

朝食を食べながら、彼はポイポイに尋ねた。

あの子「ポイポイはどうする？一緒に行く？それともここに残る？」

ポイポイ「前二モ言ツタケド、キミノ意思ニ従ウヨ。ソレガ最良ダヨ。」

あの子「そうだよ。ポイポイの運命を決める、この星での最後の選択だもの。大事にしないといけないよね。」

ポイポイ「宇宙船ノ発射マデ、マダダイブ時間ガアルヨ。コノ星ヲ出ル前ニ、じゃぱりぱーくニ行ク事ヲオススメスルヨ。」

あの子「いいね。せつかくだし行ってみようか。」

ポイポイ「さばんなえりあノ近クカラ飛び立ツ宇宙船ガアルカラ、ユツクリ滞在デキルヨ。」

ジャパリパークは巨大な島で出来ており、そこへ行くには橋を渡ったり船を使ったりする必要があった。

そんなパークには海の上を渡る巨大な橋が2本架けられていた。ここからセントラルパークに出るものと、近くの空港とサバンナエリアとを繋いでいるものだ。

パークに空港を作る計画が持ち上がった事もあったが、騒音や人混みが、フレンズに悪影響を与えかねないとして却下されたのだ。

そうしていつもと同じ、ただ食べるだけの味気ない朝食が終わった。

彼は後片付けを済ませると、登山用の帽子を被り、丈夫な青い上着を羽織って身支度を整えた。荷物は既に移住先に送ってあるので、他に持ち出すものは何もない。

それから玄関を出ると、冷たい風が吹いていた。

彼はまとめたゴミを玄関先に置いた。こうしておけば、後でロボットが回収してくれる。

彼は玄関のドアは閉めたが、鍵はかけなかった。電気や水はそのまま。置いていったものは、残ったヒトが自由に使って良いというのが、彼の考え方だった。

ならこの鍵ももう必要ない。彼らはドアノブに鍵を差したまま家を後にした。

ポイポイポイポイ…。

灰色の街の中に、ポイポイの足音が響いた。

オレンジ色の体もかなり目立っていたが、こちらを見るものは誰もいない。他に動いているものといえば、1台の清掃ロボットと行き合ったくらいだ。

しばらく歩くと、バス停に到着した。そこにはジャパリパーク行きの無人運転バスが停まっただけで、2人はそれに乗り込んだ。

それから数分後、バスは滑るように発車した。

窓の外を灰色の景色が流れて行く。

あの子はそれを眺めながら、世界がこうなってしまった原因について、ぼんやりと思考を巡らせた。

あの子『セルリアンが情熱を食べちゃったんだ。』

彼はセルリアンに食べられた経験のある、数少ないヒトの一人だった。これにより、それまでアムールトラと過ごした日々の事と、紙に何かを書く力を失った。

しかしその後、彼女とは新しい思い出をたくさん作る事ができたし、練習を繰り返す事で、ゆつくりだが文字が書けるようになった。結局絵は描けないままだったが、日常生活に支障はない。

それでもこの事件から、パークはセルリアンを生み出す危険な施設とされ、ビースト計画（プロジェクト）の騒ぎも相まって、数年後に閉鎖されてしまった。

そうになると、フレンズをどうするかが問題となった。

サンドスターはパークの外では力を失ってしまうため、フレンズはヒトの世界では動物に戻ってしまう。

何度も話し合いが行われた結果、関係者達の尽力でパークは島ごと保護される事が決まり、フレンズにはこれまで通りの生活を続ける事が認められた。

こうして、パークはヒトの管理から離れる事となった。

一方で、人工物を模したセルリアンが、たびたびヒトの世界に現れるようになった。

それらはヒトを襲うことはないが、物を取り込んだり踏み潰したりする。中でもかなりの巨体と重量を持つ巨大セルリアンは、ヒトにとっても十分脅威だった。

始めのうちは、ヒトの中にも武器を使って戦う者がいた。

だがセルリアンは、そういつたヒトの敵意を察知すると積極的に向かってきた。なまじ軍隊を集めたばかりに、セルリアンがなだれ込んできたケースもあった。

そのうえどこから湧いてくるため、対策の立てようがない。結局自然災害と同じように、通り過ぎて消えてゆくのをただ見ているしか



なかった。

こうして、そこらに小型セルリアンが現れても誰も気に留めなくなつた頃、無気力がヒトの世界に蔓延していた。

番外編3 やあ、久しぶり。 懐かしい場所とお  
友達 へ

アナウンス「ご乗車ありがとうございます。まもなくジャパリパーク、ジャパリパークです。お忘れ物をなさいませんよう、気をつけてお降りください。」

車内にアナウンスが響き渡り、彼は思考を中断した。

バスはセントラルパークへと続く巨大な橋を渡り終えようとしていた。その向こうに、入り口のゲートが見える。

そしてバスがゲートの前で停まった。

彼は運転席に向かって「ありがとう。」と言うと、ポイポイと一緒にバスから降りた。

すると目の前に、懐かしい施設が広がっていた。

朝の光に照らされて、パークはひっそりと佇んでいた。

彼はパークが閉鎖されてからは、1度もここを訪れた事はなかった。長い年月の間に、ゲートはツタが絡み付いてボロボロになっている。

開園していた頃は、いつも大勢のヒトで溢れかえっていて、ゲートをくぐる前から笑い声と歓声が聞こえてきたが、今のパークは静寂に包まれていた。

かつての賑わいを知っているだけに、彼にはより一層静まり返っているように感じられた。

あの子「さてと、出入り口はどうなっているかな。」

勝手に入っても今更咎める者はいないだろうが、シャッターや鉄柵などの堅牢なガードをよじ登らねばなるまい、と彼は考えていた。

だが幸いな事に、どうやらこの管理者もこの施設を残ったヒトが使うのは構わないと考えたらしく、そこには『閉鎖』と書かれた黄色いテープが張られているだけだった。それをくぐり抜けるだけで、簡単にパークに入る事ができた。

彼は入ってみて驚いた。

てつきりパーク全体がゲートのようなボロボロの廃墟になっていると思っていたが、しつかりと手入れがされていた。

パークに生えていた木々が成長して緑が増えていたが、雑草は刈り取られていて、小石やガラスも散らばっていない。どの施設も思い出のままの姿を保っていた。

遊園地では、無人の観覧車とメリーゴーランドが動いていた。賑わいはないが、どの遊具も錆びていない。どれも問題なく遊べそうだった。

ショッピングモールには、ぬいぐるみ、Tシャツ、キーホルダーなど沢山のお土産が置かれていた。それらはうつつすら埃をかぶっていたが、丁寧に並べられていた。

イベント会場は、アムールトラの記念館のままだった。そこには彼女の写真やイラスト、彼女へ宛てたメッセージなどが大切に保管されていた。

あたりを見回しながら、彼らは誰もいないセントラルパークを歩き回った。ひんやりとした朝の空気に、彼とポイポイの足音が響いた。やがてホテルが見えてきた。

大きな玄関口にたどり着くと、自動扉がスツと開いた。中はがらんとしていたが、空気は淀んでおらず手入れも行き届いていた。

今にも誰かが出てきそうで、思わず彼は受付の呼び鈴を鳴らしてみた。すると、チーンという音が静寂の中に吸い込まれていった。

しかし、しばらく待っても何の気配もしなかった。

あの子「まあ、そうだよね。」

あの子はため息混じりにつぶやいた。すると背後から小さな音がした。

とつさに振り向くと、何かの影が自動扉の向こうを横切った。すぐさま外に出てあたりを見回すと、小さな影が職員の宿泊エリアの方に消えていった。

あれはラツキービーストだろうか？彼らは影の跡を追いかけた。

そのまま早足で歩いてゆくと、宿泊施設が見えてきた。よく見ると、職員夫婦の住んでいた家の扉が開いている。

もしかしてまだ誰かが住んでいるのだろうか？そう思った時、背後からバツと音がした。彼はとっさに振り向いたが、仰向けに組み伏せられてしまった。

そして胸の上に乗っかっている誰かが声をかけてきた。顔は逆光でよく見えないが、大きな耳が揺れている。

？「見かけない顔ね。あんた、なんのフレンズなの？それともヒト？」

それは聞き覚えのある声だった。

あの子「イタタ。やあ、カラカル。びっくりしたよ。」

名前を呼ばれて、カラカルは怪訝な顔をしながら彼を見つめた。

カラカル「あたしを知ってるの？もしかしてパークの職員さん？」

ポイポイ「カラカル、タベチャダメダヨ。」

カラカル「食べないわよ！つて、ボスつてフレンズと喋れたの？オレンジ色？え、なんで？」

ポイポイの声を聞いたカラカルは、彼にまたがったままあたふたし始めた。

すると騒ぎを聞きつけたイエイヌが、慌てておうちから飛び出してきた。

イエイヌ「どうしたんですか、カラカルさんっ!?？」

カラカル「知らないやつがうろついてたから捕まえたんだけど、あたしの事知ってるみたい。あんた、こいつが誰だか分かる？」

するとイエイヌは、あの子の方をじつと見つめながら鼻をひくつかせた。そしてパツと明るい顔になると、尻尾を振りながら倒れている彼の首に抱きついた。

イエイヌ「この匂い…、うあ、懐かしいなあ〜！」

カラカル「ちよつと、急にどうしたの!？」

驚くカラカルを尻目に、イエイヌは彼の首にすがりつきながら息を弾ませている。

イエイヌ「覚えてませんか？よくアムールトラさんと一緒にいたヒ

トですよ！」

それを聞いたカラカルは、彼の顔をまじまじと見つめると、素っ頓狂な声を上げた。

カラカル「え…えええ〜!？」

ちよつとしたアクシデントはあったが、彼らはカラカルとイエイヌに連れられて夫婦のおうちにお邪魔した。部屋の壁には、昔イエイヌにプレゼントした絵が飾られていた。そして3人は椅子に、ポイポイはテーブルに座った。

あの子「僕のこと覚えてくれたんだね、ありがとう。」

イエイヌ「私の恩人を、忘れるわけないじゃないですか」

けれどもカラカルは、申し訳なさそうな顔をしている。

カラカル「ごめん、さつきは驚かせて悪かったわね。」

あの子「平気だよ、気にしないで。」

それから彼は、2人にこれまでパークに何があったのかを尋ねた。それによると、マジックショー会場に巨大セルリアンが現れてから、訪れるヒトは少なくなっていたそうだ。

そしてフレンズもセルリアンを警戒して、よほどの用事のある時以外はセントラルパークに行かなくなり、しだいに自分の縄張りから出なくなったという。パークが閉鎖されヒトがいなくなってからは、歩き回っているのはボスクらいなのだそうだ。

あの子「2人はここで暮らしているの？」

するとイエイヌは、何故か目を泳がせた。

イエイヌ「カラカルさんは、…ええと、たまたま遊びに来てくれたんです。私はご主人が帰ってくるまで、ここでお留守番をしています。」

あの子「どういうこと？」

あの子が尋ねると、イエイヌの顔が曇った。それからゆっくりと語り始めた。

イエイヌ「パークからヒトがいなくなっても、ご主人夫婦だけはここに住み続けていたんです。そして毎日、パークのお掃除をしたり、

ボスと一緒に建物を直したり、フレنزズとご飯を食べたりしていました。私はそんな2人と一緒に、お仕事をしたり遊んだりしていました。」

あの子『ああ、それでパークは荒れ果ててなかったんだ。』

イエイヌ「でもある日、私に『お留守番を頼んだよ。』と言って、2人だけで出かけて行ったんです。フレنزズになってから、こんな事を言われたのは初めてでした。寂しかったですが、私は玄関に立って歩いてゆく2人を見送りました。」

「そうしたら、2人の体がキラキラしたんです。なんだろうと思つて見つめてみると、だんだんキラキラは空に消えていきました。そして気がついたら、2人がいなくなっていたんです。」

「私はびっくりして急いで外に出たのですが、あたりに2人の姿はありませんでした。それから必死にパーク中を探し回りました。他のフレنزズさん達にも聞いてみましたが、みんな2人の姿を見ていないと言いました。」

「私はどうしたら良いのか分からなくなりましたが、あの言いつけ通り、ここでお留守番を続けているんです。」

それはにわかには信じがたい、不思議な話だった。

かつて、サンドスターがヒトに影響を与えるのではないかと話題になったこともあったが、あくまで噂止まりで、ヒトが消えてしまった事など一度もなかった。

2人がパークを出て移住したとも考えられるが、あれほど大切にしていたイエイヌを置いてゆくはずがない。だがイエイヌの様子を見るに、勘違いとも思えなかった。

あの子はしばらく考えた後、ゆっくりとした口調で言った。

あの子「ここは特別な所だから、何が起きてもおかしくないよ。イエイヌさんは偉いよ。自分の気持ちを大事にしてね。」

それを聞いたイエイヌは、寂しそうに笑いながらお礼を言った。すると今度はカラカルが、ツンとした顔で話した。

カラカル「あたしはでつかい箱の上で星を見てたら、いつの間にか寝ちやつて、気が付いたらここに…、じゃない！」

どうやら隠そうと意識するあまり、事実の方を言ってしまったらしい。その様子を見たイエイヌが、全身をフルフルさせながら笑いを堪えている。

カラカルは慌ててごまかそうとした。

カラカル「そう！この子が心配だから、様子を見にきたのよ！それで、用も済んだしセントラルパークを通過してサバナに帰ろうとしたら、あんたがいたってワケ。」

おそらくでっかい箱とはモノレールの事だろう。遊園地でもそうだったが、乗り物はヒトがいなくなってから定期的にも動いているよ。うだ。

そしてカラカルは、ぼつが悪そうな顔をしながら彼を見た。

カラカル「それにしても、あの子だって言われても全然分からないわ。ヒトってこうも変わっちゃうものなのね。」

それを聞いて、あの子は肩をすくめた。

あの子「フレンズと違って、ヒトは歳を取るからね。」

カラカル「そうじゃなくて、なんて言うか…、元気がない！」  
すると彼は苦笑しながら、ヒトの世界から情熱が無くなってしまった事、この星にはもうヒトがあまり残っていない事、ヒトがパークを訪れるのは、今日が最後であろう事を2人に伝えた。

それを聞いた2人は目を丸くした。

イエイヌ「パークの外では、そんな事が起こってるんですね。」

カラカル「よく分かんないけど大変そうね。でも、みんなに合わせすぎてない？あんたがやりたい事をやれば、それで良いじゃない。」

あの子「やりたい事、か。」

そう言われて、あの子はハツとした。言われてみれば、しばらく考えた事がなかった。

そこへ、ポイポイという足音が聞こえてきた。そうして玄関からラッキービーストが入ってきて、彼を見て挨拶をした。

ラッキービースト「ハジメマシテ。ボクハ、ラッキービーストだよ。ヨロシクネ。君ノ名前ヲ教エテ。君ハ何ガ見タイ？」

するとカラカルが、物珍しそうにラッキービーストを見た。

カラカル「へー、ボスってヒト相手だとたくさん喋るのね。」

あの子「さつきから聞いたかったんだけど、ボスって？」

イエイヌ「ジャパリまんを配ったりケガした子を助けてくれたりするんで、みんなボスって呼んでるんです。なぜかフレンズとはお話ししてくれないんですが、ご主人夫婦とはよく話してました。他にも建物を直したり、パークの案内もしてくれますよ。」

するとポイポイがテーブルから降りて、ラツキービーストと向かい合った。そしてチカチカ目を光らせながら、何かやり取りをし始めた。

ポイポイ「でーた共有完了。コレデ、ボクガぱーくヲ案内スル事モデキルヨ。」

あの子「そういう事か。じゃあ、お願いするよ。」

ポイポイ「マカセテ。」

イエイヌ「これからどうするのですか？」

あの子「モノレールで各エリアを見て回って、サバンナまで行ったら空港に向かおうと思ってるんだ。」

それを聞いて、イエイヌは目を伏せた。

イエイヌ「もう会えないですね。寂しいです。」

カラカル「ま、あんたが決めた事なら止めないけど。そうだ、せつかくだから、他のみんなにも会っていきなさいよ。」

ポイポイ「ぱーく中ノラツキービーストニ連絡シテ、各地ノふれんず達ニ、近クノ駅ニ集マルヨウ知ラセルヨ。ソレデイイカナ？」

あの子「うん、ありがとう。それじゃ、僕はもう行くよ。2人に会えてとても嬉しかったよ。」

こう言っあの子が腰を上げると、カラカルも立ち上がった。

カラカル「あたしも一緒に行くわ。どうせそこに帰るんだし。それに驚かせちゃったし、なんか心配だしね。」

一方イエイヌは、困ったような顔をしながらおずおずと言った。

イエイヌ「私は、あの…。」

あの子「無理しなくていいよ。イエイヌさんにとって、大切な約束だからね。」



イエイヌ「…はい。」

ポイポイ「ジャア、案内ヲ開始スルヨ。ボクニツイテキテネ。」

3人はおうちを出ると、モノレールが停まっている駅へと向かった。

イエイヌは玄関に立ち、3人を見送った。

柔らかな日差しに照らされた背中が、しだいに小さくなってゆく。それをじつと見ていると、知らないうちに涙が溢れてきて、3人の姿が歪み、周囲がキラキラで包まれた。

イエイヌ『そうだ、ご主人がいなくなった時もこうだった。私が本当にしたい事は…!』

ポイポイに先導されながら、あの子が心配そうな顔をしながらカラカルに尋ねた。

あの子「イエイヌさん、寂しそうだったけど大丈夫かな。」

けれどもカラカルは頭の後ろで手を組みながら、すました顔をしている。

カラカル「すぐに分かるわよ。」

あの子「?」

するとカラカルの耳がピクンと動いた。

カラカル「ほら、見て後ろ。」

2人が振り向くと、イエイヌが走って追いかけてきている。

イエイヌ「待ってください、やっぱり私も一緒に行きまーす!」

番外編4 なんて言ってるの？ 君の影

やがて4人は宿泊エリアの駅に到着した。

そこにはカラカルが乗ってきたというモノレールが停まっ  
ていて、窓越しに1台のラッキーマスターが運転席に  
いるのが見える。

そしてあの子がドアに描かれている手形  
マークに手をかざすと、ドアが開いてア  
ナウンスが流れた。

ラッキーマスター「じゃんぐる行きもの  
れーるハ、間モナク発車シマス。オ  
乗りノお客様ハ、閉マル扉ニゴ注  
意クダサイ。」

それから4人はモノレールに乗り込  
んだ。

カラカルとイエイヌは、興味津々な  
様子で車内を見回している。

カラカル「箱の中って、こうなっ  
てたんだ。」

イエイヌ「わあ、ながーい椅子が  
あります。」

しばらくすると、ドアが閉まった。

ラッキーマスター「発車シマス。」

その言葉が終わると同時にモノレール  
が動きだし、車体がガクンと揺れた。  
途端にカラカルとイエイヌはバラン  
スを崩し、床に尻餅をついた。

あの子「2人ともしつかり。」

あの子は2人に手を差し伸べて立ち上  
がらせると、座席に座らせた。

窓の外では、色とりどりの景色がす  
ごい速さで流れてゆく。それに気がつ  
いた2人はびつくりしたような顔をし  
ていたが、すぐに座席に膝をつく  
と、はしやぎながら眺め始めた。

イエイヌ「すごい、お外がビュン  
ビュン動いてます！」

カラカル「こんなにでつかいの  
に、あたしくらい速く走れるのね！」  
その様子を見て、彼はアムールトラ  
と一緒にモノレールに乗った時  
の事を思い出した。そういえば、  
彼女も夢中で窓の外を眺めていた  
のだ。

アムールトラ「おおー！初めて乗  
ったけどこれは凄いや。座ってる  
のに景色が動くなんて、不思議な  
気分だよ。キミにはこれが当たり  
前

なのかい？きつとパークの外には、私の知らない面白い事がたくさんあるんだろうな。」

そんな回想に浸っていると、アナウンスがした。

ラツキービースト「マモナクじやんぐるニ到着シマース。」

そうしてモノレールがジャングルエリアの駅に到着した。

4人が車両から降りると、ゴリラ達、ジャングルのフレンズが待っていた。

あの子は彼女達と話しながら、ジャングルを見て回った。

さすがのラツキービーストでも整備し切れないのだろう、かつての道は草木が生い茂りすっかり埋まってしまっている。そのため草をかき分けたり倒れた木を乗り越えたりして進んだのだが、すぐに息が切れてしまった。子供の頃は簡単に木々の間を走り抜ける事ができたが、今ではとても無理だった。

ジャングルの奥へと進むと、研究所が見えてきた。ここも鍵は開いており、難なく中へ入ることができた。

するとそこには、研究に使われていたであろうコンピュータや、ヒトが入れるくらい大きなカプセルが並んでいた。建物に電気は通っていたが、機器はどれもケーブルが抜かれていた。

他のみんなもここに入った事がないそうで、物珍しそうにキョロキョロとあたりを見回したり、キーボードを叩いたり、ガラスに映った自分の姿に手を振ってみたりしている。

ポイポイによると、既に全ての情報は電子データにして外部に移され、危険な物質なども処分されているため、もう誰が何をしようが問題ないのだそうだ。

あの子「触ると隔離施設がおかしくなるような事はないの？」

ポイポイ「ダイジョウブだよ。施設ノこんぴゅーたハ完全ニ独立シテイルカラ、外部カラ操作スル事ハデキナインダ。」

どうやらこちらができるのは、外から見守る事と、アムールトラが起きたら察知する事だけらしい。

またある机の上には、白衣を着た黒髪の女性と、サーバルに似た緑

色のフレンズの写真が飾ってあった。そして、それはカコ博士とセーバルだとカラカルが教えてくれた。

その近くの戸棚の中には、『アムールトラ』と書かれたファイルが何冊も置かれていた。開いてみると、その日の彼女の体調や実験の内容、研究者との会話や様子の変化などが細かく記録されていた。

興味深かったが、あいにくじつくり目を通して時間はない。これくらいにしてここから出ようと思った時、ふと『約束』と書かれた付箋が貼られている一冊が目にとまり、あの子はそれを持ってゆく事にした。

研究所を出ると、みんなで駅に向かった。

その道すがら、彼を最後まで見送りたいと、ジャングルのフレンズ達も一緒にサバンナへ行く事になった。そしてみんなでモノレールに乗った。

それから行く先々で、彼はフレンズ達とエリアを回り、それが終わると一緒にモノレールに乗った。こうしてサバンナへ向かう頃には、車内はフレンズでいっぱいになり、とても賑やかになった。

明るい笑顔に楽しげな笑い声、外のヒトからは失われてしまったものばかりだ。

無気力な世界で暮らしている時は気にならなかったが、いきいきしているフレンズ達を眺めていると、彼にはこれまでの生活が酷く寂しいものを感じられた。

その時フレンズの陰から、変わってしまう前の姿をしたアムールトラが現れた。そして彼女は彼の前がかがむと、何かを呟きながら小指を伸ばした右手を差し出した。

ラッキービースト「ゴ乗車、アリガトウゴザイマース。さばんな、さばんなデス。オ降りノ際ハオ忘れ物ニゴ注意クダサイ。」

アナウンスがして、彼は目を覚ました。イエイヌとカラカルが心配そうに彼の顔をのぞき込んでいる。

イエイヌ「大丈夫ですか？」

カラカル「具合でも悪いの？」

どうやらあれは夢だったらしい。彼は落胆したが、それを2人に悟られないよう寂しげな笑みを浮かべた。

あの子「ごめん、うとうとしただけだよ。今日は早起きしたから、そのせいだね。」

モノレールがサバナの駅に到着する頃には、日が傾き始めていた。そして車両から降りると、みんなで隔離施設へと向かった。

「アムールトラに会えるかな。」「あの子がいるから、起きるかもだよ。」「楽しみだね。」「感動の再会。」

みんなでワイワイ話しながら歩いてみると、隔離施設に到着した。それは相変わらず、周囲に威圧感を放ちながらそびえ立っていた。

カラカル「セルリアンの気配……。何度来ても、イヤな感じね。」

カラカルはこう言って眉をひそめた。なんでも縄張りの見回りも兼ねて、定期的にここを見に来ていそうさ。

あの子は施設の扉の前に立った。

この向こうにアムールトラがいると思うと、胸が高鳴った。

そして彼はそつと扉に手をかけた。もし今彼女が目覚めれば、すぐさまロックが外れ、ポイポイが知らせてくれる。

そんな一縷の望みを抱いて扉を力一杯引つ張ったが、扉は硬く閉ざされたままだった。

予想はしていたが、彼はがっくりと肩を落とした。だがどこかで、今の自分を見せずに済んで良かった、という気持ちがあった。彼はみんなに力のない笑顔を向けた。

あの子「どうやら、まだ眠っているみたい。」

カラカル「うーん、今日こそ起きると思っただけだな。」

イエイヌ「アムールトラさーん、大切なヒトが来てくれましたよー。」

他のフレンズ達も一緒になって、ひとしきり呼びかけた。しかし残念ながら、何の反応もなかった。

そうして、みんな後ろ髪を引かれる思いでそこを後にした。

そして、あの子が俯きながらポツリと呟いた。

あの子「さよなら、アムールお姉ちゃん。」  
するとカラカルが、ポンと彼の背中を叩いた。  
それはとても小さな声だったが、耳が良い彼女には聞こえていたのだ。

☆

こうして長い1日が終わり、とうとうお別れの時が訪れた。  
一行はサバンナエリアのゲートまでやってきた。その向こうには、  
空港へと続く大きな橋が架かっていて、たもとは自動運転の無人タ  
クシーが一台停まっている。

「それじゃあね。」「気をつけてね。」「忘れないよ。」

フレンズ達は口々にお別れの言葉を口にした。

あの子「ありがとうみんな。元気でね。」

イエイヌは、耳を伏せてしよんぼりしている。

イエイヌ「お元気で。」

その様子を見たあの子は、彼女の頭を撫でた。それからポイポイを  
抱き上げると、カラカルに手渡した。

あの子「ポイポイはここで、アムールお姉ちゃんを待ってて。そし  
ていつか目を覚ましたら、迎えにいつてあげて。」

ポイポイ「：ホントウニ、ソレデイイノ？」

ポイポイに聞き返されたのは、これが初めてかもしれない。けれど  
も彼は、悩みながらもこう答えた。

あの子「：うん。もし何か聞かれたら、お姉ちゃんに僕の映像を見  
せて、心配しないでって伝えてよ。」

ポイポイ「ワカツタ。」

カラカル「しっかりね。」

彼は無言でうなずくと、ゲートに向かって歩き出した。

するとポイポイからメロデイが流れ始めた。それはアムールトラ  
とお別れする時、みんなで歌ったあの歌だった。フレンズ達はメロ  
デイに合わせて歌いながら、手を振ってあの子を送り出した。

そしてあの子もみんなに手を振りながらゲートを出た。

涙で潤んだ目でみんなを見てみると、またアムールトラが現れた。彼女はみんなの後ろで寂しげな顔をしながら、小指を伸ばした右手を差し出して何か呟いている。

不思議な事に、彼女の言葉は聞き取れなくても、何を言いたいのかは彼には分かっていた。しかし漠然としたイメージのみで、それが具体的に何なのか、どうしても理解できなかった。

やがて歌が終わると、彼女の姿も浮かんだイメージも消えてしまった。

あの子はタクシーの後部座席に乗り込みドアを閉めると、窓を開けて叫んだ。

あの子「さよなら、みんな！」

そしてタクシーは彼を乗せて走りだした。

しだいにその姿が小さくなってゆき、とうとう見えなくなった。

「行っちゃったね。」「寂しいね。」

フレンズ達は名残を惜しみながら、各々のすみかに帰っていった。

一方カラカルはポイポイを抱いたまま、イエイヌと一緒にその場に残り、橋の向こうを見つめていた。

カラカル「あなたは帰らないの？」

イエイヌ「大きな船が飛ぶところを見てみたくて。」

それを聞いて、カラカルは憂いを帯びた顔でイエイヌを見た。

カラカル「そっか。」

やがて日が沈みあたりが暗くなり始め、空に一番星が輝きだした。

ポイポイ「ソロソロ出発ノ時間ダヨ。」

その言葉が終わると、橋の向こうで一機の宇宙船が飛び立った。

イエイヌ「わあー、あれがそうなんですネ。」

カラカル「あの子もあたし達のこと、見てるかな。」

2人が宇宙船に手を振っていると、宇宙船のそばに突然山が現れた。

カラカル「ん？」

イエイヌ「なんででしょう、あれ？」

すると黒い山に大きな目玉が現れて、宇宙船を睨みつけた。それは山などではなく、ドーム状の巨大セルリアンだった。そして体を震わせると、宇宙船を追いかけてグングン空へと伸びていった。

それを見た3人は、宇宙船に向かって必死に叫んだ。

ポイポイ「キケン！キケン！」

カラカル「捕まっちゃう！もっと高く飛んで！」

イエイヌ「危ない！早く逃げてください！」

3人の思いが通じたのか、宇宙船は一足早く空へと消えていった。だがそれを追うセルリアンの体はどんどん細長く伸びてゆき、ついに先端が見えなくなつた。それはまるで、一本の黒くて巨大な塔がそびえ立っているかのような感じだ。

ひとまず宇宙船が逃げられて、3人は安堵した。

ポイポイ「ヨカツタ。」

カラカル「びっくりした。なんなのあれ？」

イエイヌ「これまで見たことがないような、大きなセルリアンでしたね。」

ふと、カラカルの耳がピクンと動いた。誰かが橋の上を走って、こちらに向かって来る音が聞こえる。イエイヌも匂いで気付いた。

そちらを見ると、あの子が猫を抱き抱えながらこちらに走って来ている。そして彼の背後には、1匹の小型セルリアンが迫っている。

それに気付いた2人は無茶を承知で、彼を助けるためにゲートから飛び出そうとした。ところが徐々にセルリアンの体が碎けてゆき、薄闇の中に消えていった。

それからあの子が息を切らしながらゲートを潜り抜けてきた。そしてバツタリとその場に倒れた彼に、3人が駆け寄った。

イエイヌ「しっかりしてください、大丈夫ですか!？」

カラカル「一体どうしたのよ!？」

ポイポイ「キュウケイ、キュウケイ。」

彼はしばらくあえいでいたが、どうにか息を整えて起き上がると、これまでの事を話し始めた



番外編5 ……思い出した！ …… 君との約束 ……

狭くて誰もいない車内で、あの子は頭を抱えながら自問していた。『僕はどうして、パークに残るって言えなかったんだろう？みんな明るく接してくれて、あんなに楽しい時間を過ごせたじゃないか。そんなにあの星に移住したいのか？』

『いや、そうじゃない。そばに誰もいない生活なんて、考えるだけで耐えられない…！けどここにしようって考えると、頭の中に今のままじゃ駄目だって声が出て、言葉が出なかったんだ。一体なぜだろう？』

いくら考えても答えが出てこない。すがるような思いで持っていたアムールトラのファイルを開くと、あの付箋が貼られているページに研究員とのこんなやり取りが書かれていた。

——アムールトラに、不安がないのか聞いてみた。すると彼女は笑いながらこう言った。

アムールトラ「もちろんあるよ。でもどんな明日が見えたって、やめるわけにはいかないんだ。あの子と約束したからね。」

——約束の内容は教えてくれなかったが、彼女は右手の小指を見ながら、とても嬉しそうな顔をしていた。

あの子『約束…？なんだろう？』

とても大切な事のはずなのに、どんなに頭を絞っても思い出せなかった。

キキイイイイ!!!

突然タクシーの前に何か飛び出し、車が急停車した。

体が勢いよく前に倒れたが、手が塞がっていてあの子とはとっさにかばう体勢が取れなかった。

そして目の前に座席が迫ってきたかと思うと、そのまま顔をしたたかぶつけた。鼻に激痛が走り、目から火花が飛んで一瞬気が遠くなり、はずみで今まで被っていた帽子が脱げ、下に落ちた。

するとあの子の体から黒い影が飛び出した。そして次の瞬間、彼の頭の中に大切な思い出が蘇ってきた。

あれは計画（プロジェクト）が始まる少し前の事だった。

あの子はアムールトラと原っぱに寝転がっていた。彼が質問をすると、彼女はじっくり考えながら答えてくれた。そして寝転びながら、真面目な顔で彼を見た。

アムールトラ「キミにもいつか、嫌な明日が見える日が来るかもしれない。けどね、今日を必死に生きるのをやめちゃ駄目だよ。でないと、良い明日には絶対にたどり着けないんだから。約束だよ。」

そう言うと、彼女は小指を伸ばした右手を差し出した。

それを見た彼はぱつと起き上がると、はしやぎながら彼女と指切りをした。

あの子「約束！」

するとアムールトラも、満足そうに微笑みながらこう言った。

アムールトラ「今の笑顔、忘れないでね。」

あの子はようやく、モノレールとゲートに現れたアムールトラの幻が、この事を伝えようとしていたと気付いた。どうして忘れていたのだろう。

今にして思えば、あの時すでに彼女は何かを決意しているようだった。そして危険を承知で自ら計画（プロジェクト）への参加を申し出した。

残念ながらその結果は芳しいものではなかったけれども、日に日に状況が悪化してゆく中でも、彼女は常に前向きだった。

では自分はどうかだろう。子供の頃、彼はパークの職員になろうと考えていた。アムールトラの力になりたい、そんな思いがあった。

しかし彼女は長い眠りにつき、パークは閉鎖されてしまって、もう夢を叶えることはできないと思った。

それから彼は、その思いに蓋をして別の仕事に就き、目の前の事に集中した。けれどもそうしているうちに、いつの間にかその夢を忘れてしまった。

いつしか考えることをやめ、単調な日々を繰り返すようになると、どんな事にも心が動かなくなり、笑う事もなくなつた。

しだいにそれを心地よく思うようになり、無気力な世界が広がっても、おかしいと感じなくなっていくた。

改めて振り返ってみると、とても彼女に誇れるような人生ではない。だがたつたひとつだけ確かな事がある。あの場所で、自分にとって最も大切なフレンズを待ち続ける事こそが、一番やりたかった事だ。

そしてあの子は右手の小指を伸ばした後、その手をギュツと握った。

『もう、絶対に忘れない!』

彼の心に、再び情熱の火が灯った。

すると鼻がズキンと痛み、あの子は現実を引き戻された。彼は鼻をさすりながら運転席に声をかけた。

あの子「ちよつと待ってて。」

そして車の外に出て前方へ回ってみると、一匹の猫がうずくまっていた。猫は彼の姿を見ると駆け寄ってきて、顔を膝にこすり付けた。どうやら怪我はないようだ。

あの子「無事でよかった。けどどうしてこんな所にいたんだろう?」

あたりを見回しても人影は見当たらない。

この猫は空港から逃げて来たのかもしれないし、あるいはパークで暮らしているのかもしれない。

どちらにせよここに置いておくわけにはいかない、と考えた彼は猫を抱き上げた。

「イカナイデ：イカナイデ：。」

突如背後からぞつとするような声が出て、背筋が凍りついた。

振り返ると橋の真ん中に、彼と同じくらいの高さの影が揺らめいている。

それはひと抱えくらいのおおきさのセルリアンとなり、丸い体の中央にある巨大な目をギョロつかせながら、彼に迫って来た。

あの子『早く逃げないと!』

彼はとつさにこう判断し、猫を抱いたまま運転席に飛び乗った。

そして機器をいじって手動運転に切り替え、Uターンして目一杯アクセルを踏み込むと、パークに向かって猛スピードで車を走らせた。

薄暗がりの中を、あの子はひたすら突き進んだ。遙か彼方に、サブナエリアに通じるゲートが見える。

ふとバックミラーをのぞくと、あのセルリアンが追いかけて来ている。車との距離は、だんだん短くなってゆく。すると彼の頭の中に、かぼそい声が響いて来た。

「イカナイデ…イカナイデ…」

その声を聞いていると、体の力が抜け、何もかもどうでもよくなりそうになる。そしてセルリアンとの距離が縮まるにつれ、声は大きくなっていった。

彼は恐怖と戦いながら、必死にアクセルを踏んだ。

「イカナイデ…イカナイデ…オイテイカナイデヨオオ!!!」

不意に、頭の中に絶叫が響き渡った。それと同時に、車がガクンと揺れて止まった。

振り返ると、背後のセルリアンから伸びた触手が車に絡み付いていた。いつの間にか扉もガツチリと押さえつけられている。

どれだけアクセルをふかしても、車はじりじりと引き寄せられ、セルリアンの声もどんどん大きくなってゆく。

もう駄目だと諦めかけたその時、腕の中の猫がじつと見つめているのに気付いた。そんな猫の温もりが、あの子に勇気をくれた。

彼は衝撃に備えて身構えると、思い切り車をバックさせた。

爆音を轟かせながら車はセルリアンに向かっていった。

ドン!!!

そして激しくぶつかった。車は後部が大破し、動かなくなった。さしものセルリアンも面食らったのか、触手の拘束が緩んだ。

すかさず彼は体当たりをして扉をこじ開けると、運転席から飛び出して、猫を抱えながらパークに向かって必死に走った。

あれほど遠くにあったゲートが、もう目の前にあった。そこには力

ラカルとイエイヌとポイポイの姿が見える。

セルリアンも追いかけてきているが、体が崩れ始めている。その時にはもう、あの声も聞こえてこなくなっていた。

あの子「そうして、やっとの思いでセルリアンから逃げ切れたというわけ。」

それを聞いたポイポイが嬉しそうに言った。

ポイポイ「宇宙船二八乗ラナカツタンダネ、ヨカッタ。オカエリ、オカエリ！」

あの子「ただいま。宇宙船がどうかしたの？」

カラカル「あれ見て。」

カラカルが指差した先を見ると、暗がりの中に真っ黒で巨大な塔がそそり立っていた。彼は事情を聞いて寒気がした。もはや宇宙船の無事を祈ることしかできなかった。

カラカル「危ないところだったのね。」

イエイヌ「戻ってきてくれて、本当に良かったです。」

あの子「ありがとう。そうだ、あの猫は？」

見ると、猫は近くの草むらでぐっすり眠っていた。それを見た3人は顔を見合わせて笑った後、体を寄せ合って眠った。

## 番外編最終話 君の傍で

○おはよう！　く　新たな日常　く

翌日から、あの子のパークでの生活が始まった。

昨日の暗がりでは分からなかったが、猫は真っ黒に汚れていた。

そんなわけでパークでの最初の仕事は、この子を綺麗にする事となった。早速洗ってみると、金色の毛皮のサーバルキャットだった。

そしてこの子はサバナで、カラカルと過ごすこととなった。

あの子は宿泊エリアやセントラルホテルで寝泊りしながら、かつて職員夫婦がやっていたように、パークの清掃をしたり、ラッキーマスターと一緒に施設を整備したりして過ごした。

中でもサバナの隔離施設には毎日足を運んだ。

ポイポイと一緒に施設の周りを掃除しながら、壁越しにアムールトラに話しかけ、今日も起きなかつたと肩をすくめて帰る、それが日課となった。

パークを歩いていると時折セルリアンに出くわす事もあったが、その都度フレンズに助けってもらった。またフレンズも、困ったことがあつたら彼に相談した。

またでっかい箱に乗りたい！という要望が多かったので、彼はパークを回るついでに、フレンズと一緒にモノレールに乗った。

そうした利用が広まるにつれ、違うエリアのフレンズ同士で顔を合わせる機会が増え、自然と交流が深まっていった。

すると自分の縄張りだけでなく、他のエリアやセントラルパークで友達と過ごすフレンズが増えていった。また、ご飯を持ち寄ってレストランで食べたり、ホテルで休んだり、施設が利用される事も多くなった。

月2回、彼は遊園地を開放した。その日はラッキーマスターからお知らせを受け取ったフレンズ達がパーク中から集まって、1日中はしゃぎ回った。

こうして、あの寂しげな雰囲気が一変し、パークは笑い声の溢れる明るい場所となった。

ポイポイは、ラツキービースト達とやり取りしているうちに、彼らと同じようにフレンズと接するようになった。生態系の維持を原則とし、できるだけ介入を避けるため、ヒトの緊急時以外はフレンズと話さなくなった。言葉遣いや仕草もそっくりになり、色が違っていなければ、もう彼にも見分けがつかなかった。

パークには、ラツキービーストのメンテナンスをする場所もあった。フレンズが具合の悪いラツキービーストを連れてくるたびに、彼はそこで修理を行った。

とはいえ部品を交換する事は滅多になく、専用の機械にセットしてある程度休ませれば、大抵はそれで元気になった。

空港の黒い塔は、いつしかセルリアンのかけらで構成された輝くタワーとなっていた。彼は何度か端末を見てみたが、移住先の星から通信が届くことはなかった。

はたしてセルリアンは宇宙船を追って、あの星にたどり着いたのだろうか。

向こうでは撃退したかもしれないし、あるいはこのことと同じ光景が広がっているかもしれない。

#### ○セルリアンレポート

時折、彼は研究所を訪れた。ここはビースト計画(プロジェクト)以前はセルリアンの研究が行われていて、アムールトラ関連以外にも、沢山の資料が保管されていた。

そしてある日、こんな物が見つかった。もしも研究が続けられ、これが公表されていたら、世界はこうはならなかったかもしれない。

#### ●とある研究者の日記

A日

私の同僚に、異様にセルリアンを恐れる者がいる。なんでもその生態以前に、見た目が生理的に受け入れられないそうだ。

その事が彼のセルリアン研究の原動力にもなっているのだが、事あるごとに近くで叫び声を上げられるのには参っている。

まあヒトの価値観はそれぞれだ。私もゴキブリが大の苦手だ。

B曰

このところ、彼がセルリアンを恐れなくなった。

それは良いのだが、あれほど研究熱心だった彼から、さっぱり意欲が感じられない。一日中、コンピュータの前でぼうっとしながら宙を眺めている。

話を聞いてみると、「怖くなくなったらどうでもよくなった。」そうだ。一体どうしてしまったのだろうか。

C曰

突然、彼が元通りになった。

どうゆう事かと訝しんでいたら、彼が私のところにやってきて、「昨日ベッドから落ちたら目の前に小さなセルリアンがいたんだけど、飼い猫が追っ払ってくれた。」と言った。

普段なら夢だと片付けるところだが、これまでの経緯は先日読んだレポートと妙に共通点があった。

●そのレポート

フレンズはサンドスターが適切に供給されていれば、老いる事も死ぬ事もない。これはサンドスターが持つ、生物の状態を維持する働きのためだと考えられている。

パークには普通の動物も生息している。彼らはここで成長し、繁殖している。そんな彼らを眺めていて、ふと死体が見つからない事に疑問を感じた。

これについて興味深い報告がある。ある日、たまたまある職員が鳥の死体を見つけたが、それは全身が輝きに包まれたかと思うと、光の粒となって消えてしまったというのだ。これもサンドスターの力なのだろうか。

サンドスターもセルリウムも、パークから出ると力を失って消滅してしまうため、ここでしか直接観察する事は出来ない。

どちらも今の所、ヒトへの影響は無いとされている。

しかしセルリウムは、ヒトの体内に長い間留まり続けることが確認されている。しかもこの状態では、パークの外でもある程度の期間消



滅することがない。また、強い刺激で体外に飛び出す事もある。これがセルリアンに変わる可能性も考えられる。

あくまで想像だが、もしヒトの体内でセルリウムが徐々に変異し、ヒトが持つ輝き、例えば情熱や希望、思い出などを積極的に取り込んでゆけばどうなるだろうか。

おそらく宿主はいずれ心を食い尽くされ、無気力になるだろう。

もしも変異したセルリウムが、何らかのきっかけで体外に飛び出し、ヒトの世界に適応したセルリアンが生まれたら？それが移動しながら変異セルリウムを大量にばらまいたら？

そうなってしまうたら、最終的には全てのヒトが変異セルリウムの宿主となる。

その時世界はどうなっているのか。恐ろしくて考えたくもない。

○待ってるよ、お姉ちゃん

それから数十年後。

あの子はずっとパークで幸せに暮らしていたが、今ではすっかり歳を取り、寝て過ごす事が多くなっていた。

彼は居住エリアで、イエイヌと一緒に暮らしていた。

時折フレンズが訪ねてきた。そんな時はアムールトラの事を話したり、ポイポイの記録映像を見せてあげたりした。

ある朝、あの子がベッドで目を覚ますと、イエイヌがやってきて、彼の顔をのぞき込みながら嬉しそうに挨拶をした。

イエイヌ「おはようございまーす。表に誰か来たみたいなので、ちよつと見てきますね。」

そう言うと、イエイヌは玄関から出て行った。彼は少し首を動かして、その後ろ姿を見送った。

話の途中から、彼にはイエイヌの声が聞こえなくなっていた。それになんだか、体の周りにキラキラしているものが見える。

彼はふうつと息を吐くと、枕元のポイポイに声をかけた。

あの子「おはよう、ポイポイ。」

ポイポイ「オハヨウ。今朝ハ気持チノイイ青空ダヨ。」

あの子「ごめんねポイポイ、僕はそろそろ、行かなきゃならないみたいだ。こんなことを頼むのは申し訳ないけど、どうかパークのみんなを見守りながら、アムールお姉ちゃんが起きるまで待っててあげてね。」

そう言い終わると、急に体が軽くなった。

気がつくとは彼は子供の時の姿で空に浮いていて、体中が輝きに包まれていた。すると傍に職員夫婦が現れた。2人とも彼を見て微笑んでいる。

そして体が徐々に光の粒となり、少しずつ空に消えてゆく。

あの子「イエイヌさんが言った通りだ。」

そこから見下ろすと、家の窓から空になったベッドと、枕元で彼の方を見ているポイポイが見えた。

あの子「パークのみんな、今までありがとう。僕はずっと、空からみんなを見ているよ。そしてアムールお姉ちゃん、必ず帰ってきてね。いつまでも待ってるからね。」

3人は輝きとなつて、風と一緒に空へと散っていった。そして、それをじっと見ていたポイポイがこう呟いた。

ポイポイ「マカセテ。」

しばらくして、何も知らないイエイヌが、2人のフレンズを連れて帰ってきた。

イエイヌ「あれ、ボスだけですか？一人で散歩に行ったのかな。カラカルさんが新しいお友達と一緒に遊びにきてくれたのに。」

カラカル「元気があっていいじゃない。帰ってきたら、またお話を聞かせてもらいましょ。ね、サーバル。」

サーバル「うん！どんなヒトなんだろう、楽しみだなー。」

イエイヌのおうちの中に、彼女達の明るい話し声が響き渡った。そして窓から穏やかな日差しとともに、清々しい風が流れ込んできた。

ポイポイはベッドの上で、その様子を静かに見守っていた。